ISSN 1341-0350
Sanyō ronsō

山陽論叢

第 18 巻

2011 年 12 月

山 陽 学 園 大 学

目　　次

論文

インプロ・ワークショップが大学生の自尊感情に及ぼす影響 …… 石原 みちる … 1
A Study on Confucian View of the Superior Man …… Han I … 15
遍路認識論あるいは健全なる巡礼精神：
　汎＝反遍路のあり方をめぐるいくつかの問題 …… 関 三雄 … 25
小学校「外国語活動」のための現職教員校内研修の試み
　…… 清水 律子,久保田 靖子,中野 香 … 40
子宮筋腫合併妊婦の看護支援の検討
　―1症例の経験より― …… 妹尾 未妃,富岡 美佳,中塚 幹也 … 55
性に関する親子間コミュニケーションのあり方の検討
　―男子を持つ母親の語りの検討― …… 梅﨑 みどり,富岡 美佳 …67

翻訳

ロシアのポストモダン哲学について
　…… 尾崎 誠,ヴァシリイ・グリツエンコ,
　タチアーナ・ダニルチェンコ,中富 清和 … 76

論文

インプロ・ワークショップが大学生の自尊感情に及ぼす影響

The Effect of Improvisation-workshop on Self-Esteem in University Students

石原みちる*

Michiru Ishihara

キーワード：インプロ，自尊感情，参加体験型授業
Key Words: improvisation ，Self-esteem，Leaning by experience

Ⅰ はじめに

筆者は大学教員としての授業担当と学生相談室の相談員を兼任する立場から，大学生の自信の無さ，自尊感情の低さがかねがね気になっていた。また授業においては，教員である筆者と学生の共通の体験，及び学生同士の共通の体験が少ないという思いを抱いていた。そこで，平成 17 年度より平成 23 年度にかけて，授業に外部講師を招いてインプロ・ワークショップ（以下，ワークショップ）を導入することにした。授業におけるワークショップの目的は，学生が自らの自尊感情に目を向ける，自らの五感，身体を使って主体的に体験することで心の健康を考えるというものであった。本論では，インプロと自尊感情について概観した後，ワークショップ体験前後の自尊感情の変化とワークショップを振った自由記述から，ワークショップが自尊感情に及ぼす影響を検討したい。

Ⅱ 問題

インプロについて

絹川（2002），高尾（2006）によると，インプロとはインプロヴィゼーション（improvisation）の略で，台本のないところから舞台上で物語を創造してく即興演劇のことである。もともとの起源は古代ギリシャやインドのシャーマン，道化による宗教的演劇に遡るが，16 世紀の即興喜劇以後，脚本と演出による演劇が主流となりインプロは影をひそめる。しかし，20 世紀半ばから脚本による演劇に疑問を投げかける流れが起き，再び欧米を中心に広がった演劇の一形態である。

アメリカでは，子どものグループ形成にゲームを取り入れた社会学者のネヴァ・ボイド(Neva L.Boyd)にヴァイオラ・スポーリン（Viola Spolin）が影響を受け，彼女が 1930 年代から児童演劇の指導のためにシアターゲームとよばれるゲームを考案，やがてショービジネスへと進出，発展していった流れがある（絹川，大野 2005）。

インプロの創始者の一人とされるキース・ジョンストン（Keith Johnston）は，1960 年代よりイギリスで，のちにカナダに移り，インプロの方法論をゲームやアクティヴィティーの形で学べるようにして

＊山陽学園大学総合人間学部生活心理学科

きた。そして現在，それらを体験的に学ぶワークショップは，俳優の訓練や演劇の上演のためだけでなく，学校教育や企業教育に取り入れられるようになっている。高尾自身がアメリカで体験したインプロのワークショップでは，俳優だけでなく，様々な職業の人々が，それぞれの目的をもって参加していたという。

日本でも，俳優の訓練としてだけでなく学校教育，企業教育としてインプロのワークショップが多く開催されている。絹川友梨（インプロ・ワークス代表）も俳優の訓練だけでなく一般向けのワークショップをおこなっているが，その経験からインプロが教育において「自己肯定」「他者肯定」「自信，安心，やる気」の良循環をもたらすことができると述べている（絹川 2005）。 今井（2005，2009）は，キースに学んだインプロの本質を損なわないことに主眼にワークショップを開催し，現代社会を生きていく上で欠かせない「自分の想いを的確に表現する」「他者を受け入れる」とった要素を指摘，インプロが「他者の違いを認め，自分の独自性を認める機会となる」と述べている。その他にも，インターネット上には企業，教育機関向けのワークショップ案内が少なからず見られる状況である。

高尾は，創造性の視点から大学生へのインプロ教育を大学の授業の中で継続的に行い，その実践を質的に検討して，参加学生の変化を7つあげている。7 つの変化とは，1：他人の評価を恐れなくなる，2：未来・変化を恐れなくなる，3：ネガティブな状態を超えてポジティブで楽しい状態となった，4：失敗することや，負けることを恐れなくなった，5：頑張らずに普通にできるようになった，6：そのままの自分でいられるようなった，7：他者との関係を構築し，協働を創造できるようになった，と述べられている。しかし，日本においてこうした一般のワークショップ参加者の変化を具体的に研究したものはこの高尾以外に筆者の知るところではない。

自尊感情について

自尊感情（Self-Esteem）を心理学的立場で研究したウィリアム・ジェームズ（James,W.）は，それを「自我の領域における自己評価の感情」，つまり自己に対する満足および不満足として捉え，願望（要求水準）に対する成功（失敗）の度合いであるとした。この感情は，自己概念を構成する様々な成分に対して個人が抱く感情であり，その個人がどの成分に価値を置くかによってその感情も異なることが明らかにされてきている（遠藤辰夫 1992）。つまり，個人にとって中心的価値をしめるものについての達成が，自尊感情を高めるとされている（井上 1992）。

ローゼンバーク（Rosenberg,M.,1965）は，自尊感情を質問紙法により明らかにしようとし，その自尊感情尺度（Rosenberg Self-Esteem Scale; 以下 RSES）は，日本はもとより各国で頻繁に使用されているところである。星野（1970）によると，ローゼンバークは自尊感情を「ひとつの特殊な対象，すなわち自己（the self）に対する肯定的または否定的な態度」と捉えているが，尺度を作成する際に，他者と比較しての「優越感」ではなく，個人が「これでよい（good enough）」と感じる内面的な自己への満足感を意味する感情を対象とした。遠藤由美（1992）は，これを完全性・優越性を含まない「自分なりの満足感」と整理している。また，近藤（2010）は，自尊感情を二つの領域で捉え，それらのうち他者との比較で優位に立つことや成功することで得られる自尊感情を「社会的自尊感情」，無条件で絶対的な感情としての「基本的自尊感情」と呼ぶことを提唱している。

日本では RSES を使った研究の多くが，山本ら（1982，ただし項目内容の明示は 2001）または星野の邦訳版を使用しているが，それらの邦訳の言葉上の問題点，統計的な問題点も近年多く指摘されており（清水・吉田 2008，内田・上埜 2010 他），今後精査されていく必要があると考えられる。本論ではバック・トランスレーションを経た梅垣（2002）の邦訳が分かりやすいと判断しそれを使用した。本研究の目的はワークショップ体験前後の被験者内比較であり、その目的を果たすことは可能考えたが、近年のRSES研究を鑑みれば，十分適切であったとは言えない。

自尊感情と教育における体験的活動

近藤は自尊感情の中でも他者との比較によらない基本的自尊感情は，共有体験によって育まれると考え，小学生の日常生活での家族，友人との共有体験が自尊感情と関連していることを見出している。では，教育における様々な体験的活動が自尊感情に及ぼす影響はどのように研究されているであろうか。牧野（2011）は中学生を対象とした単発型（1 日 6 時間）のコミュニケーション・スキル訓練の前後で自尊感情（RSES，山本邦訳版による）を測定しているが，変化は見られなかったとしている。三宅（2010）は小学生の 3 か月間 10 回のピア・サポート・トレーニングで自尊感情が上昇する傾向であったとしている。また，水野（2008）は大学生の自発参加・単発型の構成的グループエンカウンターの研究で，体験前後で自尊感情が有意に上昇したとしている。吉田（2007）は，大学生のキャンプ体験前後で，女子学生のみ自尊感情が有意に上昇したと述べている。これらの研究から，教育における体験的活動は，学校種によらず，単発型でも継続型でも，その内容によっては自尊感情を高める可能性が十分考えられる。近藤が示唆する日常的な共有体験（家族と食事をする，友達と遊ぶなど）だけでなく，教育における様々な体験活動が自尊感情を高めると考えられよう。筆者自身，絹川らのワークショップを体験し，その体験は自己信頼感，他者信頼感を育てるものであると実感し，授業に取り入れるに至ったのである。

以上のことから，本研究ではワークショップ体験前後の大学生の自尊感情の変化をとらえることを第一の目的とする。また，ワークショップが参加者にとってどのような主観的体験であったかを参加者の感想の分析から明らかすることを第 2 の目的とする。

Ⅲ 方法

対象：S 大学学生 108 名。授業の参加者数は，合計 131 名であったが，そのうち回答に不備のあったもの，30 歳以上および男子のデータを除き女子 108 名を分析対象とした（表 1）。女子のみとしたのは，S 大学が平成 21 年度以前は女子大であり，21 年度までは受講生は女子のみであったためである。

調査期間：平成 18 年 1 月から平成 23 年 7 月

調査方法：授業時間内に外部講師を招聘して，インプロ・ワークショップを行いその前後で RSES10 項目の邦訳（梅垣）を 5 件法（1. 全くそう思わない～5. とてもそう思う）で測定した。ワークショップ前の測定は，ワークショップを行なう前の回の授業で行なった。ワークショップ後の測定は，

ワークショップの次の回の授業で行なった。ただし，平成 20 年度のみ，次の授業時間の確保ができず，ワークショップ終了直後に行なった。ワークショップ後の授業では，2 回目の自尊感情の測定を行なった後，ワークショップ前の RSES を返却し，その後ワークシートに主観的体験の記入を求めた。肯定的，否定的両面の記述が具体的に得られるよう，「感想：楽しかったこと，いい感じがしたこと，不安・緊張その他，嫌な感じがしたこと，それぞれ，どんなことをどう感じたか」と問い，自由記述で記入させた注)。

なお授業名称は平成 17 年度から 21 年度は「カウンセリング」，22 年度から 23 年度は「こころと健康」であった。15 回のうち連続する2回分の授業（180 分）に外部講師を招いてワークショップを行った。「カウンセリング」の授業においては，目的として，インプロとカウンセリングとの共通点を考えることと，自らの自尊感情に目を向けること，自分の五感，身体を使って主体的に体験し心について考えることを参加学生に説明した。「こころと健康」の授業においては，自らの心の健康について五感を使った体験から統合的に考える，自らの自尊感情に目を向けることが目的と説明した。授業全体の目的は授業によってやや異なる部分はあるが，どちらの授業も学生自身の心のありよう，心の健康な働きについて学生自身が考え，自己管理できるようにするという面を含んでいる。つまり，自らの自尊感情に目を向ける，五感を使った体験から心の健康を考えるという2点が共通する目的であった。

表1.　対象

年度	分析対象		
	日本人学生（女子）	留学生（女子）	合計
17 年度	15	4	19
18 年度	14	0	14
19 年度	8	1	9
20 年度	12	2	14
21 年度	9	1	10
22 年度	20	2	22
23 年度	19	1	20
	97	11	108（人）

Ⅳ 結果

1 自尊感情得点の変化

1）ワークショップ体験前後の自尊感情得点

被験者ごとに体験前後の RSES の合計点を算出し，それぞれ体験前自尊感情得点，体験後自尊感情得点とした。また，体験後自尊感情得点から体験前自尊感情得点を引き，自尊感情変化得点とした。ただし，逆転項目（2，5，6，8，9）は，「1. 全くそう思わない」を 5 点として変換し，高得点

ほど自尊感情が高いことを示す。自尊感情変化得点による，低下群，無変化群，上昇群の人数を表2に示した。出現率の差は有意で($\chi^2(2)=57.722$, $p<.01$)，多重比較(ライアン法)によると上昇群が 73 名(67.6%)と有意に多かった。

表2. 自尊感情変化得点の3群の人数

自尊感情変化得点	(人)	%
低下群	21	19.4
無変化群	14	13.0
上昇群	73	67.6
合計	108	100.0

$\chi^2(2)=57.722$, $p<.01$

自尊感情得点を体験前後(2水準)，国籍(2水準)で比較したところ，体験前後の自尊感情得点の変化が有意で($F(1)=18.22$, $p<.01$)，体験後自尊感情(日本人 M=28.82, SD=6.77; 留学生 M=37.55, SD=5.30)が体験前自尊感情(日本人 M=26.32, SD=6.87; 留学生 M=32.73, SD=4.84)よりも高かった(表3，図 1)。

また，国籍の主効果($F(1)=17.51$,$p<.01$)が有意で，留学生の自尊感情得点が日本人学生よりも高かった。交互作用($F(1)=0.06$, ns)は見られなかった。

自尊感情変化得点の国籍のよる比較を行ったところ，日本人(M=2.50, SD=3.82)，留学生(M=2.82, SD=4.37)で，有意差はなかった($F(1)$ $F=0.06$,ns)。

つまり，自尊感情得点は体験前後ともに留学生の方が高いが，日本人学生・留学生ともに体験後に有意に上昇していた。よって，この後の分析は，日本人学生と留学生を合わせて行うことにした。

表3. 体験前後の自尊感情得点の変化 N=108

国籍	体験前後	n	自尊感情得点 平均	SD
日本人学生	体験前	97	26.32	6.87
	体験後	97	28.82	6.77
留学生	体験前	11	34.73	4.84
	体験後	11	37.55	5.30

国籍の主効果 $F(1)=17.51$ ** 体験前後の主効果 $F(1)=F(1)=18.22$ **

交互作用 $F(1)=0.06$ ns **$p<.01$

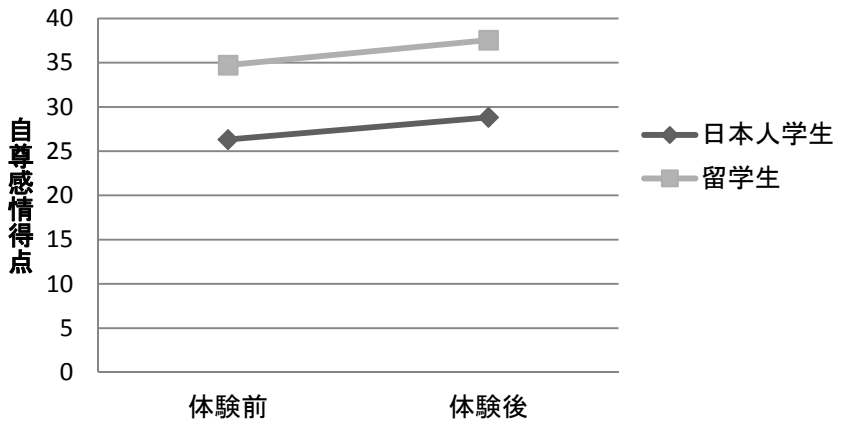


図1. 体験前後の自尊感情得点の変化

2) 実施年度による自尊感情得点の変化

自尊感情得点を体験前後（2 水準），実施年度（7 水準）で比較した（表4，図2）。体験前後の主効果（F(1)=48.17，p<.01）が有意であったが，実施年度の主効果（F(1)=1.89，p<.10）と交互作用（F(1)=2.24，p<.10）に有意傾向がみられた。体験年度の単純主効果は体験前(F(6)＝1.55，ns)には見られず，体験後に有意であった（F(6)＝2.30，p＜.05）。体験前後の単純主効果は 19 年度，22 年度において見られず，他の年度は体験後有意に高くなっていた。

表 4. 自尊感情得点の体験前後の変化：実施年度による比較 N=108

		n	自尊感情得点 平均	SD	単純主効果 F df＝1
17 年度	体験前	19	29.79	6.70	3.76 +
	体験後	19	31.74	7.74	
18 年度	体験前	14	29.07	9.09	3.16 +
	体験後	14	30.86	9.33	
19 年度	体験前	9	23.67	4.62	2.07 ns
	体験後	9	25.11	5.02	
20 年度	体験前	14	29.21	6.74	12.15 **
	体験後	14	32.71	5.74	
21 年度	体験前	10	26.90	6.47	21.91 **
	体験後	10	31.60	6.00	
22 年度	体験前	22	26.04	6.88	0.64 ns
	体験後	22	26.85	6.81	
23 年度	体験前	20	24.90	6.15	17.92 **
	体験後	20	29.15	4.74	

体験前後の主効果F(1)＝48.17**，年度の主効果 F(6)＝1.89+，交互作用 F(6)＝2.24+

+p＜.10 *p＜.05 **p＜.01

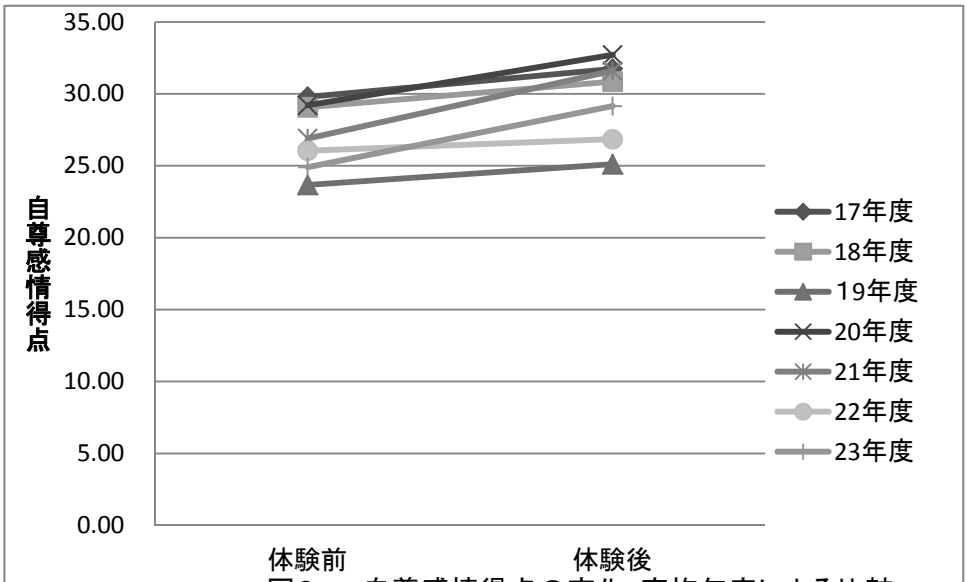


図2.　自尊感情得点の変化：実施年度による比較

3）RSES の項目による自尊感情得点の変化

RSES の項目ごとに体験前後の自尊感情得点を比較したところ，第 5 項目「私には，誇れるものがあまりないと思う」と 第 8 項目「自分自身にもっと誇りをもてたらと思う」の 2 項目で変化が有意でなかった（表 5）。

表5.　自尊感情得点の体験前後の変化：RSES 項目ごとの比較　　N=108

	RSES 項目 ※は逆転項目(平均は変換後の得点)	体験前 平均	(SD)	体験後 平均	(SD)	単純主効果 F df＝1
1	全体としては自分自身に満足している	2.23	1.01	2.64	1.11	19.17 **
2※	時々，自分は全然だめだと思う	2.67	1.19	3.12	1.17	32.69 **
3	私には良いところがたくさんあると思う	3.31	1.03	3.54	0.84	7.62 **
4	私はたいていの人と同じくらいには物事をすることができる	3.08	1.03	3.31	0.98	8.95 **
5※	私には，誇れるものがあまりないと思う	2.67	1.15	2.79	1.19	1.68 ns
6※	私は確かに役に立たないと感じることが時々ある	2.65	1.20	2.99	1.14	12.86 **
7	私は，少なくとも他の人と同じ程度には，価値ある人間だと思う	3.01	1.12	3.25	1.01	7.46 **
8※	自分自身にもっと誇りをもてたらと思う	2.32	1.09	2.30	1.07	0.06 ns
9※	だいたいにおいて，自分は落ちこぼれだと思いやすい	2.24	1.16	2.44	1.11	6.16 *
10	私は，自分自身のことをこれでよいと思う	3.00	1.10	3.33	0.99	12.35 **

体験前後の主効果　F(1)=45.60 **　　項目の主効果 F(9)＝29.05 **　　交互作用　F(9)＝2.82 **

**p＜.01　＊p＜.05

2 ワークショップの主観的体験の分析

1）主観的体験の自由記述

ワークショップの次の回の授業で主観的体験を記述させた内容から 22 の小カテゴリーを生成し，生成したカテゴリーで再度記述内容を分類した。さらに，類似のカテゴリーを併せて，A~L の 12 の大カテゴリーとした（表 6）。項目の出現率について，12 の大カテゴリーでコクランのQ検定を行なったところ有意差がみられた（$F(11)=143.460, p<.01$）。大カテゴリーでは，「A:人間関係の広がりと深化（55. 6%）」が最も多く，次いで「B:楽しさ・好奇心（32.4%）」，「C:視野の広がり（23.1%）」「D:協働・共有（23.1%）」，「E:対人面の不安（22.2%）」が多く記述されていた。

「A:人間関係の広がりと深化」は，小カテゴリー「1.人間関係が広がった（いろいろな人とコミュニケーションできてよかった，普段は関わらない人と関われた等）」，「2.信頼関係を重視（相手のことを真剣に考えていた，徐々に信頼関係ができたなど）」で，普段の人間関係を広げる体験，信頼関係を構築できたことを記述したものであった。「B:楽しさ・好奇心」は，「3.楽しさ，スッキリ感（楽しかった，スッキリしたなど）」の単純な肯定的な感想，「4.体を使う気持ちよさ（体を動かすのがよかった，声を出すのが心地よいなど）」の体を使うことを肯定的に述べたものであった。B には楽しさの内容を詳しく書いたものを含めていない。「C：視野の広がり」は，「6.個人の違いに気づき認める（自分とは違う発想が楽しいなど）」の自分とは違う他者を認めるもの，「7.視野の広がり（自分の気づいていない面に気づいたなど）」の自分の考え方の広がりを述べた内容であった。「D：協働・共有」は，「8.協働の良さ（話をつなげていくのが楽しかったなど）」の他者と協力して作り上げていく魅力，「9.行動，雰囲気の共有（相手と同じ行動をして楽しかったなど）」の一緒の行動をする，雰囲気を共有する楽しさを述べたものであった。否定的な体験としては，「E：対人面の不安」があり，「10.他者の目への不安（他人にどう思われるか不安など）」「11.他人に迷惑をかける不安」，「12.信頼構築ができない不安（苦手な人と組むのが不安など）」の，他者との関係での不安であった。

20%未満の出現率のカテゴリーは，以下の 7 つであった。「F:否定・肯定の両面的体験」は，緊張感が楽しいというものと，初めはネガティブだったのがポジティブに変化したという内容であった。「G:失敗の受容」は，失敗が周囲に受け入れられる安心感の記述であった。「H:外的な恐怖・困難」は，目をつぶって誘導される活動でぶつかりそうで怖かったというもの，留学生で言葉が出てこなくて困ったという内容であった。「I:自己表現」は，自分らしさを表現できた心地よさの記述であった。「J:主体性・積極性」は，徐々に自発的に動けるようになったことの記述であった。出現率は 10%未満だが，「K:孤独」の，取り残され感，集団の中で感じた孤独の記述も見られた。「L:全般に否定的」は，最後まで主体的に参加することができなかったとの記述であった。

2）自尊感情変化得点の 3 群による主観的体験の比較

自尊感情変化得点から低下群，無変化群，上昇群に分け，主観的体験について，各群の出現率を求めた（表 6，図 3）。上昇群と無変化群を合併し，低下群との出現率の比較を行ったところ，「C:視野の広がり」は，無変化群（50.0%）・上昇群（23.3%）に多かった（$\chi^2(1)=4.95, p<.05$）。「F:否定・肯定の両面的体験」は，低下群（33.3%）に多かった（$\chi^2(1)=5.21, p<.05$）。「K:孤独」

は出現率自体が低いが，低下群（14.3%）で多く見られた（$\chi^2(1)=8.19$, $p<.01$）。

表6.　主観的体験のカテゴリーの出現率　N=108

主観的体験のカテゴリー		全体 人	全体 %	低下群		無変化群		上昇群		χ2	
		108		21		14		73		df=1	
A	**人間関係の広がりと深化**	60	55.6	11	52.4	7	50.0	42	57.5	0.11	ns
1	関係が広がった（普段よく知らない人と関われてよかった。コミュニケーションできて良かった。）	37	34.3	7	33.3	6	42.9	24	32.9	0.01	ns
2	信頼関係を重視（信頼関係が徐々にできた。相手を尊重することが大切。相手のことを真剣に考えた。）	30	27.8	6	28.6	1	7.1	23	31.5	0.01	ns
B	**楽しさ・好奇心**	35	32.4	7	33.3	5	35.7	23	31.5	0.01	ns
3	楽しさ、スッキリ感（楽しかった。スッキリした。）	26	24.1	6	28.6	4	28.6	16	21.9	0.29	ns
4	体を使う気持ちよさ（体を動かすのがよい。　声を出すのが心地よい。）	4	3.7	1	4.8	0	0.0	3	4.1	0.08	ns
5	好奇心（新感覚の体験ができてよかった。遊びの要素があって楽しい。）	10	9.3	2	9.5	2	14.3	6	8.2	0.00	ns
C	**視野の広がり**	25	23.1	1	4.8	7	50.0	17	23.3	4.95	*
6	個人の違いに気付き認める（自分とは違う発想が楽しい。同じ体験も感じることが違うと思った。）	21	19.4	1	4.8	7	50.0	13	17.8	3.59	*
7	視野の広がり（自分の気付いていない面に気づいた。視野が広がった。）	5	4.6	0	0.0	0	0.0	5	6.8	1.27	ns
D	**協働・共有**	25	23.1	4	19.0	5	35.7	16	21.9	0.25	ns
8	協働の良さ（話をつなげていくのが楽しかった。）	10	9.3	2	9.5	3	21.4	5	6.8	0.00	ns
9	行動、雰囲気の共有（相手と同じ行動をして楽しかった。笑い合える雰囲気がよかった。）	15	13.9	2	9.5	2	14.3	11	15.1	0.42	ns
E	**対人面の不安**	24	22.2	4	19.0	5	35.7	15	20.5	0.15	ns
10	他者の目への不安（大勢の前で自己紹介がどう思われるか不安・緊張。他人にどう思われるか不安。）	15	13.9	2	9.5	4	28.6	9	12.3	0.42	ns
11	他人に迷惑をかける不安	4	3.7	0	0.0	0	0.0	4	5.5	1.00	ns
12	信頼構築ができない不安（誰が誘導しているのか不安。　苦手な人と組むのが不安。）	5	4.6	2	9.5	1	7.1	2	2.7	1.41	ns
F	**否定・肯定の両面的体験**	18	16.7	7	33.3	1	7.1	10	13.7	5.21	*
13	緊張・恐怖と楽しさ（緊張があって楽しい。恐怖感が楽しい。）	3	2.8	1	4.8	0	0.0	2	2.7	0.38	ns
14	肯定的感情への変化（最初は嫌だったのに楽しくなった。疲れたのに楽しかった。）	15	13.9	6	28.6	1	7.1	8	11.0	4.70	*
G	15 **失敗の受容**（失敗しても何度も挑戦するのがよかった。全て肯定的で安心した。心を素直にさせてくれる。）	17	15.7	2	9.5	3	21.4	12	16.4	0.76	ns
H	**外的な恐怖・困難**	17	15.7	1	4.8	3	21.4	13	17.8	2.37	ns
16	ぶつかる恐怖（目を閉じているとき、ぶつかるかと怖かった）	11	10.2	1	4.8	0	0.0	10	13.7	0.84	ns
17	出された課題ができない（話をつくるのが難しかった。）	6	5.6	0	0.0	3	21.4	3	4.1	1.53	ns
I	18 **自己表現**（自分の素を出せた。表現できてよかった。自分の内面から取り出す力が養われた。）	15	13.9	3	14.3	3	21.4	9	12.3	0.00	ns
J	19 **主体性・積極性**（自分から動けた。自由に動けるようになった。積極的に動けた。）	14	13.0	4	19.0	0	0.0	10	13.7	0.86	ns
K	**孤独**	4	3.7	3	14.3	0	0.0	1	1.4	8.19	**
20	一人になる不安（好みが同じ人がいなくて取り残された感じ。）	3	2.8	2	9.5	0	0.0	1	1.4	4.39	*
21	孤独感（みんなでしていても孤独感を感じた。）	1	0.9	1	4.8	0	0.0	0	0.0	4.18	*
L	22 **全般に否定的**（何でするのかわからない。雰囲気についていけなかった。）	4	3.7	0	0.0	0	0.0	4	5.5	1.00	ns

コクランのQ検定　F(11)=143.460**　　** p<.01　*p<.05

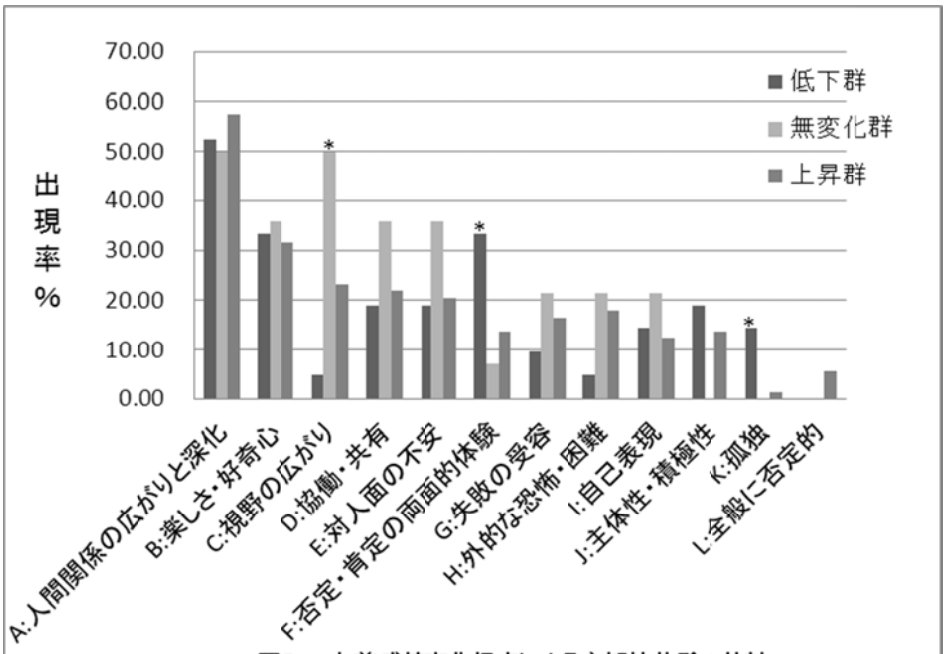


図3. 自尊感情変化得点による主観的体験の比較

V 考察

1 ワークショップ体験前後の自尊感情の変化

RSES による自尊感情得点は，日本人学生，留学生ともに体験後に有意に上昇していた。自尊感情変化得点からは，上昇群の人数が有意に多いことが明らかになった。RSES は，4 か月後の再テスト(桜井 2000)，連続する一週間の測定(小塩 2001)で比較的安定性が高いことが確認されている。また，小塩はその日に起こる出来事の影響で変動しうるとも述べている。すべての学生がワークショップ体験後に自尊感情が上昇したわけではなく，また，上昇した学生もその要因が全員ワークショップ体験であるとまでは言い難いがワークショップは多くの学生の自尊感情を高める効果があったと言える。ただし，その影響がどの程度持続するかについては確認されていない。

一方，日本人学生と留学生の比較では，体験前後ともに留学生の自尊感情得点が有意に高く，日本人学生に比べて留学生の自尊感情の高さが明らかになった。

また，実施年度ごとにみると，平成 19 年度と平成 22 年度においては，体験前後で統計的に有意な上昇は見られなかった。ワークショップの内容は毎年，筆者と講師で事前，事後の検討をおこない改善をしているが，参加学生との参加意識のずれなど，年度によって差が生じたものと考えられる。特に，平成 22 年度は授業が選択科目から，学科必修科目になった初めての年で，参加に対する個人の意思の関与が低い状態から始めるにあたって，講師，参加学生とも戸惑いがあったのも事実である。こうした，参加型の学習は，同じ内容を実施すれば同じ結果になるということはなく，計画通りに運ばないのが当然であることを示していると考えられる。

RSES の項目ごとの比較では，第 5 項目と，第 8 項目のみ変化が有意でなかった。第8項目については，「より自分に自信を持ちたいと思うようになった」という記述も実際にみられ，逆転項目で

ありながら，肯定的な意味に捉えられる場合もあったことが伺われる。第 8 項目は，清水・吉田が指摘している日本語版の問題点であり，田中（1999)が，高低両方の自尊感情に該当すると報告している項目である。本研究においても，同様の問題があったと考えらえる。今後，日本語版 RSES の検討が必要であろう。第 5 項目は，学生にとって「誇り」という言葉がなじみにくかったのではないかと考えられる。

2 ワークショップの主観的体験

参加者の主観的体験の自由記述から，その内容を検討する。「A:人間関係の広がりと深化」を半数以上が述べており，人間関係が広がったり，信頼関係をしっかりと作ったりすることが，参加者にとって肯定的に体験されていたことがわかる。高尾が継続的インプロ教育での学生の変化の一つとして，「7：他者との関係を構築し，協働を創造できるようになった」とあげているが，それに該当するものと考えられる。本研究のワークショップは継続的なものではないが，人間関係での肯定的な体験になり得たと言えるだろう。

カテゴリーとして次に多かったのが「B:楽しさ・好奇心」であった。ワークショップが全体として学生が楽しくリラックスできる雰囲気であったことが伺える。このカテゴリーには楽しさの中身を詳しく書いたものを含めていない。よって，「楽しさ」を具体的，分析的に記述することができなかった参加者にとっても，肯定的な体験であったと考えられる。

次に「C：視野の広がり」が多く，自分と違う発想や考えをもつ他者の違いを受け入れ，視野が広がる体験であったことが伺えた。また，「D：協働・共有」は，他者と協力して活動することを肯定的に捉えたもので，上述の高尾の「7」に含まれるものと考えられる。

否定的なものとしては，「E:対人面の不安」が記述されていたが，学生が，良くも悪くも人との関係に強く関心を向けていることが伺える。肯定的にも否定的にも人間関係が主観的に重視されていることが推察される。

記述人数は多くないが，「F:否定・肯定の両面的体験」は，高尾の「3：ネガティブな状態を超えてポジティブで楽しい状態となった」に共通するもので，初めは嫌だと思っていた活動が肯定的に変化する体験であったことが伺える。「G:失敗の受容」は，高尾の「4：失敗することや負けることを恐れなくなった」体験につながるもので，失敗が受け入れられる安心感の体験が述べられたものと考えられる。「I:自己表現」は，インプロという表現方法に直結するもので，自分らしさを表現できることを肯定的に体験していたと言える。「J:主体性・積極性」は，授業の目的として示していた「主体的に」ということにつながる記述で，他人の指示や真似でなく自分から動くことに目を向けた記述である。直接的に記述した人数自体は多くなかったが，他に分類された記述の多くも学生自身の言葉で記述されており学生が主体的に参加していたことが伺える。

数は少ないが，「K:孤独」，「L:全般に否定的」の記述は，ワークショップの体験が肯定的体験になり得なった学生もあることを示している。授業の一部として行う場合，そうした学生への配慮を今後もしていく必要があるだろう。

3 自尊感情の変化とワークショップの主観的体験の関連

体験前後の自尊感情の変化と，主観的体験の関連を分析した結果，自尊感情の変化によって差が見られたのは，「C：視野の広がり」，「F：否定・肯定の両面的体験」「K:孤独」であった。「C：視野の広がり」は低下群に少なかったことから，自分とは違う考えを受け入れたり，自分自身の気づいていなかった面に気づいたりすることが，自尊感情を高めることと関連していると考えられる。現在の自己を否定せずに新たな視野を持つことが，現在の自己を肯定する自尊感情を高めるのではないだろうか。

「F：否定・肯定の両面的体験」「K:孤独」は，低下群で多かった。「F：否定・肯定の両面的体験」の「14.否定から肯定へ」は，高尾が捉えた変化の「ネガティブな状態を超えてポジティブな」に該当すると考えられる。「初めは嫌だったがだんだん楽しくなった」という体験は，肯定的な体験であると考えられ，上昇群には体験されなかったとは考えにくい。上昇群の記述が少なかったのは，上昇群が同様の体験をしつつもそれを記述せず，強く感じた他の面を記述したためではないだろうか。「K:孤独」は出現率自体が少ないが，一人になる不安，みんなと活動していてもぬぐえない孤独感を体験する学生もあること，またそうした学生の自尊感情がワークショップで高まることが困難であることが伺えた。今後ワークショップをする際に注意していくべきことであろう。

以上のように，ワークショップが自尊感情を高める一定の効果があったこと，参加者には人間関係の広がりと深まり，楽しさ，協働と共有，視野を広める，失敗を恐れないといった体験になったことが考察された。

統計的な分析から，自尊感情の上昇との関連がみられたのは「C:視野の広がり」であった。自他の違いを認め視野が広がることと、自分自身への肯定的感情が、円環的に影響しあっていると考えられよう。

インプロは自己の行動やアイデアも，他者の行動やアイデアも基本的に肯定する。それ自体が自尊感情に影響したことも十分考えられるが，責められない，否定されない安心感を基礎として楽しさだけなく，恐怖感，不安感を同じ場で体験したことは，自尊感情の上昇と無関係ではないだろう。失敗が否定されない安心感の中で，徐々に主体的になり，他者と協働して創造するといったインプロ体験が，全体として自尊感情を高めることに寄与したと考えられる。近藤は無条件で絶対的な自尊感情は，他者との共有体験によって育まれるとしている。ワークショップの体験は，そうした共有体験のとしての意味を持っていたと考えられる。ただし，自由記述からは個々人が感じていることすべてを拾うことができないため，こうしたことは統計的な数値としてはつかめなかった面はある。

Ⅵ まとめ

本研究では，インプロと自尊感情について概観した後，インプロ・ワークショップ体験前後の大学生の自尊感情の変化をとらえた。RSES の得点は体験後有意に上昇し，ワークショップ体験が自尊感情を高める一定の働きをしたことが明らかになった。また，ワークショップの感想から主観的体験を分析したところ，人間関係の広がりと深まりについて，肯定的に述べたものが最も多かった。自

尊感情の変化との関連では，無変化群・上昇群に「視野の広がり」の記述が多く，他者の違いを受け入れることが自尊感情の上昇に関連していることが示唆された。よって，授業へのワークショップ導入の効果を確認することができた。

一方，本研究で確認された自尊感情の上昇がどの程度持続するかは把握できていない。また，主観的体験を捉える方法として自由記述のみでは不十分であった点は否めない。さらに，授業内で行うワークショップの課題として強く孤独感を感じる学生への対応についても，今後の課題としたい。

注） 被験者に対して，測定の目的は授業内の自尊感情を学生自身が自己比較するためであることを告げ，その後統計処理した研究データとしての利用の承諾を求めたが，承諾しない場合にも授業参加や成績に不利益がないことを説明した。ワークシートの自由記述についても研究データとして利用してもよいか意思確認した。なお外部講師に対しては事前に研究の承諾を得た。

謝辞

本研究を行うに当たり，17 年度・18 年度のワークショップ講師を務めてくださった伽羅氏（夢幻都市主宰），初年度からアシスタントとして，その後講師としてインプロ体験の場を提供してくださった菅田真理子氏（インプロ・OKAYAMA代表）に，また，参加者として研究に協力してくれた学生に，深くお礼申し上げます。

参考文献

遠藤辰夫 1992 セルフ・エスティーム研究の視座 遠藤辰夫他（編）『セルフ・エスティームの心理学』 1 章， ナカニシヤ出版 8-25.

遠藤由美 1992 個性化された評価基準からの自尊感情再考 遠藤辰夫他（編）『セルフ・エスティームの心理学』 5章，ナカニシヤ出版 57-70.

星野命 1970 感情の心理と教育（二） 児童心理，24（8），1445－1477.

今井純 2005 自由になるのは大変なのだ インプロ・マニュアル 論創社.

今井純 2009 即興し始めたニッポン人 1 論創社

井上祥治 1992 自己概念 遠藤辰夫他（編）『セルフ・エスティームの心理学』 4 章，ナカニシヤ出版 48-56.

絹川友梨 2002 インプロゲーム 晩成書房

絹川友梨 2005 インプロと教育 インプロ研究大会―インプロがもたらす教育的効果―基調講演 2005.7.23 於：岡山国際交流センター 主催：インプロ×OKAYAMA

近藤卓 2010 自尊感情と共有体験の心理学 金子書房

牧野幸志 2011 中学生を対象としたコミュニケーション・スキル訓練の開発（4） 経営情報研究 ，18（2），107-108.

三宅幹子 2010 大学生による小学生へのピア・サポート・トレーニングの効果 児童の社会性，自

己効力感,自尊感情において 日本教育心理学会総会発表論文集 (52), 302.
水野邦夫 2008 構成的グループエンカウンターによう自己概念の肯定的変容:大学生を対象とした自発参加・単発型による実践 日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集 (17), 226-227.
大野あきひこ 2005 解説—シアターゲームの発展 Viola Spolin（著）・大野あきひこ(訳)『即興劇—シアターゲームによる俳優トレーニング—』 未来社 333-340.
小塩真司 2001 自己愛傾向が自己像の不安定性、自尊感情のレベルおよび変動性に及ぼす影響 性格心理学研究, 10（1）, 35-44.
Rosenberg,M., 1965 Society and the Adolescent Self-image. Princeton:Princeton Univ. Press.
桜井茂男 2000 ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版の検討 筑波大学発達臨床心理学研究 12, 65-71.
清水和秋・吉田昂平 2008 Rosenberg 自尊感情尺度のモデル化 ： wording と項目配置の影響の検討 関西大学社会学部紀要, 39(2), 69-97.
高尾隆 2006 インプロ教育：即興演劇は創造性を育てるか？ フィルムアート社
田中道弘 1999 Rosenberg の自尊心尺度に対する回答理由の研究 日本青年心理学会第 7 回大会発表論文集, 29-30.
梅垣武 2002 日本語版 Rosenberg Self-Esteem Scale の検討と新たな翻訳版の作成 日本教育心理学会総会発表論文集 (44), 223.
内田知宏・上埜高志 2010 Rosenberg 自尊感情尺度の信頼性および妥当性の検討 ：Mimura & Griffiths 訳の日本語版を用いて 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 58(2), 257-266.
山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30(1), 64-68.
山本真理子（編） 2001 心理測定尺度集Ⅰ-人間の内面を探る（自己・個人過程） サイエンス社
吉田 充 2007 キャンプ体験が短期大学生の自尊感情と社会的スキルに与える影響 國學院短期大学紀要, 24, A3-14.

A Study on Confucian View of the Superior Man

Han I*

Key Words: Confucianism, humaneness, a superior man, the view of life.

1. Introduction

"He is truly a well-rounded Confucian gentleman." This is the highest praise to indicate that the man have many noble characters. In China, people are told to qualify for recognition of a gentleman, one has to be a great scholar, an artist and also a very cultured person. He must be full knowledgeable about Chinese history, literature, philosophy, traditions, customs and the arts. Of course, he also must be a person of character.

When Chinese talks about the personality or character of a man, he will quote Confucius (better known as Master Kong, 551－479 BC) from the *Analects* (*Lun Yu*), a famous collection of saying of Confucius and incidents from his life, compiled by students of his disciples. The Chinese have always looked back to history, not because they are backward looking or are simply conservative; they do so for concrete evidence and past experience. As a result, they can learn about human nature or the way of life from Confucian classics such as the *Four Books* (the *Analects*, the *Mencius*, the *Great Learning* and the *Mean*),the *Five Classics* (the *Book of Changes*,the *Book of Documents*, the *Book of Poetry*, the *Record of Ritual*, the *Spring and Autumn Annals*) and so on.

As everybody knows, Confucian philosophy has to do primarily with ethics and conduct in actual life, and not to any great degree with abstract questions such as are dealt with in Western metaphysics. Confucius also promoted behavioral standards combined with humanism, thus exerting enormous influence upon Chinese thought and life. This is to say that the Chinese have found the value judgments about human being from Confucianism from ancient times.

Today, the world is getting smaller every day because of improved means of communications and the progress of globalization. Some practices have been lost or forgotten because of changes in human values as a result of changes in environment and social conditions. This does not mean, however, that because of the changes in human values, old values and practices are not good or no longer valid. This may be so in certain cases, but many values are neglected because of insufficient effort made to explain their meaning within the modern context. People do not understand them and

*班　偉：山陽学園大学総合人間学部言語文化学科

therefore abandon them. It is for this reason that this paper is written.

2. On Adversity and Learning

Needless to say, Confucius was the first philosopher and the greatest teacher in Chinese history. He molded not only the civilization of China, but also the Chinese ideal of life. Confucius has been credited with a number of literary works, but there is no hard evidence that he wrote anything at all. His abiding influence was attained not through books but through his effect upon the students who gathered around him day-to-day. The contents of the Confucian canon varied over time. He is said to have taught his pupils the classics of poetry, history, music and rites. He also used the very concise language to enunciate the main guidelines of a man's life in some informal ways.

Before considering the Confucian view about human virtues, it is necessary to mention his background. Confucius' forefathers were nobles of the state of Song at a time when China was divided into many small states. His great grandfather moved to the state of Lu when his political career failed. Confucius' father became a governor in Zou Country (present-day Qufu in Shandong Province). When Confucius was born, his family's position already declined. As a boy, Confucius worked in a warehouse and tended cows and sheep. He also worked as a helper to a master of funeral ceremonies for the nobles. Recalling his childhood Confucius later said,"I was poor and lowly when young. That's why I can do many humble things."(*Analects*, Book 9－6) Confucius was badly off and had wide experience in life, it became the starting point of his thought.

According to Confucius' account, "A gentleman avoids seeking to satisfy his appetite to the full when he eats and avoids seeking comfort when he is at home. He is diligent in deed and cautious in word, and he associates with possessors of the Way and is put right by them. He may simply be said to be fond of learning."(*Analects*, Book 1－14) Among the group of his disciples, Confucius particularly admired Yan Hui as an ideal man, saying, "A man of quality indeed was Hui! He lived in a squalid alley with a tiny bowlful of rice to eat and a ladleful of water to drink. Other men would not endure such hardships, but Hui did not let his happiness be affected. A man of quality indeed was Hui!" (*Analects*, Book 6－11) He also stated clearly his opinion like this, "A public servant who is intent on the Way, but is ashamed of bad clothes and bad food, is not at all fit to be consulted."(*Analects*, Book 4－9) Although Confucius had fell into adversity, all his life he struggled against it. He is the type that will succeed in life.

In Confucius' view, "The gentleman plans for the Way and does not plan for food. ……He is concerned about the Way and is not concerned about poverty."(*Analects*, Book 15－32) However, this is not to say that Confucius was refusing to accept material comforts. He was just finicky about the proper means to obtain them. What he said was as follows, "Riches and honors—these are what men desire, but if this is not achieved in accordance with the appropriate principles, one does not cling to them. Poverty and obscurity—these are what men hate, but if this is not achieved in accordance with the appropriate principles, one does not avoid them. If a gentleman

abandons humaneness, how does he make a reputation?" (*Analects*, Book 4－5) There is another famous saying, "Even in the midst of eating coarse rice and drinking water and using a bent arm for a pillow happiness is surely to be found; riches and honors acquired by unrighteous means are to me like the floating clouds."(*Analects*, Book 7－16) It can be said that the practice of asceticism will help to form the characters of young people.

Like many other children of ruined families, Confucius suffered many hardships after lost his parents very early in life. But he had a desire to improve himself. As a boy and young man he probably received the elements of education as an apprentice official engaged in clerical work. Ambitious students work hard. His passion for knowledge and aptitude for study made him in the end one of the most accomplished scholars of his day. At last Confucius made his way out of adverse circumstances. He said of himself in his later years, "At fifteen, I set my mind bent on learning. At thirty, I was established. At forty, I had no doubts. At fifty, I knew the decrees of Heaven. At sixty, my ear was in accord. At seventy, I could follow what my heart desired, without transgressing what was right."(*Analects*, Book 2－4) These are six very relevant instructions to men at different stages of their lives. Confucius' theory of innate goodness had far-reaching implications, for it assumed that it was possible for this goodness to expressed, through education and effort, by all people.

3. On Humanity and Humanism

At fifty-one Confucius became a magistrate, and later minister of justice in his native state of Lu. Failing to carry out his political reforms, he set out to travel from state to state hoping to convert feudal rulers to his ideals. These travels lasted for about fourteen years. Confucius spent much of his life debating with the feudal rulers and trying to win them over to his doctrines, but often to little avail. Ultimately disappointed, he returned home to teach and write. Throughout his experience both joy and sorrow in life, Confucius showed a keen insight into human life.

Confucius, in his reference to conduct and character, uses the term "junzi"（君子）which has been translated into various term such as "superior man", "noble man" or simply "gentleman". This is the difficulty often faced in the translation of a Chinese term into English which does not have all the equivalents of Chinese word. The word appears 107 times in the *Analects*, and usually contrasts with the term "xiaoren"（小人）literally meaning "a small man" or "a petty man". There is no doubt, however, that in the context in which "junzi" is used, it refers to a man of learning and of proper conduct and character. It can therefore be better understood if the word "gentleman" is used for want of a more suitable equivalent. So every Chinese educated person aims at being a "junzi" according to Confucian standards which we must admit are difficult to attain. Even Confucius himself said so. First of all, "junzi" must be a man of great humanity.

It is said that Confucius was very sympathetic towards the others. He often used the term "ren"（仁）to express the perfect virtue of human being, it means humanity or

humaneness. Confucius talked about "ren" more than anything else. The word appears 109 times, more frequently than any other word, in the *Analects*. All his teachings may be said to center on this idea of humanity. When asked about "ren", Confucius said, "It is to love others." (*Analects*, Book 12－22)For Confucius, humanity makes a man different from an animal. It is the root of all particular virtues such as filial piety and brotherly respect, loyalty and faithfulness. A man of humanity "loves men". Negatively, he "does not do to others what he does not want others to do to him" (*Analects*, Book 12－2, Book 15－24); positively, "wishing himself to be established, sees that others are established, and wishing himself to be successful, sees that others are successful." (*Analects*, Book 6－30) A person who acts up to this ideal is the "superior man"—the "junzi". Confucius also believed that "The gentleman brings to completion the fine qualities in others and does not bring to completion the bed qualities in others. The small man does the opposite of this." (*Analects*, Book 12－16) There is no doubt that Confucius placed great emphasis on building character for his disciples.

Before Confucius, "junzi" meant the son of a ruler, the implication being that nobility was a matter of social origin. But for Confucius, the "junzi" is the moral man whose nobility is that of character and not of blood. He is a man who is "wise, humane, and courageous" and who "learns the truth and loves men". Confucius distinguished sharply between the superior man and the small man, he made some witty remarks as follows, "The superior man is familiar with what is right, just as the small man is familiar with profit" (*Analects*, Book 4－16); "The progress of the superior man is upwards; the progress of the small man is downwards"(*Analects*, Book 14－23); "What the superior man seeks, is in himself.What the small man seeks,is in others." (*Analects*, Book 15－21) Because anyone can become a superior man and－after that－a sage, the common humanity is indispensable to anyone.

Personal perfection, however, is impossible without a good society. Confucius was therefore always careful to stress his precepts about peace and social harmony. It is significant that the word "ren" means both the individual man and also human relationship, or society. This subject was treated as follows, "The gentleman has universal sympathies and is not partisan. The small man is partisan and does not have universal sympathies."(*Analects*, Book 2－14) Confucius believed that "The gentleman, although he behaves in a conciliatory manner, does not make his views coincide with those of others; the small man, although he makes his views coincide with those of others, does not behave in a conciliatory manner."(*Analects*, Book 13－23) According to the Confucianists, the ideal human relationship is, "The gentleman collects friends through culture, and through his friends supports humaneness."(*Analects*, Book 12－24) In Confucius' view, "There are three kinds of friendship which are beneficial and three kinds of friendship which are harmful. It is beneficial to make friends with the upright, to make friends with the sincere, and to make friends with those who have heard many things. It is harmful to make friends with the ingratiating,to make friends

with those who are good at seeming pliant, and to make friends with those who have a ready tongue." (*Analects*, Book 16－4)

When Zizhang, one of Confucius' disciples, asked about humaneness, Confucius replied, "One who can bring about the practice of five things everywhere under Heaven has achieved humaneness." He begged to ask what they were, and was told, "Courtesy, tolerance, good faith, diligence, and kindness. If one is courteous, one is not treated with rudeness; if one is tolerant, one wins over the multitude; if one is to good faith, others give one responsibility; if one is diligent, one obtains results; and if one is kind, one is competent to command others." (*Analects*, Book 17－6)

At the heart of Confucius' teachings lay a profound sense of humaneness, which means acting with sensitivity to the nuances of human relationships. All his life, Confucius stressed the virtues of humanity, loyalty, righteousness, and sincerity. As a result of his central concern with man and with human relations, Confucius carried Chinese humanism to a climax.

4. Moral Values of the Superior Man

As is generally known, though as a politician Confucius was largely a failure, as a teacher he was a great success. To count the prevailing anarchy, he instilled into his disciples the high moral values which he believed were current in the golden age of the early days of the Zhou Dynasty. He was China's first full-time, professional teacher, and the first to teach the principles of conduct, loyalty, faithfulness, performance of propriety, that is moral education, instead of purely vocational subjects.

There are many qualities of a gentlemen enunciated by Confucius in his dialogues with his disciples and others. It will be sufficient to quote just a few. Confucius said that there were four of the ways of the gentleman present in Zichan, who was the chief minister of the state of Zheng and a great statesman of the period, "in his conduct of himself he was courteous, in his service of his superiors he showed veneration, in his provision for the needs of the people he was generous, and in his employment of the people he was righteous." (*Analects*, Book 5－16)Confucius also praised Yan Pingzhong, the chief minister of the state of Qi, for his good personality, "Yan Pingzhong was good at relationships with others; even over a long period he showed respect for them." (*Analects*, Book 5－17)We can find many qualities in common among Zichan, Yan Pingzhong and Confucius. Zigong, another Confucius' disciple, enumerated all the personality of Confucius as "warm"(温), "amiable"(良),"courteous"(恭), "frugal"(倹), "deferential"(譲)(*Analects*, Book 1－10). Strength of character is really strength of the mind, according to the Confucianists. When a man has cultivated these virtues through mental discipline, we say he has developed his character.

It was said that a gentleman has three countenances: "When one sees him from a distance he is rather forbidding, but when one approaches him he is genial, and then when one listens to his words they are strict." (*Analects*, Book 19－9) He also has nine considerations: "When he looks he is anxious to see clearly. When he listens he wants

to hear clearly. In appearance he wants to be affable. In his demeanor he thinks of modesty. In his speech he thinks of loyalty. In his affairs of business he is anxious that he is reverently respectful. When he is in doubt he asks questions. When he is angry he thinks of the difficulties he might be in. When he sees that there is something to be gained he thinks of what is the right thing to do."(*Analects*,Book16－10)The gentleman considers righteousness to be essential in everything. Humility is also a characteristic of Chinese behavior. Greatness comes out of humility and not arrogance.

In very concise language enunciated by Confucius, these are the main guidelines of a man's life. Followers of Confucius developed his teachings in various directions. Zengzi, one of Confucius' disciples, expressed his own opinion, "The things which the gentleman values in the Way are three: in transforming his demeanor he banishes violence and rudeness, in composing his expression he keeps close to sincerity, and in the style of his utterances he banishes coarseness and impropriety." (*Analects*, Book 8－4) Zengzi's another famous saying is, "Every day I examine myself in three respects: am I disloyal in my designs for others, am I untrustworthy in my dealings with friends, have I failed to practice what has been passed on to me? " (*Analects*,Book 1－4) Although a Chinese, whether man or woman, may not have studied the *Analects*, these principles are transmitted from generation to generation in the family tradition.

To discuss about the subjects such as "What is the meaning of life?" "What is the purpose of our life?" "What does one live for?" with disciples, Confucius also used the term "zhishi" (志士)or "renren"(仁人) which meaning is just similar to "junzi". In his view, "The determined public servant and the humane man never seek to preserve life in such a way as to injure humaneness, but they will sometimes even sacrifice their lives in order to achieve humaneness." (*Analects*, Book 15－9) Zengzi's thinking was similar to Confucius, "The public servant must be broad-shouldered and stout-hearted. His burden is heavy and his way is long. For humaneness is the burden he has taken on himself; is it not true that it is a heavy one to bear? Only with death does his journey end; is it not true that he has far to go? " (*Analects*,Book8－7) Zizhang had the same opinion, "A public servant who on confronting danger is prepared to lay his life, who on confronting gain concentrates on what is right, who when sacrificing concentrates on reverence, who when mourning concentrates on grief should definitely be all right." (*Analects*, Book 19－1)

It is the most difficult among the teachings of Confucius. Moral values, which Confucius seldom talked about, are here conceived of as being an endowment from human nature. If a person wants to become a gentleman, he can cultivate his mind by studying Confucian classics. Anyway, Confucius believed that "By nature, men are nearly alike; while by practice, they get to be wide apart." (*Analects*, Book 17－2)

5. Optimism and Cultural Fulfillment

It is pointed out that Confucius had an optimistic view of life. Actually, the Chinese mind believes that although there are many hardships in life, Heaven does

not interrupt a person's path. The *Analects* begins with a famous saying as this, "To learn something and at times to practice it－surely that is a pleasure? To have friends coming from distant places－surely that is delightful? But not to be resentful at others' failure to appreciate one－surely that is to be a true gentleman?" (*Analects*, Book1－1) Confucius, as an optimist, made the same kind of proposition repeatedly, "I will not be afflicted at men's not knowing me; I will be afflicted that I do not know men" (*Analects*, Book1－16); "I will not be concerned at men's not knowing me; I will be concerned at my own want of ability" (*Analects*, Book 14－30); "The superior man is distressed by his want of ability. He is not distressed by men's not knowing him." (*Analects*, Book 15－19).If a man takes a long term view of the future, he may be able to find hope. Therefore, people should do their best in any circumstances.

In this case, Confucius placed some terms such as "renzhe"(仁者), "zhizhe" (知者), "yongzhe" (勇者) on the same level with "junzi",meaning "a humane man", "a wise man", "a courageous man" respectively. What he talked about himself was as follows, "The ways of the gentleman are three but I have no ability in them: the humane do not worry; the wise are not perplexed; and the courageous do not feel fear." (*Analects*, Book 14－28) We can find the same passage in Book9－29.The comparison between the wise man and the humane man is very interesting, "The wise delight in water; the humane delight in mountains. The wise are active; the humane are tranquil. And although the wise will find joy, the humane will have long life."(*Analects*, Book 6－23) In Confucius' view, "They who know the truth are not equal to those who love it, and they who love it are not equal to those who delight in it." (*Analects*, Book 6－20) A gentleman should take great pleasure in doing learning, because there is no royal road to learning.

Someone asked Zilu, a well-known pupil, about Confucius, but Zilu did not answer him. When Confucius heard this, he informed Zilu saying, "Why did you not say to him, that he is simply a man who gets so worked up that he forgets to eat, is so happy that he forgets sorrows, and is not aware that old age is coming on." (*Analects*, Book 7－19) In his later days, Confucius resigned himself to it as his fate. His sorrow was, "Alas! nobody understands me." Zigong asked him, "What do you mean by thus saying－that no one understands you?" Confucius replied, "I do not feel resentful towards Heaven and I do not put blame on men. Although my studies are of lowly things they reach up above. The one that understands me will be Heaven!" (*Analects*, Book 14－35) After the several ups and downs in life, Confucius reached the state of resignation. He said, "The gentleman is neither worried nor afraid"(*Analects*, Book12－4), and "The gentleman is calm and peaceful; the small man is always emotional." (*Analects*, Book 7－37) It is difficult to know oneself. Those words reveal clearly the Confucius' view of life.

The Confucian way of producing a rounded person is to provide a general cultural education. There is no need to specialize. To specialize would mean you could only do what you specialized in.Someone estimated Confucius just like this, "Despite his broad

learning there is nothing for which he has made a reputation." (*Analects*, Book 9－2) But for Confucius, "A gentleman does not behave as an implement." (*Analects*, Book 2－12) Even today, more than two thousand years after Confucius, educationists and researchers have come to the conclusion that a person who studies humanities makes a better administrator or manager than a person who specialize in only one area of study. According to Confucius a person should study extensively the polite studies,and should have a correct mixture of natural abilities and culture.In other words,education should be a means to developing character and not an end in itself. The aim of Chinese education has always been the cultivation of the reasonable man as the model of Culture. An educated man should, above all, be a reasonable being, who is always characterized by his common sense, his love of moderation and restraint, his hatred of heartless and avarice. Common sense, Of course, is possessed by all common people.

Although Confucius was bringing up his disciples in accordance with his own educational philosophy, the objective of becoming a gentleman, in practice, was rarely achieved. Even Confucius himself recognized that it is the reality of life. He felt sad and saying, "Living in retirement to study their aims, and practicing righteousness to carry out their principles—I have heard such a saying but I have never met such people." (*Analects*, Book 16－11)He deplored the fact as follows twice, "I have never seen one who loves virtue as much as he loves sexual attraction."(*Analects*, Book 9－18, Book 15－13)Confucius told his disciple that "Do you be a scholar after the style of the superior man, and not after that of the small man." (*Analects*, Book 6－13)He also said, "There are people who are not humane although they are gentleman; but there is no such thing as someone who is humane although he is a small man." (*Analects*, Book 14－6) This is perfectly understandable in a culture that has moral wisdom.

Anyway, in Confucius' opinion, "It is impossible for those who are not humane to dwell for a long time in adversity and it is also impossible for them to dwell for a long in pleasurable circumstances. Those who are humane rest content with humaneness and those who are wise derive advantage from humaneness." (*Analects*, Book 4－2) He also said, "The virtuous will be sure to speak correctly, but those whose speech is good may not always be virtuous. Men of principle are sure to be bold, but those who are bold may not always be men of principle." (*Analects*, Book 14－4) That is all theory he said. Therefore, classical Chinese education in the Confucian style aims at producing a rounded person, and every Chinese scholar aims at complete cultural attainment.

6. Conclusion

For a long time, two dominant notes run through Chinese philosophy and religion, namely Confucian humanism and rationalism. Confucianism insisted that to respond in an appropriately humane way one must study and practice the ultimate human virtues which based on the importance of humanity. Thus Confucius set all these standards for a gentleman and a good example for all Chinese people. He believed that a gentleman were so powerful that the sincere practice of them would bring about a

transformation of the self, which in turn would have a ripple effect that ultimately influenced the others. Confucius was not only a practical man, but also an idealist.

The Chinese tradition has been for every person to try to be a gentleman by acquiring and exhibiting some or all the qualities stated by Confucius. The educated person or scholar aims further for accomplishments to give himself complete cultural satisfaction and in consequence makes himself a truly rounded cultured person. It is a tradition to respect such a person and value him more than a person of high position or wealth. This is the Chinese philosophy of life. The humanism in Chinese culture is that we must all live and behave humanly, not necessarily worldly.

It can be said that Confucian classics revealed to the gentleman a code of ethics and morality that emphasized the complexity of the web of relationships that bound people and the virtue of attending to personal duty for the sake of the common good. In other words, Confucius' thought was grounded in the human realm; nevertheless, he had an abiding sense of faith in Heaven, and in the mission with it had entrusted him —to bring righteousness and kindness to the world.

As mentioned above, with the rapid growth of economy and the decline in concern about morals during the last twenty years, we will not be surprised if the sense of values of Chinese culture accepts serious harmful effects of the make-money view and yet retains its own soul. Each time Confucius and his writings were condemned in history, especially in the period so-called the Great Proletarian Cultural Revolution 1966－1976,he and his writings became more valuable when revived.What is important in the case of Confucius is that he and his teachings were based on the humanity. If more things are forgotten, those things will be more interesting when brought bake again. It is therefore certain that the Confucian view of superior man will be of greater interest and value in the future than now.

References

Arnold J. Toynbee, ed. (1973). *Half The World: The History and Culture of China and Japan*. London: Thames and Hudson.

Edward L. Shaughnessy. (2000). *China: The Land of the Heavenly Dragon*. London: Duncan Baird Publishers.

Lee Siow Mong. (1986).*Spectrum of Chinese Culture*. Malaysia: Pelanduk Publications.

Lin Yutang. (1968). *My Country and My People*. Taipei: Mei Ya Publications, Ico.

James Legge. (1935). *The Four Books with English Translation and Notes*. Shanghai: The Chinese Book Company.

Raymond Dawson. (1993). *Confucius The Analects*. Oxford New York:Oxford University Press.

W. Scott Morton. (1982). *China: Its History and Culture*. New York: McGraw-Hill Book Company.

顧鹿 『註釈校正　華英四書』商務印書館
魚返善雄 『英和対照　論語』原書房　昭和 39 年

論文

遍路認識論あるいは健全なる巡礼精神：汎＝反遍路のあり方をめぐるいくつかの問題

The problematic of Henro epistemology or Sound Mind of Pilgrims: Some Problems with pan-anti Henro Pilgrimage

関　三雄*

Mitsuo Seki

キーワード：ツーリズム、乗り物、修行、世俗
Key Words: tourism, vehicle, ascetic practices, profane

I

言うまでもなく、遍路は巡礼である。この現実を否定する人はそう多くはあるまい。但し、遍路はみずからの足を使用して、即ち徒歩で実行するのが望ましい姿であると断言するならば、異論は多方面から提起されるのではあるまいか。あるいは逆に、遍路が巡礼であるのは自明の事柄に属し、弘法大師空海の事跡を辿る行為が遍路であるから、徒歩で札所を巡ることは当然の帰結である、との意見もあるかも知れない。つまり、遍路に限らず巡礼という社会現象を捉える際に意識下に澱むようなアモルフな感情が、実践する遍路者だけではなくそれを研究する者の中にもあるのではなかろうか。この「常識」が私には不思議でもあり、また自然でもあった。確かに、遍路巡礼は「修行」であるとの抗いにくい根本テーゼがあって、そこから現象として認識するにはいくつかの困難が派生する。最大の矛盾点は、容易く想像できる。「移動手段」が遍路行為の価値を左右するという抜き難い「拘り（こだわり）」あるいは「偏見」が、あえて挑発的に言えば、行為者はもちろんのこと研究者にすら意識の底に「蟠（わだかま）っている」のである。従って、「お遍路」と聞けば、多くの人びとは「歩き遍路」をイメージする、あるいはそれが当然の事として話が展開される。ところが現実に遍路に出掛けることになれば、移動手段は大きな検討事項になるのであり、結果としては殆どの場合「乗り物遍路」になるのである[1]。一国の首相が政治的パフォーマンスよろしく歩き遍路を実践して見せても、それは飽くまで政治的表現として某かの価値を有するのであって、いかにも遍路は歩いてこそ意味があるとするイデオロギーに悪乗りした態のものであろう。ただ、実際の社会現象として学問

* 山陽学園大学総合人間学部言語文化学科

的な認識を施せば、理念型は現実のほんの一部に過ぎないのであって、それを精確に見つめる作業が研究者にも要請されるのでないか[2]。

問題の所在を明確にしてみよう。遍路が修行であるならば、それは宗教的活動であろう。それでは、宗教的活動であるならば、世俗の人でも世俗の流儀を一旦離れる必要がある。つまり、ある種の「難行・苦行」のイメージである。特に、遍路は高僧である空海の若き日の修行地に縁の深いといわれる札所を巡る巡礼なのだ。楽をしてその功徳に肖るなどあり得ないではないか。このような遍路認識論があったとしても驚くに当たらない。少なくとも誤っているとする根拠が見つかりそうもないからである。少しでも空海弘法大師の人徳に近づきたいと思うならば、そのために遍路という修行行為が用意されている。事実、四国の札所巡りは宗教修行者によって維持されてきたのであったであろう。しかし、それでは現代の社会に存続している形態として論ずることはできない。これも当然のことではなかろうか。ある社会慣行が栄枯盛衰を経験しながら長く存続するには、社会全体の変化に対応してきた経緯がある筈である。

実は、学問的な研究対象としてはある種の胡散臭さを孕んでいる遍路現象は、しかし学問的アプローチが貧困だったといえば必ずしもそうではなかった。確かに歴史資料が豊富であるとは言えないものの、それはこの種の非事件史の領域にあっては当然のことであり、民間伝承の記録文書等いわゆる民俗学系の資料に頼らざるを得ない。長く持続した慣行とてその記録を留めるには文字を活用できる社会的環境に住んでいた者でなくてはならぬ。勢い遍路研究も「民間伝承」そのものを資料として援用しない訳にはいかないのであって、当然のことながら、この資料には常に時間確定の困難さが付き纏う。

遍路の開始時期とても大凡の見当でしかあり得ない筈である。勿論、このことは歴史的文書の欠如の故だけではない。例えば、愛媛県松山市に本社を構える伊予鉄バスが「順（巡）拝バス」を何時始めたか、は記録が残されているので画定できる。ただそれが日本で最初の巡拝バスであったと即答可能かと言えば、必ずしもそうではない。蓋然性は極めて高いとしても、老舗のバス会社も古くからこのプロジェクトを開始しており、ただ運行記録が残されていないため時期が明確ではないからである。尤も、この「遍路バス」が運行可能になるのは法律改正が前提であるから、ある程度時期は絞られるのではあるが。兎も角、このように遍路の歴史全体を見渡したと仮定しても、ごく最近の出来事、それもこれほど遍路主体が明確な場合ですら、「始まり」を決定できないのだ。

修行者たちが空海の衣鉢を継いで四国の「辺地」を巡り始めたとすれば、まさしく仏教的修行であったろう。そうであれば、いわゆる老若男女が遍路に出掛ける現象とのあいだにはある種の懸隔あるいは移行形態があったに違いあるまい。ところが、「辺地」の巡りは弘法大師信仰が成立する以前からあった。補堕落信仰である[3]。よく引き合いに出される『今昔物語集』は平安末期に成立した説話集ではあるが、極めて限定された記述に過ぎない。そこでも、古くから修行として「辺地」を歩く宗教家たちがいた証左にはなるであろうが、社会習俗の具体相の記録とまでは言えないものである。ここに遍路慣行の「起源」を見たとは断言できない。つまり、現代的眼差しから敷衍しうるような遍路巡礼の姿を描くことはむつかしい。

ところで、修行や苦行が遍路という制度化した行動パターンに「本質的」に内在する価値として付与される限り、宗教的起源の幻影を遍路は抱き続けることになる。実は、遍路も「心身一如」の観点からすれば、少なくとも仏への帰依を表現する行為の連続と捉えることは可能であり、従って「歩く」ことが身体表現ばかりでなく「心」をも表すことになる。しかし、心身一如は必ずしも「聖」(sacred)の領域で発揮されるわけではない。「俗」(profane)の世界であっても、事態は変わらない

であろう。ところが次のような定義にぶつかったらどうだろうか。言うまでもなく、行間に潜む隠れた意図を探り出さなければならない。

> 弘法大師空海の四国での修行にまつわる寺々や霊場がいつしか四国八十八か所として結実し、それらの霊場を巡ることによって弘法大師と出会い、そのさとりの風光に浴したい、と願う庶民の心が行動となり「遍路」という形になってきた。「遍照金剛と出会う旅路」こそ遍路の原点である、・・・
>
> (小峰 2001:263)

これは何とも率直な住職の言ではある。僧侶の言説であるから読み取る方も左程の心構えも要らないかも知れない。遍路をこのように把握するのは特段偏頗なことではあるまい。成る程、遍路に出る者の中には弘法大師に出会う旅として朧げに感じている者もあろう。しかし、「遍照金剛」という灌頂名を師である恵果から授与された周知の事実があるとはいえ、「同行二人」の錫杖を持ちながら敢えて弘法大師の姿を求めて旅立つ者はどれくらいいるのだろうか。論理的に考えるならば、菅笠にせよ錫杖にせよ同行二人、即ち一人歩きの遍路であっても、常に「お大師さま」が一緒に居るという顕示があるのだから、大師との出会いを求める必要はない。但し、この世界はそう単純な論理で動く訳ではない。二重三重に「ご利益」に叶うのであれば少々の矛盾は問題にならないであろう。いわゆる「逆打ち」が始まったのも常に修行のため遍路を続けているという弘法大師に出会えるから、という信仰もある[4]。

それにしても、象徴的な表現としては認めるとして実際上そのような信念から世俗の人びとが「聖」を強く意識するとは考えにくい。事態は逆説的なのではなかろうか。大きな世俗化の潮流はこの国に於いても明確なのであって、多くの老若男女にとって日常＝褻(ケ)の中に取り込まれながらも非日常＝晴れ(ハレ)という特別な時空を実感できた時代から、徐々に実感する能力は減退し続け、一方で「聖」を演出する装置は豊富になった。例えば、現代の遍路装束に見られる「制服化現象」もその一端ではあるまいか。先ず形(form;forme)からということだろう。白衣に菅笠そして錫杖といった今日見慣れた遍路姿も、勿論江戸時代から持続したような習俗ではあり得ない。庶民の生活水準や暮らし振りを想起すれば、仮令白衣・笈摺を身に纏った者がどれ程の割合だったろうか。実際のところ、「三点セット」の印象の強い白衣・菅笠・錫杖に「同行二人」が定型として刻印されているが、その歴史も深くはないようだ[5]。文字の記号性を重視するのは故なきことではなかろうが、身に矢鱈にそのことに依存するのは聖の世界への感受力の減衰を表示することになろう。しかし、これを嘆くのは烏滸がましい。なぜならば、それは社会の発展(この語を避けたいなら進展)に抗う行為となってしまい、社会の多数派はそのような行為や態度をとらないからこそ多数派であるからだ。 例えば、大阪から遍路に向かう旅人であっても、「歩き遍路」をするからといって、大阪から歩いて四国入りする者があるだろうか。通常は乗り物(手段は種々あり得るとは思うが)に乗って這入って来る筈である。普段の日常がそのようであるからこの「快適さ」を捨てる人はあるまい。

ところで、「同行二人」の意義は、常に一人＝独りであっても弘法大師が同行していることであった。遍路巡礼を単独で行うことも少なくないであろうが、その心細さを内面から支える象徴的言葉であったであろう。修行という位相からすれば、この反芻すべき「道中語録」は心中で唱えるべきものであろう。従って敢えて文字として視覚的固定化する必要はない。文字の象徴作用をいか

に援用しようとも、この「濫用」はありふれた現象とはいえ、いかにもこの国のある種の「心性」を表示していると言えなくもない。いや、かくの如き現象は人間共通に見られる一般的なものだ、との反論も聞こえてきそうである。但し、視覚のシンボル能力は遍く知られていようが、ここでは立ち入らないでおく。既に触れたように、世俗化という大きな流れは澱むことなく進展して行く。そこでは記号や象徴の力が何重にも利用されるのであって、確かに多くの文化圏で見出される現象である。経済発展や技術革新といった要素が社会の駆動力として突出してくれば、自ずと逆に「聖なる力」（仏も含んで）が及ばないあるいは必要を感じない人間社会の領域が拡大してゆく。ところが、どのような社会であっても諸個人が納得できる日々の生活は保障されない。当然人智を超えた災厄が生じるのが現実であろう。

世俗化現象は「近代」（modernization）の抱えた 1 つの重大な側面には違いないが、その発現の仕方は個々の社会や文化によって異なる。しかし、依然として意識下には漠然とした不安が底流しており、何某かのきっかけによって意識の表層に上ってくる。そのきっかけも多様であろうが、今日のような時代であっても不安の材料は却って増加しているのではなかろうか。他方世俗化の波は確実に進展するとすれば、例えば江戸時代の人びと以上にカミダノミの心性は、非日常の価値の相対的下落による「聖」の感受力の低下が逆に過剰なシンボルの力を必要とすることになる。その結果、ご利益を得るためには大師の法力を大いに活用する筈である。「同行二人」は金剛杖ばかりに書き込むのではないのも当然の帰結であろう。この習俗も先行する巡礼慣行であった「西国三十三か所観音霊場巡り」から借用したようである[6]。しかも、「同行二人」と定型化するのはごく新しい現象らしい。実際には「同行三人」もあり得る訳であるし、存在するのである。遍路に何人で出掛けようとも、大師は常に遍路者に付き添っている、当然のことながらそのグループよりも同行人数は 1 多くなるのだ。

この「同行何人」という巡拝（順拝とも書く）の行動形態の定型化は何を意味するのだろうか。かつて柳田國男が指摘したように[7]、巡礼などには友人同士が三々五々連れ立って出掛けた時代があった。その時点で修行感覚とは異なる巡礼行が見られた。そこでは「同行何人」で済むが、団体で 10 人を超えるような規模に遍路巡拝に膨れ上がったらどうだろうか。巡拝バスの出現は遍路シーンを塗り替えただけではなく、大型バスという公共共有空間自体の移動によって、そのバス全体を一個の遍路者に変換したかのようだ。成る程、巡拝バスの参加者は様々なグループが含まれるのであり、一人での参加者もいるであろう。「同行二人」は固定化する運命だった。一つには、日常生活のイデオロギーがそのまま非日常の聖性を帯びた空間である筈の場合であっても、一種の必然として這入り込む。

つまり、「同行二人」はあらゆる人数の遍路団体に対応できるのであって、遍路用品取扱い業者はプリントして販売できる。誰にでも一人独りに「お大師さま」は連れ添ってくれるのは、誠にありがたいことだろう。多くの老若男女はこのサーヴィスを受け容れる。簡単且つ楽であるからだ。遍路に出るたびに「同行何人」と書き込まなくて済むのである。果たしてこれは個人化現象と呼ぶべきものであろうか。シンボルの多用は、主体と対象との関係が弱体化しつつある経過を示している。既に述べたように、大師との出会いを求める行為が遍路であるならば、「同行二人」は論理的ではない。いや、「同行何人」でもそれは変わらない。勿論のこと、観音霊場を巡る「本尊巡礼」であっても事態は同様である。ただ繰り返しておくが、世俗化の進展とともに「便利は快適と同義語である」とする思想が歩調を合わせ、これらのイデオロギーはこの国の細部にまで浸透し続けている。一方では心の豊かさが虚しく喧伝され、しかし現実にはこの豊饒性はモノの豊かさを前提としてお

り、過去の段階に生活水準を下げることなどあり得ない。即ち「心身一如」とは、「身」は身体以上の物質的装置を取り込んだ概念にとっくに拡大しているのだ。

ここで誤解を受けないようにしておこう。私が論じようとしているのは、社会の進展変化に応じて遍路という巡礼の非日常性も変転しており、それは、例えば明治以降あるいは昭和の戦後以降のような「今」(our times)に近い時代に限定されない、ということである。進歩(progress)という手垢の着いた言葉より「進化」(evolution)といった得体の知れない用語が商業主義に乗って一人歩きをする。それに批判的な眼差しを向けるのは必要であっても、巨きな社会=文化的潮流に抗するのは現実的ではないだろう。聖/俗の関係構造は成立した時点から風化は始まるのであって、聖性は常に再強化しなくては俗の勢力に押し流されるのである。ある種の矛盾を覚悟して言述するならば、聖/俗の区分差異化は俗そのもの中から誕生したからである。それは世界のテクスト化という一連の作業過程で生まれたのである。

II

さて、遍路に纏わる面妖な事態、行為類型としては明快であるにも拘わらず、その「本質的」理解となると厄介な位相がこの遍路にはある。但し、物事の「本質論」は簡単には俎上に載せにくい知的状況がこの国にもあると言わなければならないだろう。しかし、「本質主義」(essentialism)に陥らなければ、操作概念として認識論にも適用できる。事態の認識は関係によって、即ちコンテクストによって決まるのは確かであるが、本質という語を忌避するのも脱構築が足りないと言うべきであろう。ところで、遍路が巡礼であることには異論はない筈だ。巡礼は英語や仏語では pilgrimage:pèlerinage という。pilgrim;pèlerin から派生したとされる。言うまでもなく、キリスト教世界でも巡礼の歴史は長い。例えばこの例はどうだろうか。この国でも近年注目されているサンチャゴ・デ・コンポステーラ Santiago de compostela(以下サンチャゴと略記)への巡礼である。この巡礼は目的地が明瞭である。この地にある大聖堂なのである。即ち「巡る」のではない。日本で云えば「参詣」に当たる。「お伊勢参り」と同格であろう。これも pilgrimage なのだろうか?

当然のことながら、「サンチャゴ詣で」は最も長い歴史を刻んだ巡礼である。ローマやエルサレムに匹敵するキリスト教の聖地であるサンチャゴは、いわゆる聖ヤコブ(イエスの 12 使徒の 1 人)を祀った伝説の地である。この場で詳細に触れるのは適切ではなかろうが、遍路の巡礼形態との比較をする利点があると思われるので、少々引き合いに出してみたい。但し、エティモロジカルな詮索は慎んでおかなければならない。「参詣」や「巡礼」の語としての歴史は古いものであり、その古さは中国(現代の時点での国名表記)から受容・運用の変遷を意味するものであろうが、ここでは「参詣」と「巡礼」という用語に対応する行為形態の差異に目を注ぐ。何故ならば、聖地を「巡ること」は聖地に「詣でること」とは根源的に異なるベクトルを内在させ、単に円環型/直線型の行動パターンとして構造化するといった認識では不十分と判断するからである。ただ明確にしておかなければならないのは、巡礼慣行は広く様々な宗教に見られる現象であるが、本稿では比較事例をサンチャゴ巡礼に限定する。それは遍路巡礼の特性を際立たせる意図があるからに過ぎない。

ヨーロッパ中世からサンチャゴへの巡礼は始まった[8]とされるが、ヨーロッパ各地から主に現在はフランス国内を通る4つのルートガ整備されており、ピレネー山脈越えで2つの峠のどちらかを経由してフランス-スペイン両国を接続する「サアンチャゴ巡礼路」を体験するのが一般的である。例えば、その内の1つ、ル・ピュイ(Le Puy)からコンク(Conques)そしてモワサック(Moisac)を通り、オスタバ(Ostabad)へ至る、このルートは通称「ル・ピュイの道」。巡礼者は町の聖堂には立ち寄るのが通例であり、その意味ではただ目的地のサンチャゴ大聖堂だけが「霊場」ではない。つまり、参詣

の連続には違いなく「霊場巡り」と言えなくもないのだ。では、この pilgrimage は「巡る」行為として捉えて破綻ないであろうか。巡るは「廻る」であって、即ち回る（廻る）のでなければならぬ。確かに『今昔物語集』にもそうあった。「・・四國の邊地と云ふは伊豫、讃岐、阿波、土佐の海邊の廻りなり。」（佐藤　1955:299）として、遍路が巡礼としてメグルという目的地指向ではない、円環あるいは循環するモメントが十分に読み取れよう。

> そもそも巡礼には、回国修行としての「遊行（ピルグリミジ）」と物見遊山としての「観光（ツーリズム）」という二つの契　機が重層的に含まれている。・・・（中略）参詣客にとって、聖地の社殿や本堂の門前にのきをつらねる門前町は巡礼という受難の路を完成させる最終の道行きの場面であるが、しかし聖地の中心に到達してしまったあとは、そこはたちまち巡礼客の欲望を吸収する歓楽の舞台へと変ずるのである。
>
> （山折　1996[1979]:4）

ここに引用した文章は宗教学者の明解過ぎる巡礼解釈である。ところが、この魅力的な巡礼往還論には、単純化という歯切れの良さに付き纏う陥穽が待ち受ける。つまり、山折の言う巡礼を遍路に置き換えると、その立論の脆さが出てしまう。この場合の「巡礼」はほぼ「参詣」の意味で語られる。参詣型の巡礼では、巡礼者は２つのセイチ：聖地と性地を体験することになって、日本語の語呂合わせとしては出来過ぎてしまうが、「往」と「還」で巡礼の一見正反対の位相を示す解釈は注目されるだろう。ただ根本的な疑義として、「二つの契機の重層的・・」との指摘は妥当としても、私には「ピリグリミジ」と「ツーリズム」の重層化とはかくの如くに理解されるべきではないとの見解を持っている。まさしく、そもそも彼が理論的に依拠するイギリスの人類学者ターナー夫妻(Turner,V.&E.)の巡礼論（1978）の論理構成が山折と焦点が異なっているのだ。そこでは＜非日常性＞が要点であった。それはこういうものである。が、性急な結論を引き出すべきでもない。少しターナー夫妻の発言を見てみよう。

「観光者(tourist)は半ば巡礼者(pilgrim)である。もし巡礼者が半ば観光者であるならば」[9]、とターナー夫妻は述べた。少なくとも、引用された文は山折のコンテクストとは直接関連しない。さてここで少々厄介な問題が生じる。例えば、英語では休日を holiday と称するが、言うまでもなく holiday は holy day から派生した。その逆ではない。そして、日本語でも祝祭日と訳す。即ち、holiday は（祝）祭日であり休日である。彼我の地で世俗化は加速度的に進展し、それは日常/非日常の区別が曖昧になることを意味するのであって、宗教観の違いがあるとしてもその方向には共通性があろう。ただしかし、「休日」には holiday のような沿革の残滓がない点は留意しておく必要がある。確かに、今日「休」日から、「聖」日を連想するのは日本語からはむずかしいだろう。一方これとは逆に、ツーリズムの人類学者グレイバーン(Graburn,N.H.H.)が注目したように、全く逆のアプローチすら可能となる。つまり、ツーリストからのパースペクティヴで巡礼者を観るのである。勿論、遍路も射程の裡にある。「この[ターナー夫妻の]アプローチは、ツーリストの動機づけとその見返りを強調している。それは、宗教的儀礼―祭日(holy days)―がより宗教的な文化におけるが如くに、ツーリズムも休日(holidays)もある種の日常生活からの儀礼的休憩(time-out)と見做すことである」(Graburn 1996:1316)と、その核心部分に触れている。

グレイバーンが tour;tourism に重大な学問的意義を見出したのは特記してよい。日常生活に根差した生活圏の諸活動を対象としてきた人類学が、一時的にもその生活圏＝世界を離脱して旅

に出掛ける行動に関心を抱いたのである。成る程、聖なる時間や空間へ眼差しを人類学は丹念に調査してきたには違いない。呪術・宗教・儀礼研究は人類学の際立った分野の一つだったからである。いわゆる「聖なる時間」を宗教儀礼が創出するのは、当該社会にとって頗る価値のある慣行であり、文化の構成要素としての位置を占めていた筈である。しかし、それは基本的には「生活圏」をはみ出す行動ではなかった。人類学が生み出したと思われる「未開社会」(primitive society)の概念には従って、呪術や宗教研究からツーリズムへの照射が這入る込む余地はなかったであろう。「ツーリズムという概念は、しかしながら、彼ら自身ツーリズムを利用する諸社会、殊に大規模な近代社会の研究にもっとも有効に適用されるものである」(グレイバーン 1996:1316)と、グレイバーンはかつての人類学の「得意領域」であった「未開社会」ではなく、大規模近代社会の研究への親和性を説く。即ちそれが、仕事(work)や余暇(leisure)などの「普遍的な概念」とは異なると、彼は考える。

Ⅲ

ところで、私が少々遠回りをしたのは遍路認識論を混沌とした情況に追いやるためではない。その逆なのである。遍路を巡礼としてその十全たる認識に至るにはいくつかの手続きが必要なのであって、サンチャゴやツーリズムを引き合いに出すのもその一環である。そこで、何故にグレイバーンが tourism と pilgrimage を比較して、tourism 研究の可能性を素述したかに戻ろう。ターナー夫妻とは異なっているのも当然だった。それは日本にも当て嵌まるのではなかろうか。宗教的儀礼慣行としての巡礼であれば、「修行」(ターナー夫妻では devotion という用語が見合っていようか)の要素は不可欠となるが、これが観光となってしまうと心身一如の視点からも堕落した、精神性の欠如した見せかけの慣行に過ぎない。こうした観念は、西欧においても強く見られる。実際、サンチャゴ巡礼では今日目的地の大聖堂まで徒歩(100km 以上)と自転車(200km 以上)でその道程を実践しなければならない。その「巡礼証明書」(Compostela)が巡礼を完遂した証しに他ならず、「乗り物巡礼」は別種の証明書になるとのことである[10]。ここには明らかにある種の苦行が付随しなければ巡礼とは言えない、という認識がある。即ち、観光旅行的な巡礼は価値が低いことを物語っている。翻って日本の巡礼はどうか。観音巡礼にも遍路にもそのような区別はない。「お伊勢参り」あるいは「熊野詣で」のような目的地指向の参詣は、そもそもいわゆる巡礼ではなかろう。いや、それも早計だ。

ここで山折の所説を評価しながらも疑義を呈示する宗教学者真野俊和はこう論評した。彼はそれを「かすかなためらい」と遠慮がちに表現した。

> ふたつのことば[参詣と巡礼]はともに英語に訳してしまえば pilgrimage であろうが、日本語としてのそれらには若干のニュアンスがあり、その違いは山折氏の最初の論点[巡礼における往路と復路の違い]についてみるならば、けっして小さい問題には思えないからである。巡礼における霊場とは参詣のそれとちがって、一千キロメートル以上にもわたるミチにほかならない。・・・(中略)。この周回する霊場にはどこからとりついてもよいし、一周がおわったところが終着点になる。だから伊勢の古市のような俗にかえっていくための起点となるマチも形成されなかった。
>
> (真野 1996:326-327)

真野の微妙な評言は山折の遍路解釈論に対するものではあるが、それに留まるものではない。その意味では注目していい。英語 pilgrimage が「参詣」、「巡礼」双方を意味するとの理解は妥当

であるが、山折の巡礼往還論の記号論的解釈はターナー夫妻の援用であって、その pilgrimage はほぼ参詣に当たり、「巡る道」とは言えない。サンチャゴ巡礼でも最終目的地は明白であったではないか。「還り」になれば、確かに「巡礼者の態度はいまや信者(devotee)というよりもツーリストのそれである」（Turner,V.&E 1978:22）とターナー夫妻も述べるように、どの巡礼者も家路を急ぐ。「家庭での暖かな、称賛の溢れる歓迎の言葉」（Turner,V.&E.）も期待するかもしれない。しかし、事態は逆ではないだろうか。ツーリストだから家路を急ぐのではなく、目的を成就した巡礼者だからこそ早く家に帰って報告したいのではないか。但し、それも程度の問題であろう。物見遊山のツアーであっても体験は話したいものである。更に山折も指摘した如く、「共同体との別離と生命の軽視とにおいて象徴的な死への関門をくぐること」（山折 1996[1979]:4）は当該の時代環境に依るものの、巡礼や参詣に限らず一般庶民の物見遊山＝ツアーに於いても程度の差こそあれ言えることであったろう。生活圏としての共同体を一時的に離れることは、不安と解放の混じり合った心情を生出す筈である。

実は真野の呈示した山折への疑問は、「楕円論」が日本の巡礼・遍路分析には適合しない点であった。更に言えば、眼目となる批判点が山折の解釈論はそもそも「参詣」に向けられたもので、「巡礼・遍路」にはうまく適合しないといった日本型の pilgrimage 事情があった。つまり、「中心-周縁」理論の応用は、例えば遍路のような中心点往還の空間構造を持たない巡礼には成功しないのである。真野も触れているが、山折自身日本の巡礼研究はターナー流の「概念枠組」で済ませられる程単純ではないと言ってこの問題を回避している（山折 1996[1979]:10 参照）。遍路の移動空間構造は参詣型ではなく、メグル周回型であれば、中心点、即ち伊勢神宮あるいはサンチャゴ大聖堂の「往還」に適用される理論を援用する訳には行かぬ。勿論のこと、このアポリア（？）を解決する方法はただ一つ、遍路空間を内蔵した四国自体を聖地化するほかあるまい。即ち、四国は「辺地」であったのだからだ。「西国三十三ヶ所観音霊場巡り」という巡礼には機能不全に陥るターナー解釈理論も、遍路には強引に適用することができる、と考えていいのだろうか？

実際に山折は巡礼の「楕円往還論」を、四国遍路にはうまく活用しえないと悟って、四国霊場を別格に扱おうとした。いみじくも真野はこう指摘する。「巡礼の霊場とは、宇宙の中心というよりむしろ宇宙そのものではないか」（真野 1996:327）と山折の所論に疑義を挟み、巡礼往還論へのアセスメントを行い、しかも真野は山折もそのことには気付いており、次の一節を引用した。「四国の遍路は一つの隔絶した世界において演ぜられる終りのない円運動なのである」（山折 1996[1979]:15）。つまり、ここにきて「遍路」はただの巡礼形態ではないことになる。おそらく遍路が日本の巡礼の中で特殊な位置を与えられている事情がここに隠されているのではあるまいか。遍路は参詣でもなければただの巡礼でもない。とはいえ、遍路も巡礼の一種である。円が楕円に包摂されるが如く遍路も巡礼一般に包含され、しかし参詣と同型とは言えない。果たしてそうだろうか？確かに西欧キリスト教世界に於けるサンチャゴ巡礼に見られるのは、一見参詣型の pilgrimage であった。これをターナー夫妻の美しい解釈論から、聖と俗の二項対立的楕円構造へと還元する魅力的方法論として一般化する途がないわけではない。少なくとも、四国そのものを聖化すれば、山折は「楕円往還論」を捨て去る必要はなかったのである。それには既に触れておいた。その意味では四国は世界でも類を見ない巨大な「聖地」と言えるかも知れない。

ところが、他方で四国内での移動軌跡はトポロジカルな意味で円環的と言わざるを得ない。四国霊場は四国外から訪れる遍路ばかりではない。何よりも遍路が一般化する江戸時代にあって、初めての遍路ガイドブックと言われる『四国遍路道指南（みちしるべ）』(1687)を著した真（眞）念は土佐高知出

身とされているではないか。つまり、「地元」の篤志家の僧侶が当時盛んになりつつあった遍路者に必須の情報を提供しようとしたのである。勿論、遍路巡礼の根拠となる弘法大師がこの地で修行したのは遍く知られていた。尤も空海が円環的な行のための移動をした訳でもあるまいし、また『梁塵秘抄』や『今昔物語集』に記述された「邊地」がそのまま現在に到る遍路巡礼として成立したとも考えにくい。「平安時代後期以来、四国のミチを歩く人物は、辺路信仰にもとづく修行者だった。彼らは、常世の国に至ることを望んで、四国の辺路を巡っていた」(白木 2001:256)。この言述は、補陀落浄土信仰と常世の国観念の習合を通じて発展してきた辺(邊)地あるいは辺(邊)路巡りという、大師信仰以前の修行者の姿を彷彿とさせよう。白木に依れば、大師信仰が成立すると修行者の他に「在家のすがた」が見られ始め、「江戸時代初期の宥辨真念の業績によって、四国遍路は庶民に開放された」(白木 2001:257)。まさしく庶民が遍路に出る環境が整って来たと言うべきである。現実の遍路に関する資料＝テクストは極めて少ない。それは「書く」という行為がどのような社会的意味をもつのか、を示唆するものであろう。記録がないことは対象となる現象がないことと同等ではない。それは兎も角も、この遍路研究者は続けて至極当然の時代認識を示す。それを確認しておこう。

> 寛政十二年(一八〇〇)に遍路した九皋主人は、『四国遍礼名所図会』五巻という日記を著した。日記ではあるが、札所や途中の名所旧跡についてのガイドを記すとともに、境内の詳細な鳥瞰図を描く。この絵のなかには厳しさは感じられず、むしろ遍路を楽しんでいるようで、生き生きとしている。写生しながらの余裕がある遍路は、すでに「行」ではなく、物見遊山の色彩が濃いものである。
>
> (白木 2001:257、傍点関)

ここには既に庶民の中に遍路が浸透しており、しかも修行とは言い難いツーリズム的遍路と認定しうる形態が見られる。江戸時代前期には真念によるガイドブックが出版される時代の要請があった。確かに現代の遍路から過去の状況を推し量るのは容易ではない。ましてや資料というテクストが決定的に欠けているのだ。更には、人間が社会的存在である以上そのマンタリテもそれに規定されよう。であれば、記録文書があるからといって単純に過去を現代に翻訳可能とするのも控えねばならない。しかるに一方では、歴史や時間の懸隔を超えて人間の共通性を前提としなければ学問的営為は成り立つまい。遍路という宗教慣行がどのように始まり、どのような変遷を経てきたか、あるいは人びとは如何なる意識や感情を抱いていたかなど、このような疑問に正確に答えるのは困難である。否、「われわれ」ができるとすれば「翻訳」だけではなかろうか。

例えば、遍路の始祖として衛門三郎の名が挙がろうとも、このような集団的慣行は特定の個人にその名誉を帰する性質のものではない。せいぜい換喩的象徴性を付与するに止まるであろう。従って、いつだれが始めたか、は遍路認識論のプロブレマティックには関わってこない。枢要な点は、修行者ではなく、在家の即ち一般の老若男女が遍路に出ることによって、日常生活の時空を離れて旅する現象が発生したことだ。四国に今日僧侶に類するいわゆる専門の修行者たちが訪れることは少ない。それは「乗り物遍路」が圧倒的多数派を形成しており、もはや遍路という巡礼は修行には値しないと判断したためであろうか。乗り物遍路の主役としてツーリズムのある種の典型と考えられてきた巡拝バスに、僧侶が「先達」となって参加する場合は少なくない。しかし、それは修行の一環としてバス参加者一行に同行しているのではあるまい。あくまでもその行為は案内

役のそれである。成る程、仏の道の導き手となって遍路者に同行するのも僧侶の仕事の一部であろう。僧侶は特殊な価値体系が背後に存在するとはいえ、職業の一つである。一般社会に寄り添ってあるいは深く関わりながら宗教者の世界は進行してきたのである。ただ世俗化の進展した社会であればこそ、修行者は一般社会の営みと一線を画さなければならない。要するに、遍路・巡礼は本来世俗者に属す宗教慣行であったのだ。 とすれば、世俗者の原理が優先するのは必然ではないか。物見遊山は自然の成り行きであった。というよりも、「物見遊山」の動機と行為そのものの中に聖化される非日常性の喚起力が胚胎しているのである。

Ⅳ

前出の衛門三郎も伊豫（愛媛県）の人であったように、近畿＝中心から海を越えて四国遍路に発つ者にとっては確かに四国霊場が辺路＝周縁の記号性を帯びるとしても、四国内から多くの遍路が巡礼に出るとすれば、ターナー理論の適用はどうしてもムリが生ずる。それは「参詣」と「巡礼」を対比させて、サンチャゴ巡礼やお伊勢参りを参詣型に分類するのは可能であって、他方四国遍路に見られる如く四国内部での行動軌跡は往還論ではない円環構造であると断ぜざるを得ない、ということである。但し、「マレビト論」としていわゆる「お接待」習俗を措定するならば、何処から来ようとも遍路道周辺の人びとには「他国」の来訪者であって、遍路が盛んになった江戸時代には讃岐も伊豫も「国」であったのは遍路者も認知していた筈である。要するに、pilgrimage を「参詣」あるいは「巡礼」と認識としようとも、日常の生活圏を離れて旅に出るのはある種の覚悟は必要だったのではあるまいか。不思議なことに、山折も真野も両者ともこの「移動」という道空間体験そのものに触れることが少ない。行程が 100 ㎞であろうと 1000 ㎞であろうと、歩く旅程は容易ではない。その意味で遠出する覚悟の移動はそれなりの「行」ではなかったろうか。修行者が行う負担の大きい修行と異なるとはいえ。時代の懸隔が存在する重大性を考慮しても、バスに揺られて巡る巡拝とは違いを認めるのは当然である。

ところが一方ではそれとは異なる解釈視点もあり得るのである。私は巡礼とは世俗者のものだ、と言った。その意味するところは、巡礼が即ち世俗の日常を送っている人びとの生活原理や「思想」が色濃く反映する種類の社会慣行であるということである。出家した宗教者が必ずしも修行者でないことは、今日誰の眼にも明らかであろう。大きな世俗化の潮流は彼我の国に於いて同様である。ただしかし、例えば「在家」仏教者といえども僧侶は専門家であって、あくまでも主役の巡礼者は一般の庶民には違いない。四国霊場への旅は、観音霊場へのそれと些か異なるのは「本尊巡礼」ではなく、具体的な実在した「聖人」への信仰であって、この実際に生きた人物の伝承は抽象的な観音信仰よりも親近性に於いて勝る。そこから遍路する弘法大師に出会えるかもしれないといった観念も生まれよう。その点では遍路＝弘法大師の関係は、サンチャゴ巡礼に似る。言うまでもなく、キリスト教の唯一絶対神と仏教の仏とは決定的に異なるが、「日本人」には仏は新たなカミと感得された。少々乱暴な理解との謗りを受けようとも、アニミズム的汎神世界に住んでいる人びとには、キリスト教の聖人が担った諸機能を西欧の民衆の受容するメカニズムと同じように、仏を精霊 spirit の一種と見做す心性を否定しえないのではなかろうか。ましてや、弘法大師は伝説的とはいえ歴史的人物であるから身体性を具えた仏として立ち現れたとしても不思議ではない。

そうであるならば、世俗の日常を様々な困難を抱えつつ暮らす老若男女にとって、遍路は故地を離れて一時的な非日常の世界を体験する、という意味では他の巡礼と何ら変わるところはないのであって、逆に観音霊場巡り以上に世俗の者には親近性の高い求め易い札所であったろう。しかるに、今日遍路には他の巡礼にはない「修行」を尊しとするイデオロギーが纏わり付く。観光あ

るいは物見遊山ではどうしていけないのであろうか。巡拝バスやマイカー遍路ではご利益がないのだろうか。弘法大師空海が修行した縁(ゆかり)の故なのか。しかし現実にはスタンプラリーの様相を呈しているではないか。即ち、遍路や巡礼が移動であり、この慣行が世俗者のものであるならば、移動手段が多様化し、発展するならばそれを否定するのは時代錯誤とは言えないだろうか。人間は厄介な動物である。あれほど社会が挙って便利や効率を追い求めながら、一方ではジョギングやマラソン・ブームが生じる。「楽の思想」を唱道しながら「苦の体験」も喜ぶ。ただ圧倒的多数は楽＝快適を捨て去ろうとはしない。それが世俗の原理なのだ。翻って、伝統とはどのような種類のものであっても、過去の記憶の上に成り立つ社会的継続であり、伝統の核心部分は保持されながら全体としてデフォルメしながら進んで行くのである。近年増えつつある外国人遍路には「歩かない」巡礼形態が奇異に映るかも知れない。それは最終目的地の到達とともに移動する歩行旅程に大きな価値を置いているからであろう。それでも、「歩き」と「自転車」を認めている。自転車は自力でこぐから歩きに準じることなのだろうか。サンチャゴ巡礼も時代の潮流に抗しながら「伝統」を守っていく。「証明書」を無料（手数料のみ）で発行するといった制度上の相違もあるが、そこには巡礼に対する関係者の態度差も感じ取れようか。尤も、遍路巡礼には証明書はないが、それに代わる「納経帳」への押印等が存在する。勿論、遍路の手段を問われることはない。つまり、遍路という伝統習俗にとって、移動手段の変容は核心部分ではないのであって、少しばかりの大師信仰と功徳を積む心構えをもって旅行に出発するならば、道中の苦楽は一般の「観光旅行」tourism と大差ないのであろう。この旅行が何某かの精神的安寧とご利益願望に応じているならば人びとは遍路に向かう。

『遍路の社会学』(1971)を上梓した前田卓に依れば、遍路が盛んになってきたのは江戸時代でも真念や寂本の時代というよりも、更に下った「宝暦・明和・安永の時期は、四国遍路の一つの盛行期であった」（前田　1996[1971]:69）としており、その調査法が札所寺院の過去帳を基礎とするものであることは措くとして、宝暦元年は西暦 1751 年であるからそこから安永 10 年(1781)までが一つのピークをなしていると了解しうる。前田は江戸時代の最盛期を文化文政時期と見ている。そしてこう述べる。「十九世紀の初期から約三十年間は、四国以外の国、たとえば瀬戸内海を渡った対岸の備中、備後、安芸などから、遍路が多数入り込んでいる」とし、更には対岸の備中や紀州などから「遍路に接待品を与えるために、はるばるやって来た接待講の歴史を見る時、その起源の殆どが文化・文政の時代であった」（前田　1996[1971]:73）と言う。先に引いた白木の一文の記述を想起させる指摘ではないか。ただ前田は一方で、遍路を西国巡礼と比較して巡礼者の社会的属性に触れる。ここに何故四国遍路に纏わる潜在し続ける修行意識のヒントの一端が垣間見える。「西国巡礼は観光をかねてのいわば大名旅行といった人々が多いのに対し、四国遍路の場合には、（中略）一般には、下層農民や女性を含めた人々で、これは止むにやまれぬ信仰心から遍路に出た者と、生活をかけたいわゆる口減らしを目的とした乞食遍路が多かった」（前田 1996[1971]:79）と、まさしく今日でも「いずれは歩き遍路をやってみたい」と修行としての遍路を渇望する遍路体験者が少なくない事情を説明してくれる。だが本当にそうなのだろうか？

前田の解釈を否定する根拠は余りないであろう。どちらにしても当時の遍路像を復元するには文献資料が潤沢ではないからである。前田の難点は観光＝ツーリズムと遍路・巡礼を対峙させる極端な二分法にある。「観光をかねた大名旅行」の表現に見て取れる如く、観光という語の理解が余りに狭いと言わざるを得ない。確かに観光は一般に余裕のあるレクリエーションの一環と考えられている。しかし、「止むにやまれぬ信仰心」からでなくとも遍路に出ることはあり得るのであって、

観光を一時的に生活場所から離脱してリクリエイトを試みると理解するならば、困窮の状況下であればこそ却って信仰心に繋がる動力になりうるのではあるまいか。実際、経済的停滞期に却って「初詣で」のような欲求が高まるのである。少なくとも、江戸時代のある時期から生活圏を離れて遍路に赴く人びとが増えだしたのであり、それは時代の進展とともに修行一辺倒とは言い得ない遍路者が発生していたことを意味する。彼らは世俗の住人であり、世俗の原理の推進者たちである。従って、経済的困窮者であっても、それが緩和される時代の便利な道具類が使えれば、当然のことながらわざわざ難行苦行の方法は採らない筈である。つまり、「信仰心」からであっても「乗り物」を利用できるのなら、より楽をして「移動手段」として用いるのは大いにあり得ることだ。

V

ところで、既に述べてきた如く、遍路認識論とも言うべき視点から巡礼特に四国遍路を眺めた場合、「修行 vs 観光」とする二項対立的認識図に多くの関係者が引き摺られているのは奇妙に思われる。何故ならば、第一に「当為」としての修行はタテマエであって、「現実」としての観光がホンネであること。このホンネが機能しなければ、遍路巡礼はこれほど持続する慣行即ち、多数の老若男女に支持されるものとはならなかった。第二に、現象として圧倒的多数が今日「乗り物遍路」であるにも拘らず、「歩き遍路」が真の遍路とする黙契がどこかにあるならば歪んだ遍路像である。第三に、前二者とも連関するが、楽をしてご利益に与ろうとする心は、恐らくは自然な欲望の発露である。一方で苦労・苦行を実践してこそ得るものがあるのだ、という信念も絶えることはなかろう。それはある種の伝統に寄り添った見解である。ただ、「歩く」という移動手段に換喩的に現われるとすれば、そのことを深慮すべきであろう。案外大きな問題が横たわっているのではあるまいか。移動するには歩かなければならない。例えば、ほ乳類に限定しても大半は歩いて移動する（走りは歩きの特殊形態）。つまり、生物学的には移動するために「足」を使用すること自体に大した意味はない。しかし、乗り物が発明され社会に浸透して行き、それが人類の生活を決定的に変革し始めて「歩き」の意義が変わった。実は pilgrimage も tourism も当然のことながら「移動」には違いなかった筈である。

一時的に生活圏を離脱して移動するプロセスがまさしく巡礼であり遍路であろう。そしてそのことは観光にも当て嵌まる。しかも「労働」work;labour ではない点が肝要だ。従って、このような時空にあっては pilgrimage を「巡礼」あるいは「参詣」と捉える宗教的慣行制度としてばかりではなく、「一時的且つ非日常的移動」、しかも今日敢えて「共同体」など幻想でしかない社会単位に拘泥せず、「日常的生活圏」を離れる tourism として認識する学問的態度が必要ではあるまいか。世俗化が進展した社会では、地元を離れて観光地を巡ることそれ自体が解放と不安、そして「新たな充電体験」として観光者に齎される。これはある種の「宗教的儀礼」にも通じる「聖なるもの」(the sacred)の再生と言えなくもない。まさしく tour とはメグルことであり、殊に日本の商品化された海外ツアーなどに見られるのは、多数の都市の名所旧跡を忙しく巡るツアーである。移動手段は勿論多様な「乗り物」である。少なくともツーリズムの精神には修行の意義は付与されない。しかるにグレイバーンも認めた＜非日常性＞に内在する re-fresh; re-create の力は文化的分節化した日常から脱して混沌に導くのである。リフレッシュ（再び新しくなる）とは、必ずしも難行・苦行は要らないとする態度はありうるであろう。

遍路が商業化して観光化したと言われて久しい。「現世利益」あるいは「罪障消滅」を望む遍路者も成る程多数いるであろう。また、宗教的あるいは精神的充実感を求める行動の一環として遍路のような巡礼に臨む者もあろう。生／死の問題は医療技術の発展や普及に関係なく、人間の

頭を悩ませて来た永遠のテーマであるから、遍路に旅立つ者は生き方あるいは死に方に想いを廻らすのは当然である。しかし、そのような遍路像は広く共有されていると思われるが、現実の具体的動機となると遍路者によって様々である。ここではこの問題に踏み込むことはできないが、ただ見て来た如く遍路(巡礼)はいわゆる宗教家ではない世俗の日常生活者の「宗教的行為」の制度であった。であればこそ歴史的には紆余曲折を経ながら存続してきた点を見逃してはならない。このことも再三注意を促して来た。そこで、その世俗の生活者が移動と不慣れな旅程に不安を感じながらも旅に出発する時、より便利な手段=ツールを利用したいと思うには殆ど必然と言ったら言い過ぎであろうか。遍路のような巡礼でも例外ではない。いや、遍路であればこそ大師の功徳に肖りたい心情は余程強い筈であり、札所巡拝に価値を見出すことになる。従って、その社会の時代に見合った移動手段を使うのは何の不思議もなかろう。「歩き遍路」しかあり得ない時代はともかくも、電車や路線バスが普及すればそれを活用する。「乗り物遍路」が誕生する。それでも歩く距離は短くはない。決定的な乗り物遍路は「巡(順)拝バス」の運行に始まると言ってよかろう。勿論、このバス運行が可能となるにはいくつかの条件が整備されることが前提となる。

巡拝バスはいつどの事業体が始めたかには確たる証拠があるとは言えない。ただ記録としてはっきり提示しうるのは伊予鉄バスの事例である。実際、第一回の順拝(伊予鉄ではこうある時期から表記する)バスの立案から運行まで携わった添乗員による詳細な記録(巡拝日記)がある[11]。それには当時の時代相が色濃く反映しており、「貸切観光バス」の始まりとともに四国霊場巡りのモータリゼーションの波が押し寄せるとはいえ、先駆者には常に起こりうる不慮の出来事の連続に触れると今日の「安逸な」バス遍路とは随分と違った印象である。しかし、それも当時としては便利な新しい遍路形態であった筈であり、一種の冒険性を帯びていたとは言い得るであろうが、15 泊 16 日の行程で完遂できたのは大変な時間短縮には違いない。私はかつてこの記念すべき伊予鉄の順拝バスにまつわる報告に就いては発表してきた[12]。そこで注目すべき点はこうであった。(1)貸切観光バスの運行を可能にした法律改正がまず挙げられる。即ち、道路運送法の 1951 年の改正で「一般貸切旅客自動車運送事業」ができるようになった。(2)観光バスを走らせるのは夢であったから、この商機に四国霊場を活用したい。四国地元のバス会社であれば、遍路慣行に注目するのはある種の必然的帰結であろう。そして遍路の移動手段として大型バスが利用される意味は甚大であって、その後の遍路自体のあり方に遍路バスは大きく作用したのである。眼目は時間の短縮であった。

実際には、当時の最新型ボンネットバスによる遍路行は手探り状態で始まり、今日の感覚からすれば快適には程遠いものだったであろうが、それでも時代の日常に即応した「便利さ」を「乗客」は感じた筈である。但し、最初の添乗員だった橋本氏の回想では不安の連続だったようである。それも至極当然だろう。1953 年に巡(順)拝バスは松山を出発した。昭和 28 年。まだ道路は少なくともバスが通行するには整備が極めて不十分であったのは想像に難くない。14 泊 15 日の予定が、1 泊日程が延びたという。単純に言えば、道路幅も不確かな状況下で出発したのであるから想定外の障碍は多々生じるであろう。まさしく「巡礼は半ばツーリストであり、ツーリストは半ば巡礼である」のだ。但し、余りに現在(2011 年)のパースペクティヴからその苦労を推し測って感情移入してはならないであろう。というのも、当時の日常生活とイマとでは経済や消費の次元がまるで異なるからである。普段も日常が豊かになり、益々便利になってくれば、おのずと遍路の世界にもそれが反映する。であればこそ生き延びてきた制度であった。この現実を無視する訳には行くまい。

遍路＝巡礼は身体移動を根幹とする活動である。移動の手段が多様化すれば、そのまま遍路

が多様化する。「空中参拝」というアイディアが頓挫した理由も諸々考えられようが、「究極の乗り物遍路」と見做しうるかどうか、という一点も検討を要するかも知れない。つまり、余りに身体の移動感覚がなさ過ぎるのであって、この欠落感も重要ではなかろうか。大きい原因は他に求められようが。ともあれ、伊予鉄の巡拝バスは 10 日間程の時間短縮を企図して始まったのであった。四国の企業であるからには「巡拝バス」は画期となるビジネスチャンスだったであろう。今日疾うにその運行量はピークを過ぎ、乗り物遍路は変貌を遂げつつあり、巡り方も様々である。遍路認識論にとっても移動手段というプロブレマティックの意義は小さいものではない。

この小論を一応の区切りを付けるために、結願の寺51番札所石手寺へ向かう際に、添乗員橋本氏による「お遍路旅日記」の記述には「車中一同感涙する」、といった箇所が見られることを指摘して締め括りたいと思う。

註

[1] 近年増加しつつある外国人遍路の場合はここでは考慮していない。

[2] ここで現代の遍路という社会現象に多角的に「道空間」を通じて学問的産出を行ってきた長田攻一、坂田正顕両氏を中心とした早稲田大学道空間研究会（後に道空間研究所に発展する）の活動に注目しておきたい。歴史学・民俗学の知見に配慮しつつ、社会学的見地から現代にも活き続ける四国遍路調査・研究は 1991 年夏から始まったのである。尚、早稲田大学道空間編(1994)参照。

[3] 補陀落信仰・補陀落渡海と四国遍路との連関は定かではない。その可能性を論じたものとして近藤(1996)が詳しい。

[4] 遍路の開祖といわれる伝説上の人物・伊予国（愛媛県）衛門三郎が始めたとされる。

[5] この極めて画定が困難な習俗に関しては浅井(2004)が参考になる。

[6] 浅井(2004)第五章参照。

[7] 柳田の炯眼には恐れ入る。「明治に入っても巡礼は決して衰微していな。四国には哀れな遍路は大いに減じたけれども、その代わりには春のよい時候などに、盛りの男女の群が楽しげに歩をはこんでいる」（柳田 1976:207）と「新交通」の威力を述べる。

[8] 小林（1992）参照。

[9] （Turner＆Turner 1978：20）。これを後出のグレイバーンは引用して注意を喚起する。

[10] 実際に2003年 7,8 月をかけて完遂された経験のある坂田正顕氏の教示に依る。坂田氏によると、歩いてきた行程を細かに説明しなければならないとのことである。

[11] この日記という体裁の記録は非公開のものであるが、私が直接執筆者H氏ご本人からその活用の承諾を得てコピーを入手した。

[12] 関（1994;1999）参照。

参照文献

浅井證善 2004.『へんろ功徳記と巡拝習俗』、朱鷺書房。

大法輪閣編集部編 2001.『空海密教と四国遍路：マンダラの風光』、大法輪閣。

Graburn,N.H.H. 1989[1977]. Tourism：The Sacred Journey. In *Hosts and Guest* (2nd ed.) V.L.Smith. Philadelphia:University of Pennsylvania Press.

_____ 1996. Tourism. In In *Encyclopedia of Cultural Anthropology vol.4* (eds.) D.Levinson&M.Ember. New York:A Henry Holt Reference Book.

橋本 衛 1991.「お遍路旅日記（四国霊場八十八ヶ所順拝バス 第一回）」（未公刊）

伊予鉄道 1987.『伊予鉄道百年史』。

寂本 1987.『四国徧礼霊場記』（村上護訳）、教育社。原著 1689.

小林一宏 1992.「サンチャゴ・デ・コンポステラ」『スペイン・ポルトガルを知る事典』、平凡社。

小峰一充 2001.「四国遍路の実際」『空海密教と四国遍路:マンダラの風光』。
近藤喜博 1996.「四国辺地から四国遍路へ」『聖蹟巡礼』(「講座 日本の巡礼」第 2 巻)、雄山閣出版。初出 1971.
前田 卓 1996.「江戸時代の巡礼の動き―四国遍路の動き―」『聖蹟巡礼』。初出 1971.
三好昭一郎 1996.「四国遍路史研究序説―遍路の民衆化と諸藩の遍路政策―」『聖蹟巡礼』。初出 1982.
村岡 空 2001.「大師信仰と入定信仰」『空海密教と四国遍路:マンダラの風光』。
長田攻一・坂田正顕・関 三雄編 2003. 『現代の四国遍路:道の社会学の視点から』、学文社。
佐々木信綱校訂 1941[1933]. 『新訂 梁塵秘抄』、岩波文庫。
佐藤謙三校注 1955. 『今昔物語集 本朝世俗部 下巻』、角川ソフィア文庫。
関 三雄 1994.「四国遍路における移動メディアの変容:歩く遍路と乗る遍路」『現代社会と四国遍路道』、早稲田大学道空間研究会。
_____ 1999.「四国遍路と移動メディアの多様化:遍路再考」。『社会学年誌』,65-80.
真野俊和編 1996a.『聖蹟巡礼』(「講座 日本の巡礼」第 2 巻)、雄山閣出版。
_____ 1996b.『巡礼の構造と地方巡礼』(「講座 日本の巡礼」第 3 巻)、雄山閣出版。
真野俊和 1996a.「巡礼の行者―その宗教的達成―」『巡礼の構造と地方巡礼』。
_____ 1996b.「巡礼の構造および地方巡礼の研究成果と課題」『巡礼の構造と地方巡礼』。初出 1986.
白木利幸 2001.「四国遍路の歴史」『空海密教と四国遍路:マンダラの風光』。
Turner,V. & E.Turner. 1978. *Image and Pilgrimage in Christian Culture.* New York: Columbia University Press.
早稲田大学道空間研究会編 1994.『現代社会と四国遍路道』、早稲田大学道空間研究会。
山折哲雄 1996.「巡礼の構造」『巡礼の構造と地方巡礼』(「講座 日本の巡礼」第 3 巻)。
柳田國男 1976.「新交通と文化輸送者」『明治大正史 世相篇』(上)、講談社学術文庫。初出 1930.

サンチャゴ・デ・コンポステーラの巡礼路 http://jp.wikipedia.org/wiki/
Pèlerinage de Saint-Jacques-de-Compostelle http://fr.wikipedia.org/wiki/
Camino de Santiago http://es.wikipedia.org/wiki/

論文

小学校「外国語活動」のための現職教員校内研修の試み

An attempt of in-service teacher training for foreign language activities at elementary school

清水律子[1)]、久保田靖子[1)]、中野香[1)]

Ritsuko Shimizu, Yasuko Kubota, and Kaori Nakano

キーワード:外国語活動　校内研修　英語運用力
Key Words: foreign language activities, in-service training, English communication abilities

1　はじめに

本研究は、2009（平成 21）年 8 月から 2010（平成 22）年 3 月にかけて実施した「小学校外国語活動講座 2009」および「小学校外国語活動講座 2010」（以下、本講座という）について、その設計と実施結果を報告し、小学校教職員の英語使用感覚と、今後求められる研修内容を探ることを目的とする。

2008（平成 20）年 3 月、『小学校学習指導要領』の改訂が告示され、2011 年度 4 月から、全国の小学校における「外国語活動」の実施が決定した。これに合わせて、文部科学省による全国の指導主事らを対象とした指導者養成研修が行われ、続いて各市町村の教育委員会では、中核教員を対象とした研修が行われた。本講座の対象地域においても、2008 年度と 2009 年度に各 5 日間、「小学校外国語活動中核教員研修講座」が実施された。研修の目的は「外国語活動の基本理念等を理解するとともに、授業指導力の向上および英語運用力の向上を図ることと、受講した中核教員が各小学校において、校長・教頭の支援のもと、平成 22 年度までに 2 年間で 30 時間程度の校内研修を計画的に実施することができるようにすること」(1)であった。中核教員は、各学校で 2008 年度と 2009 年度にそれぞれ1名ずつ指名され、中核教員研修を受講する。そこで学んだことをもとに、各勤務校で実情を踏まえた校内研修を企画・実施し、勤務校の教員全員の指導にあたるものとされた。こうして、教員研修センターにおける指導者養成研修の内容が、中核教員研修を経て、全国の現場の小学校教員に伝えられる体制がとられた。

文部科学省の調査(2)では、2007（平成 19）年度には全体の 97%を超える小学校で既

1)　山陽学園大学 総合人間学部 言語文化学科

に英語活動が実施されているものの、その実施時間数や指導形態などには大きな差があることが報告されている。本講座の対象地域においても、過去に英語活動などを行った経験が少ない学校では、校内研修に課せられた課題の大きさに戸惑う様子がみられた。外部から講師を招くしくみや予算措置もなく、各学校がそれぞれの裁量で対応することが求められていた。各地の大学等では「外国語活動」に関する講座も開かれていたが、これらは希望者を対象とした集合型の研修であり、校内研修として活用することは事実上不可能であった。

このような当時の状況に鑑み、著者らは英語教育を通じた地域貢献の一環として、「外国語活動」校内研修のための出張講座の企画に着手した。対象は市内の全ての公立小学校とし、特に英語活動経験の少ない小学校の支援を重視して設計に取り組んだ。より多くの小学校が利用できるように講座を複数準備し、その中から各学校が必要とするものを選択して申し込む方法をとった。また、校内研修の性質上、受講者を移動させることは困難であるため、実施期間を設定して個別に日程調整を行い、所定の日に筆者らが学校を訪問し、校内の一室を借りて講座を実施する形態をとった。

2 事前調査 その1

2008 年度当時、県や市町村の教育委員会などを中心に、各大学などでも小学校教員を対象とした「外国語活動」の研修や研究会が実施されていた。それらは、授業目的の理解、カリキュラムの編成、単元や授業計画、歌やゲーム、絵本などを用いた英語活動、英語ノートの活用例、教室英語の練習、ALT などによる活動体験など、「外国語活動」の実施にあたり広範囲に総合的に学ぶものが多かった。これらは、少なくとも1日数時間以上、多い場合は数日から数ヶ月に渡り、継続して研修するものであった。これらの希望者集合型の講座とは異なり、出張型校内研修講座は一回 90 分以内で完結し、かつ役立つ内容でなければならない。また、校内の全教員が受講することから、より多くの教員の需要に応える内容であることが望ましい。さらに、様々な英語力と英語学習経験を持つ教員に対応すべく、実施方法を工夫する必要がある。そこで、小学校教員の研修需要を探ることを目的に、全国規模の調査や研究報告などを調べると同時に、本講座対象地域の現場教員に研修内容についての聞き取り調査を行った。

2006（平成 18）年に英語活動を実施した全国の公立小学校を対象とした調査[(3)]によると、十分な条件整備がなされていない項目として、7割以上の学校が「教材」「カリキュラム」「教員の英語力」を挙げている。特に課題だと感じている項目としては、「指導する教員の英語力」を挙げた学校が全体の4割を超えて最も多く、この傾向は、高学年における英語活動の年間実施時間数に関わらず、一定である。次に多くの学校が課題として挙げているのは「準備の時間の不足」「カリキュラム」「教員研修」であった。一方、2007 年に全国の公立小学校を対象とした研修内容の調査[(4)]では、7割以上の教員が必要とする研修として「指導法」を挙げ、5 割を遥かに超える教員が「英語力向上」と「指導計画」を挙げている。これらの調査が行われた時点では、「総合的学習の時間」の一部として英語活動が行われており、「外国語活動」とは目的が異なるものの、現場では多くの教員が自らの英語力に不安を感じている状況が浮かび上がってくる。同時に、実際の指導のしかた、教材、指導計画など、授業に直結した準備を早急に整えることを求める声が強いことが分かる。

松畑他[5]が研修後に受講者を対象に行った調査によると、最も多くの受講者が「今後特に役立つ」「もっと学びたい」と回答した項目は、ゲームやチャンツなどの「実践的指導スキル」であり、続いて、教室英語や発音などの「実践的英語能力」であった。また、西崎[6]は研修参加者の不安を調査し、「英語の発音」と「英語の流暢さ」が不安要因の上位 3 位までに挙がっていることを報告している。この傾向は、指導形態に関わらず共通して見られるが、特に単独指導経験がない教員の間で、英語力に関する不安を持つ者の割合が高いと言う。一方、校内研修として希望する研修内容を尋ねたところ、一位は「授業の流れ」であるのに対し、二位は単独指導経験の有無によって異なった結果となっている。不安要因と比較して、校内研修の方が指導経験の影響を強くうけることが報告されており、学校の条件整備状況によって校内研修に必要な内容が異なることが示唆されている。これらの調査からも、自分の英語力に不安を感じながら、喫緊の課題として授業の手順や教材の整備を必要としている教員の実情がうかがえる。

『小学校外国語活動研修ガイドブック』（以下、ガイドブックという）では、研修領域を「授業指導力」と「英語運用力」とに分けている。ガイドブックの記述から、「英語運用力」とは「発音やイントネーション、強勢などの音声面、文法力、とっさの英語の受け応え・あいさつや日常使う簡単な表現等」[7]を運用する力を意味していると思われるが、「外国語活動」を指導する教員に対し、具体的にどのような英語運用場面が想定され、そこでどのような英語力が必要か、そのためにどのような研修が必要かについて、明確な説明はない。具体的な指標が与えられず、漠然と発音や流暢さを向上させるには、校内研修はあまりにも短く、自己研修を含めてもそれに割ける時間は極めて限られており、それが教員の不安を増大させている可能性もあろう。また、教員は「英語学習者」としての経験は持っているものの、「英語使用者」としての経験や使用感覚をどれくらい持っているかは疑問である。英語をコミュニケーションの手段として使用する実感を持たないまま、「外国語を使うことに積極的な姿勢を見せる」「外国語を使うモデルを示す」という役割を果たさねばならないとすれば、それも不安を高める要因の一つになるのではないだろうか。

3　事前調査　その2

以上の調査結果を基に、講座案を「授業指導力」と「英語運用力」に分けて作成し、本講座対象地域の現役小学校教員に意見をうかがった。協力を得たのは、今まで英話活動などを積極的に行ってきた学校の中核教員、あまり英語に触れてこなかった学校の中核教員、および英語活動の指導経験が豊富な教員である。

「授業指導力」研修については、学校によって過去の英語活動経験や準備状況が異なるため、求める研修内容が大きく異なることが分かった。特に授業設計や教材作成については学校差が大きく、研修にも時間がかかる上、研修の指導者としては経験豊かな現場教員が好まれる傾向がみられた。ALT とのティームティーチング（以下、TT という）に関しては、2008 年度当時、ALT の配置が決定していなかったこともあり、研修を求める声はそれほど強くなかった。

それに対して、一様に要望が強かったのが「英語運用力」の研修であった。いずれの学校でも、教員が自分の英語力や英語を使うことに対して強い不安を持っているという声が強く、文献調査で得た情報を確認する結果となった。教員は、子どもの前で堂々と自信を

持って英語を使いたいという気持ちが強い。それが不安となって表れているようであった。中核教員自身も英語には自信がないと感じており、特に発音については何をどう指導してよいか見当がつかず、専門の講師でなければ指導できないと感じていた。発音に加え、英語コミュニケーションの体験や教室英語の研修を求める声も強かった。外国語によるコミュニケーション能力を育てる指導を考える手がかりとして、まず自分自身が外国語によるコミュニケーションを体験し、実感を持つ必要があると感じているようであった。最後に、中核教員としての立場を離れ、個人としての意見もいくらか聞かせていただいた。英語使用経験や指導経験によって興味を持つ部分が異なっており、今後の研修需要の多様化を予想させた。

研修内容に関する意見と同時に寄せられたのが、研修方法に関する要望であった。知識として持っている英語が実際に使えないという意見や、体を動かして学ぶ研修でなければ身に付かないという声が聞かれ、教員の英語力への不安は、英語使用不安だけでなく、英語学習不安も含んでいることがうかがわれた。それは、大きく 4 つに分けることができる。

(1)理解不安：説明を聞いても理解できない不安。
(2)操作不安：説明は理解できても、自分で音声器官を思うように操作できない不安。
(3)使用不安：練習場面では覚えていても、運用場面で使えない不安。
(4)現実との乖離不安：学習が実際の教室活動と結びつかず、授業に生かせない不安。

これらの不安を軽減するためには、使用者（教員）の側に立ち、実際の英語運用場面に密着した研修の内容と方法の検討が必要であろう。同時に、それは教員自身が英語を発音してみることを面白いと感じ、英語を使ってみることを楽しいと感じる体験になるべきである。指導要領の「外国語活動」の解説に「コミュニケーションの楽しさを味わうことなしに、コミュニケーションへの積極的な態度を育成することは難しい」[(8)]とあるが、それは教員自身にも当てはまるのではないだろうか。

4 講座設計方針と講座内容の決定

以上の調査結果に基づき、本講座で扱う研修を「英語運用力」分野に限定し、英語コミュニケーションに関する 2 講座と、教室活動に関する 3 講座を設けた。理解できない不安、操作できない不安に対応するため、講義系と活動系の講座を置き、各学校で自由に組み合わせて選択できるようにした。また、「授業指導力」分野は直接には扱わないが、講座の中に英語の音声や基本的な表現に慣れ親しませる英語活動を積極的に取り入れた。使えない不安や現実と乖離する不安に対応するため、実際の授業活動を通じて発音や英語コミュニケーション力を伸ばすことを講座の設計方針とした。校内研修に割ける時間を考慮して 45 分を 1 単位とし、2 講座同時に 90 分の実施も可能とした。以下は講座一覧である。

「小学校外国語活動講座 2009」
領域 1：コミュニケーション能力の育成と外国語活動
講座 1「地球語としての外国語コミュニケーション能力の育成」（講義 45 分）

講座 2「英語によるコミュニケーションとは？～先生のための英語体験～」（演習 45 分）
領域 2：教室英語力
講座 3「最初に知っておきたい英語発音のしくみ」(演習 45 分)
講座 4「ゲームで学ぶ教室英語」（演習 45 分）
講座 5「チャンツで学ぶ発音の基礎」（演習 45 分）

「小学校外国語活動講座 2010」
2009 年度の内容に一部変更を加えて実施した。「講座 3」と「講座 5」を 1 つの講座に統合し、新たに次の講座を加えた。
2010 年度　講座 5「教室コミュニケーション活動と発音のコツ」（演習 45 分　or 90 分）

5 「小学校外国語活動講座 2009」の実施

講座案内を送付した市内の全公立小学校 93 校のうち、22 校から 26 回の出張講座依頼があった。依頼校には英語活動の経験豊富な学校も含まれており、中核教員自身もさらに学びたい、新たな研修の視点を探りたいという気持ちを持っていることがうかがえた。また、依頼校に地理的な片寄りは見られなかった。表 1 は、講座別の合計依頼数である（実施数でもある）。

表 1：「小学校外国語活動講座 2009」依頼（実施）記録

	領域 1		領域 2		
	講座 1	講座 2	講座 3	講座 4	講座 5
A 小			●	●	
B 小	●	●			
C 小			●	●	
D 小				●	●
E 小	●	●			
F 小			●	●	
G 小				●	●
H 小	●	●			
I 小				●	●
J 小		●			
K 小				●	●
L 小				●	●
M 小	●	●			
N 小	●	●		●	●
O 小				●	●
P 小			●	●	●
Q 小		●		●	
R 小			●	●	
S 小				●	
T 小		●		●	
U 小				●	
V 小				●	●
合計	5	8	5	17	9

依頼の結果から、2 領域とも現場の需要にあった内容だったと考えられる。日程の都合で第 1 希望の講座が実施できず、第 2 希望の講座を実施した学校が 2 件あったことを考慮すれば、教室英語力領域の需要の方がやや多かったと言える。

最も依頼数が多かったのが「講座 4」17 件で、それに次ぐ「講座 2」と「講座 5」の約 2 倍の依頼数があった。「講座 4」の 17 件中 14 件までが「講座 3」もしくは「講座 5」との組み合わせで申し込まれていることから、発音研修の需要の高さもうかがえる。しかし、事前に発音研修を求める声が最も高かったにもかかわらず、発音講座のみの依頼はなく、全て「講座 4」との組み合わせである。漠然とした発音練習ではなく、具体的な教室活動場面に根ざした発音指導を求めていることが示唆される。

活動系の講座と比較すると、講義系の「講座 1」と「講座 3」はどちらも依頼が少ない。また、講義系のみが単独で依頼されることはなく、常に活動系講座と組み合わせて依頼されていることから、体を動かして学ぶことが好まれる傾向がみられる。いずれも、準備調査で得た情報が、一般的にも正しいことを思わせる結果となった。

6 小学校教員の英語使用感覚

「外国語活動」の内容の一部として、外国語を用いてコミュニケーションを図る楽しさを体験することが挙げられているが、教員自身はコミュニケーションを目的とした英語の使用感覚をどの程度持っているのだろうか。そして、この使用感覚に影響を与える要因として何が考えられるだろうか。それを本講座の受講者調査から探ってみたい。

研修終了直後に無記名の質問紙調査を実施し、回答者の年齢、海外経験、英語活動の指導形態、および英語の使用感を尋ねた。調査への協力は受講者の自由意思によるが、ほぼ全員に近い受講者から回答を得た。分析の対象は、2009 年 8 月に本講座を受講した 15 校の受講者 291 名から得られた回答のうち、有効回答 264 名である。(Appendix 参照)

まず、過去1年間に「コミュニケーションを目的として英語を使った」と感じた経験の有無を尋ねたところ、「ある」と答えた者が 150 名、「ない」と答えた者が 114 名で、使用感を持つ人の方がやや多かった(図 1)。次に、回答者の年齢を 20 代から 50 までの 4 区分で尋ねたところ、40～50 代の割合がやや多い集団であることが分かった(図 2)。さらに、外国(英語圏とは限らない)に滞在した経験の有無と、主なものから3件について訪問先と滞在期間を尋ねたところ、回答者の 75%が外国滞在経験を持っていることが分かった。報告された滞在日数を合計し、経験なし、1～9 日、10～19 日、20 日以上の 4 区分に分類したところ、いずれもほぼ同人数であった。20 日以上の中には、特定の国(いずれも英語圏ではない)に 3 年以上滞在した経験者が 3 名含まれていた。また、10 日未満の訪問先は韓国や中国などのアジア諸国が多かった(図 3)。最後に、英語活動の指導経験の有無と指導形態を尋ねたところ、8 割以上が指導に関わった経験を持っていることが分かった。単独で指導した経験者と、TT の副主導的立場で指導した経験者とがほぼ同数で最も多く、TT の主導的立場で指導した経験者は 1 割に満たなかった(図 4)。

以上の年齢、海外経験、授業形態の 3 点と英語使用感の有無との関係を検証したところ、海外経験(χ^2=8.57, df=3, p=.03)と指導形態(χ^2=22.08, df=4, p=.0001)との間に有意な相関関係が見られた。海外経験については、20 日以上の滞在経験者の 7 割が

過去 1 年間に英語を使用したと回答しており、19 日以下はいずれも 5 割前後に留まっている。また、指導形態については、TT の主導的立場で指導した者と単独で指導した者の 7 割以上が英語を使用したと回答しており、TT 副主導の 5 割程度、指導経験なしの 3 割程度と比較して使用感の高さが顕著である。この調査は本講座に申し込んだ学校のみを対象にしたものであり、この分析から因果関係は判断できないなどの制限はあるものの、外国に長く滞在するだけでなく、英語活動を行う授業に中心的主導的立場で関わることで、英語をコミュニケーションのために使用する実感が増す可能性があることを示唆していると言えよう。

図 1：英語使用感

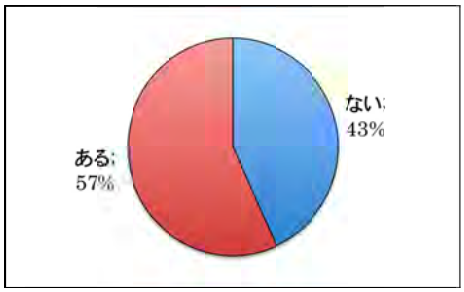


図 2：年齢

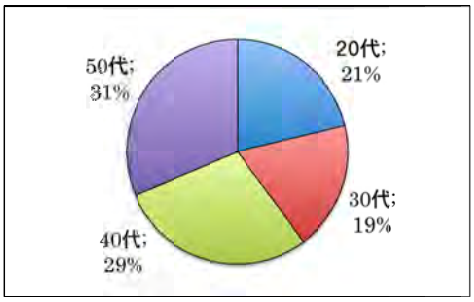


図 3：海外経験

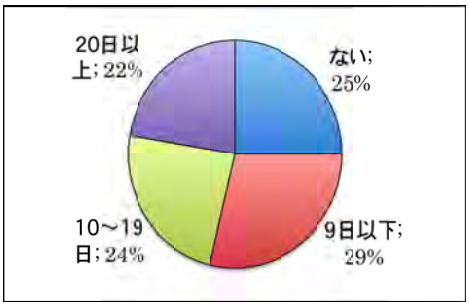
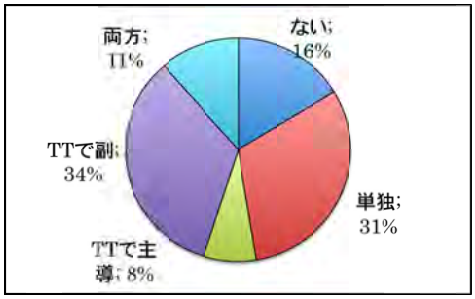


図 4：英語活動の指導形態



7　研修の評価と自由記述の分析

質問紙調査では、研修の評価と特に印象に残った点なども自由に記述していただいた。研修評価と自由記述から、講座内容が受講者の需要に応じたものであったか、また受講者が有益と感じる研修とはどのようなものであるかを探りたい。

7.1　研修の評価

研修全体とその有益度（自分にとって研修がどの程度役立つ内容であったか）の 2 項目について、「大変よかった／大変役立つ」から「よくなかった／役立たない」までの 5 段階で評価を求めた。その結果は表 2 の通りである。年度により内容や実施形態が多少異なるため、ここでは、同一内容を同一形態で実施した研修について報告する。

いずれの講座も、全体評価、有益度評価ともに高い評価を得た。回答のばらつきも少なく、受講者のほぼ全員が「大変よかった／大変役立つ」もしくは「よかった／役に立つ」と評価している。これは、一部には当時の緊迫した状況の反映でもあると思われる。「外国語活

動」の必修化を目前に控え、各学校とも全力で準備を進めていた時期であり、本講座においても受講者の真剣な取組みが強く感じられた。その熱心さが、講座の評価を一層高めた可能性がある。そうした事情を考慮しても、本講座に対する満足度は高かったと考えてよいだろう。特に有益度の高さから、受講者の需要に応じた講座であったと考えられる。

表２：講座別研修評価

	講座１＆２ (2009,2010 年度)	講座３＆４ (2009 年度)	講座４＆５ (2009 年度)	講座５ (2010 年度)
回答者数	136 名	74 名	101 名	121 名
全体評価平均* (SD)	4.52 (0.54)	4.79 (0.40)	4.87 (0.37)	4.44 (0.56)
有益度評価平均** (SD)	4.51 (0.50)	4.83 (0.37)	4.80 (0.43)	4.47 (0.56)

* 「大変よい」=5、「よくない」=1 として数値化した平均値
** 「大変役立つ」=5、「役立たない」=1 として数値化した平均値

それでは、具体的に講座のどの点が有益だったのだろうか。それを質問紙の自由記述から探ってみたい。質問紙全体の回答時間は 5 分以内で、自由記述欄は最後に設けられている。自由記述欄の記入は回答者の自由であり、未記入も少なくないことから、敢えて記述されたものは、特に強く印象に残った事柄であると考えられる。

7.2 講座概要と自由記述分析

7.2.1 「講座１」「講座２」

(1) 講座概要

「講座 1」は、「外国語活動」の目的理解とコミュニケーション能力の素地とは何かについて考える45分の講義系の講座である。この講座では、World Englishesの視点から英語を捉え、世界における英語の役割に触れた。同時に、コミュニケーション能力とは何かを再考し、その素地育成に必要な知識、態度とは何かを説明した。

「講座 2」は、45 分の活動系の講座である。目的は、教員が英語コミュニケーション活動を体験することで、外国語活動の趣旨を理解することにある。講座内容は、受講者が英語コミュニケーションを体感し、コミュニケーションにおける言語の重要性はもとより、非言語の役割の大きさに気づく活動で構成されている。

(2) 自由記述の分析

分析対象は、「講座 1」「講座 2」を同時受講した学校、2009 年度 5 校、2010 年度 2 校の計 7 校の 136 名である。「講座 2」のみ単独で受講した学校 3 校は、分析の対象から除いた。自由記述の内容を 9 項目に分類し、項目ごとの回答者の割合を集計した（表 3）。一人の記述の中で複数の項目に触れている場合があるため、合計は 100%を超えている。

「講座 1」「講座 2」で最も多く記述された項目は、「①多様な英語理解から発音の不安減少」（24.3%）であった。「講座 1」では世界における多様な英語について話した。そのため、記述には、『色々な英語（Englishes）があると分かったので恐れず発音していこう』『発音は国によって異なることが分かり、少し安心した』とあったが、これは、受講者が

World Englishes の概念や、多様な英語（特に発音）を知ることで、自分自身が考えている模範的な発音の枠組みを変化させたものと推測される。これにより、日本人の英語を受け入れ、発音に対する不安を減少させていったと思われる。教員は、事前調査において発音に関する自信のなさと不安を表していた。この不安を取り除くためには、発音学習とともに、世界における英語の役割などを知る必要もあるだろう。また、教員として、「外国語活動」でどう指導していくのか、何のために指導するのかを考えるためにもこうした知識は有益だと考える。

表３:「講座１」「講座２」自由記述分析

記述内容の分類	回答者割合
① 多様な英語理解から発音の不安減少	24.3%
② 外国語活動の目的理解とコミュニケーションの重要性	13.2%
③ 楽しい・分かる	13.2%
④ 意欲の向上	8.8%
⑤ 実践的活動	8.8%
⑥ 非言語の重要性	5.1%
⑦ 感謝	19.9%
⑧ その他	5.9%
⑨ 未記入	38.2%

次に多く記述された項目は、「②外国語活動の目的理解とコミュニケーションの重要性」（13.2%）であった。この項目もまた「講座 1」の内容から導き出されたものである。この講座では、外国語学習を始めるにあたり、小学校学習指導要領に示された目標、内容を読み解き、理解を深めた。このような作業を行うことで、漠然と捉えていた「外国語活動」の意味や目標を明確にすることができたと思われる。受講者からは、『外国語活動の本質、狙いについて、話を聞いて大いに納得、実感した』『コミュニケーションの素地について自分なりに実感できた』などの意見があった。2009 年度の段階では、「外国語活動」の方向性を明確にすることが必要とされていたと思われる。しかしながら、2009 年に 12 名の記述があったこの項目であるが、2010 年にはこれに関して記述した者はいなかった。このことは、2009 年から 2010 年への需要の変化を感じ取れる結果となった。

「講座 2」に関する記述として、非言語の重要性の記述が僅かであるが見られた（5.1%）。この講座では、非言語による意味伝達の大きさを説明し、その後教員同士で英語コミュニケーション活動を行った。活動では、非言語を効果的に使ってコミュニケーションを行うことを意識した。記述には、『非言語で伝えることの割合の高さに改めてびっくりした』『コミュニケーションにおいて非言語で送られることが、非常に大きいことに気づいた』とあり、非言語をうまく使うことで、意味伝達が促進されることを実感したのだと想像する。このような気づきが、コミュニケーションとはどのようなものかの発見につながると同時に、自らが英語でコミュニケーションを行う際の自信につながると考える。そうした意味において、コミュニケーション活動を体験するような講座は有益だと考える。

7.2.2 「講座３」「講座４」「講座５」（いずれも 2009 年度）

(1) 講座概要

「講座 3」は、英語音声の基本的特徴の一部を解説する 45 分の講義系講座で、解説に続き、英語ノートで扱われている単語で発音練習を行い、理解を深めるものである。

「講義 4」と「講義 5」は、それぞれ 45 分の活動系講座である。「講座 4」では英語ノートに含まれるカードゲーム活動を取り上げ、英語によるコミュニケーションの実際を示しながら、活動指示に必要な英語表現を繰り返し練習する。「講座 5」では英語の音声特徴を確認しながら、英語ノートに含まれるチャンツとそれに関連した歌を用いて、単語や語句を練習するものである。

（2） 自由記述の分析

分析対象は、「講座 3」「講座 4」を同時受講した 4 校 74 名と、「講座 4」「講座 5」を同時受講した 6 校 101 名である。実際の受講者はこれより多いが、実施条件が異なる 3 校は分析の対象から除いた。自由記述の内容を９項目に分類し、項目ごとの回答者の割合を集計した（表 4）。一人の記述の中で複数の項目に触れている場合があるため、合計は 100%を超えている。

表４:「講座３」「講座４」「講座５」自由記述分析

記述内容の分類	回答者割合	
	講座３＆４	講座４＆５
① 発音のしくみ	27.0%	29.7%
② 指導や練習のしかた	24.3%	30.7%
③ 楽しい・分かる	23.0%	18.8%
④ 実践的活動	13.5%	7.9%
⑤ 意欲の向上	12.2%	9.9%
⑥ 不安と安心	8.1%	14.9%
⑦ 感謝	5.4%	4.0%
⑧ その他	12.2%	12.9%
⑨ 未記入	23.0%	21.8 %

どちらの研修にも共通して多かったのは「① 発音のしくみ」に関する記述であった(27.0%, 29.7%)。講義系、活動系のいずれの受講者も、発音の仕組みや発音のしかたに関する学習が有益だったこと記述している。事前調査で発音研修を求める声が大きかったが、これらの講座はその要望の一部に応えるものであったと思われる。記述には、大学までに受けてきた発音学習の不足を述べるものも多く、今後も「外国語活動」の指導目的に応じた発音研修が必要だと思われる。

発音と同程度に多かったのが、教室英語の使い方と練習のしかたに関する記述であった（②「指導と練習のしかた」）。実際のゲーム活動の中で指示表現に触れ、観察と体験を通じて学習することで、教室英語を使う具体的イメージが掴めたことを述べる記述が目立った。また、『リズムとして捉える』『動作をつける』『まねから始めて繰り返す』『意味を意識し

て』『繰り返すと身に付く』など、学んだ表現を定着させるための工夫を述べた者も多かった。このことから、教室で使う英語力を伸ばすには、単に役立つ表現を暗記するのではなく、視線、身振り、声調などを伴った身体表現として使われている英語を観察し、体験する研修が有益ではないだろうか。

肯定的な記述が多い中で、不安を表す記述も見うけられた（「⑥不安と安心」）。実践的で体験型の研修は、『声を出すのに抵抗がある』『苦手意識がある』『自信がない』などの不安感を伴う可能性がある。不安の背景は様々であり、『英語を話すのはむつかしすぎるというイメージがあったが、今日のような英語なら少し使えそうな気がした。』という記述から推測されるように、英語に対して漠然と過大な不安を抱いている場合がある。また、最初から高すぎる目標を掲げ、どこから手をつけてよいか分からず不安を高めていると思われる記述もみられた。受講者の現状を認識し、目標を絞り、段階的にできることを増やすことで、こうした不安をある程度軽減できるのではないだろうか。また、『発音は苦手。でも CD の発音を聴いているとなるほどと分かってくる楽しさがあった。（中略）がんばってみようと思えました』などの記述に見られるように、教員自身が学ぶ楽しみを体験することで、不安を乗り越える手がかりになることもあると思われる。

7.2.3「講座 5」（2010 年度）

（1）講座概要

2009 年度の研修で、教室活動場面に根差した発音指導に対する要望が高かったことを受け、2010 年度には、「教室コミュニケーション活動と発音のコツ」という新たな講座を設けた。まず、英語の発音方法について、日本語との対比からの解説を行った。その後、英語ノート 2 の中から日付の言い方をとりあげ、コミュニケーション活動を行った。

この講座は、45 分版と 90 分版を用意し、どちらかを選択してもらった。45 分版も 90 分版も、発音講座とコミュニケーション活動の組み合せであることは変えず、解説を簡略にしたり、活動の数を増減させることで時間を調整した。

(2)自由記述の分析

分析対象は、「講座 5」(2010 年度)を受講した 6 校の計 121 名である。自由記述の内容を 8 項目に分類し、項目ごとの回答者の割合を集計した（表 5）。一人の記述の中で複数の項目に触れている場合があるため、合計は 100%を超えている。

最も多く記述された項目は、「①発音の方法について」の 17.3％である。①の項目には、『s、sh、th の発音の違いがよく分かった』『日本語との対比での指導は分かりやすかった』などの記述がみられたが、この講座では、英語の/s//ʃ//θ/の音という、特定項目のみに限定して解説と活動を行ったことから、一回完結の短時間の研修講座でも、分かりやすさや何かを学習したという達成を実感することが可能になったと推察される。

その反面、「⑦ その他」の項目に分類された記述の中に、『母音の発音についても学習したい』『April の発音がうまくできなかった』といった意見が見られ、講座の目標を限定する場合、分かりやすさを確保できる一方で、受講者によっては、需要に合わない講座になる可能性がある。分かりやすさを犠牲にすることなく、受講者の需要に応えるためには、研修を継続的に受講できる体制づくりが望まれる。

表 5:「講座 5」(2010 年度)自由記述分析

記述内容の分類	回答者割合
① 発音の方法について	17.3%
② 楽しい・分かる	15.7%
③ 意欲の向上	4.1%
④ 実践的活動	0.8%
⑤ 感謝	19.8%
⑥ その他	13.2%
⑦ 未記入	51.2%

ほとんどの講座で共通する記述も見られた。「実践的活動」の項目が「講座 1＆2」で 8.8%、「講座 3＆4」で 13.5%、「講座 4＆5」で 7.9%となっており、ここには、『すぐ使えそうです』『実際に使える英語を研修できてよかった』という、学んだことがすぐに活かせることを評価する記述が多くみられた。

一方、「講座 5」(2010 年度)では、「④ 実践的活動」の項目の割合が 0.8%であった。この講座は、発音の仕方の解説の後に、学んだ音を実際にコミュニケーションの中で使用することに主眼を置いた実践練習であった。そのため、英語ノートからの題材ではあったものの、活動が教員向けになってしまい、そのまま授業で使うには難しすぎるものとなった可能性がある。日々、様々な業務に追われている教員を対象とした研修の場合、受講内容が即、明日の授業でいかせる、ということが、ことのほか重要な意味を持つことが分かる。今後の講座では、扱う言語材料から活動内容にいたるまで、児童を対象にした指導にすぐに活用できるという点を熟慮することが必要だと思われる。

全ての講座において多くみられたのは、楽しかった・分かったという記述である。「楽しい・分かる」の項目で、「講座 1＆2」で 13.1%、「講座 3＆4」で 23.0%、「講座 4＆5」で 18.8%、「講座 5」(2010 年度)で 15.7%の記述がみられた。講座全般に対して単に『楽しい講座でした』『よく分かった』という声に加えて、ある特定の事項に関して、なぜ楽しかったのか、分かったのかの理由を明記した記述もあった。

この理由の記述をみてみると、分かったという声は、『段階的指導で分かりやすい』『ピンポイントの目当てで分かりやすい』といった、分かりやすい講義の設計に基づいたものが多かった。また、楽しかったという記述は、『それらしい発音になって楽しかった』『発音するのが楽しくなった』『コミュニケーション活動が楽しかった』『動きがあって楽しかった』などで、挑戦してみると自分で発音できた、人と交流できた、実際に自分で身体を動かした、といった楽しさから出てきた声のようであった。

目標を限定し指導手順に配慮した、分かりやすい講義があり、それに続いて身体表現を伴う発音練習や、非言語表現を駆使したコミュニケーション活動など、本当の意味での英語使用感覚を体験する演習が行われる。このような研修が、受講者の『分かる・楽しい』という印象を生み出すのではないだろうか。『できる』『分かる』『楽しい』という気持ちが積み重なれば、その後で、『できそうな気がする』『やってみたい』『もっと学びたい』という意欲の向上につながる可能性がある。今回、「意欲の向上」を表す記述は、どの講座も 1 割程度にとどまっており、研修の継続が望まれる。

8　英語運用力の研修に求められるもの

以上の考察に基づき、英語運用力の向上に有益だと思われる研修内容と留意点を 5 点にまとめた。

(1)英語によるコミュニケーション活動を体験する研修を行う

子どもに対して外国語を使うモデルを示すためには、教員自身が英語使用者としての実感を持つ必要がある。そのためには、非言語の使用も交えながら、実際にコミュニケーションの手段として英語を使う活動を体験する必要があろう。授業で英語を使うこともその一例である。「外国語活動」に主導的立場で関わることで、英語使用者としての実感を高めることができる。

(2)「外国語活動」の内容や目的に応じた発音指導を行う

世界における英語の役割を理解し、発音練習の目標について考える。その上で、教員の側に立ち、発音の学習項目を厳選し、優先順位を決めて指導するべきである。また、教員の現状を認識し、目標を絞り、段階的に指導することで、自信を育てる研修を目指す必要がある。体験的な学習を中心としながら、適宜理論を取り入れ、継続して研修することが望まれる。

(3)実際の活動場面に密着した教室英語の指導を行う

単に役立つ表現を暗記するのではなく、言語として英語が使用される場面を観察し、体験する機会を提供する。表情などを含めた身体表現としての英語使用に直接触れることが重要である。1回完結の研修では、指導目標を限定し、短時間でも達成感のある研修を目指す。

(4)教室活動に直結した活動や題材を使用する

授業ですぐ役に立つ活動は、教員の学習意欲を著しく高める。授業でそのまま使用できる指示表現や会話の型を提供する。さらに、それを使う研修を経て、自分で使うことができるようにする。練習用の活動や単語は英語ノートなどのよく使う教材から選ぶ。

(5)教員自身が、英語を使う楽しさを実感する研修を行う

積極的にコミュニケーションを図る態度を育てるには、教員自身が英語を使うことを楽しいと感じる経験を持つことが極めて重要である。「楽しい」気持ちにつながると考えられる、「分かる」「できる」「人とつながる」「体を動かす」活動経験を増やす。同時に、学習本来の楽しさを感じることができるように、英語の使用不安や学習不安を軽減するよう努める必要がある。

このような方向で設計された英語運用力の研修は、授業指導力と深く関わり、英語によるコミュニケーションを強く意識したものになる。同時に、受講者の認知的要因や動機付けを重視したものにもなるだろう。

9　おわりに

2011 年 4 月から「外国語活動」は全国の小学校で全面実施されている。それに伴い、教育現場の環境や教員の意識にも変化が生じている。既に、本講座の実施中にも感じられた需要の変化は、さらに多方面に広がることが予想される。また、今後「外国語活動」の成果や課題の検証も行われるだろう。「外国語活動」がどのような位置づけになろうとも、コミュニケーションの喜びを伝える手段としての英語であることを忘れず、研修の在り方を考

えていきたい。

謝辞

本講座の事前準備にあたり、ご助言やご意見をくださった皆様、また、本講座をご利用くださり、アンケートにご協力くださった皆様に、心より感謝申し上げます。

注

(1) 岡山市総合教育センター (2008)『総合教育センターだより』通巻 No.131.

(2) 文部科学省 (2008)『平成 19 年度小学校英語活動実施状況調査集計結果』

(3) Benesse 教育研究開発センター (2006)『第1回小学校英語に関する基本調査(教員調査)』 http://benesse.jp/berd/ (2011 年 11 月現在)

(4) 日本生涯学習総合研究所 (2007)『公立小学校の英語活動に関する現状調査』 http://www.shogai-soken.or.jp/ (2011 年 11 月現在)

(5) 松畑熙一.中野宏. 名合智子. 橋内幸子. 垣見益子. 佐生武彦. 佐藤大介 (2006)「「中国学園小学校英語活動支援講座」(文部科学省小学校英語活動地域サポート事業)報告 (2) 受講生アンケート報告」『中国学園紀要』5. pp.49-58.

(6) 西崎有多子 (2009)「小学校外国語活動(英語活動)における指導者の現状と課題～学級担任が単独で行う授業に向けて～」『東邦学誌』第 38 巻第 1 号. pp.53-71.

(7) 文部科学省 (2008)『小学校外国語活動研修ガイドブック』p.16.

(8) 文部科学省 (2008)『小学校学習指導要領解説 外国語活動編』p.10.

Appendix

「小学校外国語活動講座」質問紙

1　回答者ご自身について、以下、該当するものに印をつけてください。

(1) 年令をお答えください。

20 才以下	30～39 才	40～49 才	50 才以上	合計
56 人	49 人	76 人	83 人	264 人

(2)今までに、外国を訪問したり滞在したことがありますか。

ない

ある　→　ある方は、主な訪問先と滞在期間をお答えください。

なし	1～9 日	10～19 日	20 日以上	合計
66 人	76 人	63 人	59 人	264 人

(3)過去1年間に英語を使いましたか。あなたが「英語を使った」と感じた範囲でお答え下さい。

使わなかった

使った

使わなかった	使った	合計
114 人	150 人	264 人

2(3)今までに英語活動を担当したことがありますか。

全くない

主に単独で担当したことがある

主に TT で主導的立場で担当したことがある

主に TT で副主導的立場で担当したことがある

単独も TT も両方とも同じくらい経験がある

その他

なし	単独	TT 主導	TT 副主導	両方	その他	合計
82	20	89	30	43	0	264 人

3　今日の講座について

(1)講座内容を評価してください。

大変よかった　よかった　どちらでもない　あまりよくなかった　よくなかった

(3)今日の講座は、あなたにとって役立つものでしたか。

大変役立つ　役立つ　どちらでもない　あまり役立たない　役立たない

(4)講座について、感じたことやご意見、今まで知らなかった発見などあればお聞かせください。

論文

子宮筋腫合併妊婦の看護支援の検討―1 症例の経験より―

妹尾未妃 [1)]、富岡美佳 [1)]、中塚幹也 [2)]

Miki Senoo, Mika Tomioka, Mikiya Nakatsuka

キーワード：子宮筋腫，妊婦，看護支援

Ⅰ．はじめに

子宮筋腫は良性の腫瘍であり，腫瘍の発育はエストロゲンに依存しており，好発年齢は 30～40 歳 [1)]であることから，生殖年齢に重なるため妊娠に合併することも稀ではない。また，近年では女性の晩婚化に伴う結婚出産年齢の上昇や罹患年齢の若年化により，子宮筋腫合併妊婦は増加傾向にある。杉本ら [2)]によると，子宮筋腫は生殖年齢女性の 20～25%に見られ，子宮筋腫合併妊娠は全妊娠の 1.4～3.9%程度に見られるとされる。子宮筋腫合併妊娠では妊娠期には，子宮筋腫の増大や切迫流早産や疼痛などがあり，分娩期には微弱陣痛や児頭下降障害や癒着胎盤などのリスクがある。子宮筋腫合併妊娠のうち 0.2%が子宮筋腫の変性に起因した疼痛などにより，入院加療が必要となることが報告されている [3)]。また，産褥期では，子宮復古不全や産褥熱など様々なリスクがあることも知られている [4)]。

子宮筋腫に関する国内外の先行研究を概観すると，医学的な観点からの研究は散見するが、看護における研究は少なく，国内でわずか 10 件のみであった。その内容は，木村ら [5)]による腹腔鏡下手術のクリニカルパスの検討や子宮筋腫手術による精神的看護 [6～10)]や子宮動脈塞栓術（Uterine Artery Embolization：UAE）[11)]などが 7 件であり，子宮筋腫合併妊婦に関する研究は福島 [12)]による巨大筋腫を合併した妊婦の排便機能障害の看護援助の検討を含む 3 件のみであった。前述したように，子宮筋腫合併妊娠は妊娠期から産褥期まで様々な症状を発症する可能性があり，そのハイリスク妊娠としての妊娠管理や看護支援は重要であると考えられる。

ハイリスク妊婦の心理的研究においては，若年妊婦は産後に経済的不安等を抱えている [13)]ことや，切迫早産妊婦は自分自身や胎児や病態に関する今後の不安を抱えている [14), 15)]と言われている。また，多胎妊婦は胎児や育児に対する不安がある [16), 17)]と言われている。しかし，国内外の先行研究でも，妊娠から産後までの子宮筋腫合併女性の妊娠経過とそれに伴う心理的側面や，それらに注目した看護支援は明らかになってないのが現状である。そこで本研究は，子宮筋腫合併妊婦の看護支援の検討を目的とし，子宮筋腫合併妊娠女性が，種々のリスクと不安を抱えながら分娩に至った事例の妊娠経過と医療従事者の支援の現状を分析し，今後の看護支援の在り方について検討することを目的とした。

Ⅱ．方法

1) 山陽学園大学看護学部看護学科
2) 岡山大学大学院保健学研究科

1. 調査対象と方法

本研究は，A 県内 B 病院にて，2008 年の 1 年間に分娩に至った 409 例のうち，5cm 以上の子宮筋腫合併妊婦で，分娩に至った 1 名に関わった看護者を対象とした。子宮筋腫の大きさについては，松原ら[18]，小池ら[19]が，直径 5～6cm 以上の大きな筋腫は早産、常位胎盤早期剥離、子宮内胎児死亡のリスクが高まるので慎重かつ厳重な管理が必要であると述べているのを参考にした。

この 1 名の子宮筋腫合併妊婦の妊娠・分娩・産褥経過に主に関わった，看護者 2 名にインタビューを実施し逐語録化した後，分析した。また，妊娠・分娩・産褥経過において記憶が不明瞭な点については，診療録を振り返り，確認を行うことで，内容にずれが生じないように配慮した。

2. 倫理的配慮

本研究は A 県内 B 病院の倫理審査を受け，承認を受け実施した。また，対象者には，本研究の主旨と方法について説明書を用いて説明し同意を得た。施設名や患者個人の情報は，特定されない形で公開し，看護者との会話は全てプライバシーの保てる個室で行った。また，本事例に主に関わった看護者 2 名のインタビュー内容は逐語録化し，個人が特定できない形で鍵のかかる書庫で保管し，研究終了後にシュレッダーにかけ破棄した。

Ⅲ. 事例紹介

C さん，20 歳代の初産婦。市販の妊娠検査薬にて陽性反応があり，B 病院を受診した。妊娠判明時（妊娠 9 週 2 日）に直径 84mm の大きさの子宮筋腫を指摘され，妊娠 11 週 6 日に開腹での子宮筋腫核出術を受けた。妊娠 18 週 3 日に性器出血があり，自宅にて安静加療。その後の経過は良好。C さんの希望にて経腟分娩予定であったが，妊娠 40 週 1 日，外来にて胎児心拍モニター中に児心音異常が出現し，緊急帝王切開となった。体重 2942g の男児出生，アプガースコア 1 分後 9 点，5 分後 10 点で良好。分娩時出血量 378g。母子共に経過良好。産褥経過も良好で産後 5 日目に退院した。退院後 1 週間後の外来診察時も経過良好で，1 ヶ月健診時も母子共に経過良好であった。

Ⅳ. 結果

1. 事例の妊娠経過と心理過程、看護支援内容

1）妊娠初期（表 1）

（1）妊娠経過と心理過程

妊娠初期（妊娠 9 週 2 日）の妊婦健診にて 84mm の大きさの筋層内筋腫合併の診断を受け，このとき C さんは，初めて子宮筋腫合併妊娠であることを知った。B 病院の子宮筋腫核出術の基準と医師の診断結果により，子宮筋腫核出術の必要性が説明され，C さんの同意を得て，手術が施行された。子宮筋腫核出術のために入院後の C さんの様子については，看護者へのインタビューでは「手術前は，風邪症状の訴えはあったが，手術や子宮筋腫や胎児に対する不安等の訴えは聞かれなかった」と述べられた。

妊娠 11 週 6 日，開腹手術にて子宮筋腫核出術が施行された。手術後の様子について，看護者は「C さんは，赤ちゃんは大丈夫かな？など，胎児の安全に対する不安の訴えが聞かれるようになった」と述べていた。C さんは，ドップラーにて胎児心音を確認できると安堵した表情を見せ，「よかった」と安心した言動が見られた。その後，12 週 2 日（術後 3 日目）には，医師による超音波診断法にて胎児が元気に動いている様子が確認され，「胎児が無事に成長していることに安堵する表情が C

さんからも見られ，次第に不安が軽減していった様子であった」と看護者から語られた。子宮筋腫核出術後の経過は良好で，切開創部の問題なく，妊娠 13 週 1 日（術後 9 日目）に通常退院することができた。

(2)看護支援内容

今回，C さんに対する看護支援としては，C さんの妊娠診断時から子宮筋腫核出術のために入院するまでの間は，外来にて医師が中心の診察のみであり，外来看護者は診察補助のみの関わりであった。直接的に看護師，助産師が支援できたのは入院中のみであった。子宮筋腫核出術後から C さんからは「赤ちゃんは大丈夫かな？などの不安を訴えるようになりました」と看護者が述べていたように，胎児の安全に対する心配が増強した様子であった。この時の様子について，看護者は，「手術までは特に不安の訴えはなかった C さんが，手術直後から急に不安を訴えるようになって，もしかしたら手術前から胎児の安全に対する不安があったけど，表出できなかったのではないか」と振り返っていた。そして，このような不安に対しては，「入院中は，ドップラーで胎児心音を毎日，一緒に確認をするなどして，胎児の元気な様子を確認し，C さんの不安の軽減に努めようとした」と語られた。また，12 週 2 日（術後 3 日目）には，医師による超音波にて胎児が元気に動いている様子の説明があり，実際に胎児の様子を確認でき，安心を促すことにつながっていった。このように，実際に胎児の様子を C さんと一緒に確認することで，胎児の元気な状態を C さんに直接的に知らせ不安軽減に努めた。

2）妊娠中期（表 2）

（1）妊娠経過と心理過程

子宮筋腫核出術後からは正常な妊娠経過を送っていたが，妊娠 18 週 3 日に，突然，腹痛を伴わない性器出血があり，夜間の救急外来を受診した。この時の様子について「突然の出血で赤ちゃんの状態が危ないのではないかと不安そうな表情をしていた」と看護者は述べていた。夜間担当医師の診察の結果，子宮頸管ポリープと子宮膣部びらんはあったものの，出血部位は不明であった。そのため，一時，切迫流産疑いで，自宅安静の指示にて安静に過ごしていた。その後，出血は見られず，特に問題なく妊娠期を過ごしていた。また，子宮筋腫核出術後には，胎児の安全について不安に関する発言等も聞かれていたが、「出血が落ち着いた頃からは徐々に胎動も感じるようになったからか，特に不安の訴えはなかった」と看護者は振り返った。

（2）看護支援内容

妊娠中期には正常な妊娠経過を送っており，その間は外来診察のみで外来看護者は診察補助のみの関わりであった。その後， C さんが，救急受診をしたことについて外来看護者と連絡を取ったが，直接的に病棟看護者が C さんと関わる機会はなかった。看護者は「C さんは妊婦健診中は医師が関わることが中心で，子宮筋腫核出後のハイリスク妊婦であるという認識はあまりなく，その後の妊娠経過や C さんに対する直接的な支援は出来ていなかった」と振り返っていた。看護者へのインタビューからも，性器出血後の C さんの心理面に関する情報等は定かではなく，「C さんの気持ちに十分に配慮した関わりが出来ていなかった」と述べていた。

3）妊娠末期（表 3）

(1)妊娠経過と心理過程

妊娠 34 週で分娩方法について医師から説明された。医師からは，子宮筋腫核出術後であり，子宮破裂のリスクがあることからも選択的帝王切開の選択肢について説明された。しかし，C さんは迷った結果，経膣分娩の希望し，医師から経膣分娩を試みるが状況によっては帝王切開になることの説明を受け，自分の選択は間違っていないだろうかと分娩方法に不安を持ったまま妊娠期間を過ごすこととなった。

陣痛開始以前の妊娠 40 週 1 日に，予定日超過のため外来にて胎児心拍モニター施行時に，胎児心拍異常が見られ緊急帝王切開となった。児は 2942g の男児，アプガースコア 1 分後 9 点，5 分後 10 点であった。分娩時出血量 378ml であった。子宮筋腫核出部位は癒着はなし。看護者からは，「Cさんは突然の帝王切開に戸惑い児の状態に不安そうな表情だったが，元気に我が子を出産できたことで出産体験に満足が得られたようだった」と語られた。

(2)看護支援内容

分娩方法の選択の際にも，C さんは様々な不安や葛藤があったと考えられるが，医師の説明のもと，自ら経膣分娩の希望し，医師からは経膣分娩を試みるが状況によっては帝王切開になることの説明をされた。このように分娩方法について選択を迫られ，様々な不安を抱えていたであろう C さんに対し，医師と C さんとの関わりは見られたが，看護者は「この場面においても，十分に関わる時間を持つことが出来なかった」と振り返った。実際に，妊娠の全期間を通して，外来通院中は医師の関わりが中心となっており，看護者の関わりはなく，看護者が振り返りの際に記録を確認しても C さんとの関わりに関する記述は全くなかったということだった。分娩時には緊急帝王切開となったため，看護者は「術前術後の声掛けを行うなどして，少しでも不安を軽減できるように努めた」と振り返っていた。

Ⅴ．考察

今回，大きな子宮筋腫を合併し，妊娠初期に開腹による子宮筋腫核出術を受けた子宮筋腫合併妊婦 1 例について,妊娠経過・心理過程と看護者の支援について検討した。

子宮筋腫合併妊娠では，妊娠期，分娩期，産褥期において様々なリスクがあると言われている。子宮筋腫はおよそ 30％に過多月経，骨盤痛，不妊を訴え[20]が，しばしば無症候性のものが多い[21]。そのため，妊娠判明時に初めて子宮筋腫の診断を受けることも多く，不安の中で，突然に様々な選択を迫られることもある。今回の事例においても妊娠の喜びと同時に，自分自身の身体に大きな子宮筋腫があることを知り，突然のことに戸惑いがあったのではないかと推察される。また，C さんは子宮筋腫核出という子宮筋腫合併妊婦が経験する妊娠中の手術に関して，手術後に看護者に直接，不安を訴えるようになり，看護者は支援の必要性を初めて認識し，直接的な支援を行うことができた。このような不安は手術前から継続的にあった可能性が考えられるが，C さんの不安の訴えを聞く環境が十分に整っていなかったため，看護者が不安を早期に捉える事が出来ていなかったのではないかと考えられる。

妊娠初期は子宮筋腫による妊娠や胎児への影響，子宮筋腫核出術を受けた場合はそれが胎児の発育に影響を与えていないかなど，さまざまな不安が生じやすい時期であると考えられる。また，妊娠 22 週以前は胎動も感じにくく，胎児の成長を感じることが出来ない時期であるため，その不安は増大しやすい時期であると考えられる。山内ら[22]は，妊娠が中断される危機にあるとき，その週数

が若いほど妊婦やその家族にとって，生まれてくる児の生存と障害に対する不安が大きいと述べている。岩澤らが [23]，胎児の生存と成長の確認を得ることで危機的状況から回復すると述べているように，子宮筋腫合併妊婦においても胎動を感じるようになるまでは，胎児心拍を頻回に確認したり，超音波による児の画像を用いて，胎児の元気な様子を患者と共に確認するなどして，胎児の成長を感じられるような支援が必要である。しかし，妊婦健診が 4 週間に 1 回の時期では妊婦健診時だけでは，十分な支援は難しいと考えられる。そのため，このような妊婦がいつでも不安等の気持ちを表出したり，胎児の様子を確認できるような状況を整え，それに関わる看護者の傾聴の技術の習得が必要である。また，看護者自身も超音波エコー技術を習得し，妊婦に胎児の様子を的確に伝えられるような技術を身につけ，そのような場の提供ができることが望ましいと考えられる。

次に，妊娠中の子宮筋腫核出術については，報告によって違いはあるものの手術による流産の危険性は 12%前後で出現するとも言われており [24]，妊娠中の保存的療法と手術的療法の適応については施設により方針が異なるのが現状である。しかし，平松らは，妊娠中の子宮筋腫核出術を約 100 症例に実施した結果，妊娠中の子宮筋腫核出術に伴う流産のリスクはあるが，最大のメリットは術後には切迫流早産や疼痛，遷延分娩，癒着胎盤などのリスクは消失し，核出後は約 85%の患者で子宮筋腫に伴う症状が消失し，通常の妊婦と同様の生活ができるようになると述べている [25]。子宮筋腫合併妊娠の取り扱いについては，先行研究において様々な検討がされているが，保存的療法を行うことによって切迫流早産率による入院が高率であったとの報告 [26~28]や，切迫早産による入院加療の後，常位胎盤早期剥離と癒着胎盤を呈した症例の報告 [29]がある。一方，保存的療法が原則であるが，症状の出現により子宮筋腫核出術を施行したことで，妊娠継続ができ，生児を得たという報告もある [30), 31]。このように，子宮筋腫合併妊娠の取り扱いには一定の見解がないのが現状であり，施設ごとに基準を設けている。今回の施設においても，施設独自に妊娠中の子宮筋腫核出術の基準を設けており，この基準に沿って医師の判断のもと，手術が行われていた。看護者にこの基準について尋ねたところ，全ての看護者が把握していなかった。このような状況から，子宮筋腫合併妊婦に対する看護援助内容についても決まった支援モデルもなく，施設によって子宮筋腫合併妊婦の捉え方も多様であるのではないかと考えられる。子宮筋腫合併妊婦は前述したようなリスクを発症する可能性があり，正常妊婦とは異なる経過をたどる場合も少なくはない。しかし，その認識は個々のスタッフによりさまざまであり，その対応にも多様性がある。そのため，子宮筋腫合併妊婦の妊娠経過について，全ての看護者が共通の認識を持てるような機会を設け，正しい知識と共通の認識もと，看護支援を行えるよう環境を整える必要性があると考える。

また，妊娠の継続と共に，分娩方法の選択を迫られ，子宮筋腫の位置や大きさ，子宮筋腫核出術の施行の有無などによっても，分娩方法の決定が左右される。子宮筋腫核出術後の分娩様式については， Vaginal Birth After Cesarean（VBAC）同様に安全に行えるとの報告 [32]や，子宮破裂 [33]や手術創の離開 [34]を認めたとの報告もある。このような分娩方法の選択の場面においても，医療従事者は正しい情報と知識を提供し，妊婦の自己決定を支援する必要性がある。そのためには，医師と看護者が相互に共通理解のもと，患者の気持ちを傾聴し，あらゆる選択肢の中から妊婦が自分自身で選択・決定出来るような環境を整える必要があると考えられる。

今回の事例の経過と看護者の関わりを振り返って，子宮筋腫合併妊婦に起こりうる子宮筋腫核出術，切迫流産，分娩方法の選択いうプロセスの中でのいろいろな場面で，妊娠継続への不安や胎児への不安，戸惑いなどが表出された。しかし，妊婦健診時の外来看護者の関わりを振り返ってみると，外来ナースは多数の妊婦健診や婦人科検診等の補助につくことが多く，1 人の患者に十分な

時間を設けて話を聞いたり，指導を行ったりするのが難しい現状がある。このように，妊婦健診時と病棟入院時では，主に関わる看護者が異なる場合が多いのが現状である。このような場合，外来と病棟スタッフ間でハイリスク妊婦の認識にずれがあったり，十分な連携が取れていないと，妊娠から出産までの継続的な看護支援ができていない。そのため，外来・病棟スタッフ間で共通理解のもと，通院中の妊婦の継続的支援を行うためには，外来スタッフも妊婦の状態を十分に把握し，情報を病棟スタッフに伝達する必要がある。そのためには，少しでも保健指導等の場と時間を設け，患者が自由に気持ちを表出できる体制を整える必要性がある。児玉ら[35]の報告でも，妊婦は外来で時間をかけて話が出来ることを評価していると述べている。そして，その場での情報を記録として残すことで，他のスタッフも 1 人の妊婦の妊娠経過についていつでも把握できるようなシステムが必要である。

また，今回の研究中に B 病院勤務の看護者数名に子宮筋腫合併妊婦に対する支援の必要性についても尋ねたところ，「通常妊婦と変わらない」という回答があり，子宮筋腫合併妊娠はハイリスク妊娠として捉えていないことも明らかとなった。このような現状から外来通院中の子宮筋腫合併妊婦に対して看護者が積極的に関わる機会が少なく，対処的な看護支援を行うことしかできないという実情に至っていると考えられる。妊娠・分娩・産褥経過における子宮筋腫合併妊婦の妊娠から分娩後までの心理面や，看護援助内容については十分な検討がされていない。そのため，このように多様な経過をたどる子宮筋腫合併妊婦への看護支援は確立しているとは言えず，そのため子宮筋腫合併妊婦に対する看護支援の指針がなく，対処的な看護支援しかできなかったのではないかと考えられる。これらのことからも，子宮筋腫合併妊婦の妊娠中から産褥期にかけての支援モデルを導入し，正しい知識と判断のもと，支援を行えるような工夫が必要であると考える。これら子宮筋腫合併妊婦の外来診察や保健指導に関するクリティカルパスを用いて，子宮筋腫合併妊婦に関して共通の支援ができるクリティカルパスを用いるなどの工夫が必要であると考える。

今後，子宮筋腫合併妊婦に対し，適切な情報提供が行われることにより，子宮筋腫診断の早期受容，妊娠期間や出産，産褥期における自身の身体や児への不安軽減につながるようなコミュニケーション支援が必要であると考えられる。また，身体的，精神的リスクの早期発見を図り，妊娠・分娩産褥期における様々な選択が患者自身の決定で行うことができるような保健指導法を検討する必要があると考えられる。これらの支援方法が確立することにより，子宮筋腫合併妊婦を抱える産婦人科外来病棟で高水準の看護支援の提供を目指す必要がある。

VI. 結論

子宮筋腫合併妊婦は妊娠期から産褥期にかけてさまざまなリスクを発症する可能性があり，これら子宮筋腫合併妊婦に関わる看護者は，そのリスクと多様な妊娠経過について十分な知識を持って，看護を行う必要性がある。今回，子宮筋腫合併妊婦 1 事例の妊娠経過と関わった看護者の看護の現状を分析した結果，次のような看護への示唆を得た。

1. 子宮筋腫合併妊婦がいつでも気持ちを表出し，胎児の様子を確認できるような環境を整え，それに関わ
る看護者の知識・技術の向上に努める。
2. 妊娠初期など，胎動を感じにくい時期には，胎児心拍を頻回に確認したり，超音波による児の画像を用
いるなどの工夫をし，胎児の成長を感じられるような支援が必要である。
3. 外来・病棟スタッフ間で共通理解のもと，通院中の妊婦の情報を共有し，継続的な支援を行う。

4. 子宮筋腫合併妊婦への正しい情報・知識の提供や，患者の自己決定を支援する。
5. 全ての医療従事者に，子宮筋腫合併妊婦に関する知識の提供を行い，子宮筋腫合併妊婦に関して共通
　の支援ができるクリティカルパスを用いるなどの工夫が必要である。

Ⅶ. 今後の課題

今回の研究では，医師や看護者の記録とインタビューによる振り返りに基づいた情報によるものであったため、限られた情報の中での結果の記述であった。また，1 症例のみの検討であり，子宮筋腫合併妊婦でもその経過は様々であるため，今後は症例数を増やし，さらなる検討が必要であると考える。今後も子宮筋腫合併妊婦は増加すると考えられ，子宮筋腫合併妊婦の各期に合わせた看護支援をまとめていきたいと考える。

謝辞

本研究にご協力を頂いた B 病院の院長先生，師長様，スタッフの皆様に深謝いたします。

表 1：妊娠初期における妊娠経過と看護者の語り

妊娠週数	看護場面	妊娠経過	看護者の語り
9 週 2 日	外来	84mm 大の筋層内子宮筋腫あり，本人初めて子宮筋腫の存在を知ったとのこと。子宮筋腫核出術（病院基準により）の必要性を説明し，同意あり。	
		fetal heart beat（FHR）(+)，crown rump length（CRL）23.4mm	
10 週 5 日		やや切迫様症状が見られたため，ダクチルを処方する。	
11 週 5 日	病棟		感冒症状の訴えはあったが，手術や子宮筋腫，胎児に対する不安等の訴えはなかった。
11 週 6 日		開腹子宮筋腫核出術施行。	
12 週 1 日		状態落ち着いているため，ズファジラン点滴からダクチル内服に変更する。	赤ちゃんは大丈夫かな？など，胎児の安全に対する不安の訴えが聞かれるようになった。ドップラーにて児心音を頻回に確認することで，安堵した表情や「よかった」と安心した言動が見られるようになった。 手術までは特に不安の訴えはなかった C さんが，手術直後から急に不安を訴えるようになって，もしかしたら手術前から胎児の安全に対する不安があったけど，表出できなかったのではないか。
12 週 2 日		CRL69.2mm，ベビー元気に動く，echo-free space（EFS）(-)。	胎児が無事に成長していることに安堵する表情が C さんからも見られ，「よかった」という発言もあり，次第に不安が軽減していった様子であった。
12 週 5 日		術後経過良好，子宮筋腫核出術の創部も問題なし，通常退院を許可する。	経過良好で，不安等の発言は聞かれなくなった。
12 週 6 日		CRL68.5，EFS(-)。	
13 週 1 日			退院日にドップラーにて胎児心拍確認し，良好であった。 入院中は，ドップラーで胎児心音を毎日，一緒に確認をするなどして，胎児の元気な様子を確認し，C さんの不安の軽減に努めようとした。
14 週 1 日	**外来**	**胎児の成長良好，子宮頸管長良好。正常経過。**	
15 週 2 日		**胎児の成長良好，子宮頸管長良好。 子宮内きれいで筋腫核出創不明，正常経過。**	

表 2:妊娠中期における妊娠経過と看護者の語り

妊娠週数	看護場面	妊娠経過	看護者の語り
18 週 2 日	外来	胎児成長良好，正常経過。	
18 週 3 日	病棟	出血(+)，痛みなし，子宮口開大なし，切迫流産による出血の可能性あるので自宅安静， fetal heart rate(FHR) (+)， 羊水正常。 頸管に出血性ポリープあり切除する。	夜間，受診があったが診療補助のみの関わりしかできなかった。 突然の出血で赤ちゃんの状態が危ないのではないかと不安そうな表情をしていた。
18 週 5 日	外来	24 日以降出血なし， 子宮頸管ポリープ(−)，子宮膣部びらん中程度，易出血性，子宮軟らかい。膣洗浄し，クロマイ挿入する。 子宮頸管ポリープ，びらんからの出血であった可能性高い。	外来中心の関わりであり，十分な関わりはできていない。C さんは妊婦健診中は医師が関わることが中心で，子宮筋腫核出後のハイリスク妊婦であるという認識はあまりなく，その後の妊娠経過や C さんに対する直接的な支援は出来ていなかった。 C さんの気持ちに十分に配慮した関わりが出来ていなかったと思う。
21 週 5 日		胎児成長良好，性別は男。 羊水・胎盤正常，正常経過。	
25 週 5 日		胎児成長良好，正常経過。	出血が落ち着いた頃からは徐々に胎動も感じるようになったからか，特に不安の訴えはなかった。

表 3:妊娠末期における妊娠経過と看護者の語り

妊娠週数	看護場面	妊娠経過	看護者の語り
34 週 0 日	外来	子宮筋腫核出術後であることからも選択帝王切開の選択肢もあることの説明をするも，経膣分娩希望あり。胎児成長良好。経膣分娩を試みるが状況によっては帝王切開になることを説明し，了承を得る。	この場面においても，C さんと十分に関わる時間を持つことが出来なかった。
		分娩評価:8cm 大の子宮筋腫核出後，強化・誘発禁，力みすぎないように吸引するかも…もしくは選択的帝王切開にするか検討する。	
37 週 0 日		胎盤白色梗塞著名，経膣予定だが筋腫核出後でもあり，予定日越えるようなら選択的帝王切開もあることを伝える。	

妊娠週数	看護場面	妊娠経過	看護者の語り
38 週 0 日	外来	分娩評価：正常経過①子宮筋腫核出術後②羊水過少③臍帯巻絡④サイヌソイダルパターン⑤胎盤白色梗塞にて選択的帝王切開にするべきか。 non-stress test（NST）前半サイヌソイダルパターンあり，刺激でリアクティブ。	
39 週 0 日		biparietal diameter（BPD）89mm，NST 大変動はあるが小変動少ない，NST・レントゲンにて総合的判断を行う。	
40 週 1 日	病棟	サイヌソイダルパターンあり，緊急帝王切開術となる。 胎児胎盤機能不全，臍帯真結節（ベビー側），子宮筋腫核出術の創部をそぐように切開，筋膜癒着少なめ，骨盤内癒着もそれほどない，子宮は筋腫を核出した場所が分からないくらい，子宮横切開，羊水混濁（+），子宮前壁セプラフィルムあり，腹膜よせるように縫合し，腹筋と腹膜の間にセプラフィルム張り閉腹，術後やや収縮不良は核出術創からか。 【分娩・出生児情報】 2942g，男，アプガースコア 9/10， 出血 378ml。	術前術後の声掛けを行うなどして，少しでも不安を軽減できるように努めた。 C さんは突然の帝王切開に戸惑い児の状態に不安そうな表情だったが，元気に我が子を出産できたことで出産体験に満足が得られたようだった。
退院 1 週間後	外来	子宮収縮正常。手術創良好。	

文献

1）高橋真理，工藤美子．母性看護学概論．東京，医学書院，193-194，　2007.

2）杉本充弘，中川潤子．腫瘍合併妊娠の取り扱い－子宮筋腫．産科と婦人科．2001，68，590－596.

3）Cunningham FG，Gant NF，Leveno KJ，et al(eds)．Williams Obstetrics，ed21．New York，Mc Graw Hill，926－930，2001.

4）明石祐史，馬場剛，佐藤正樹他．疼痛管理に難渋した子宮筋腫合併妊娠の 1 症例．産科と婦人科．2006，73(3)，403－408.

5）木村泉，藤田芳子，　濱由紀子．婦人科腹腔鏡下手術のクリニカルパスとバリアンス分析．石川県立中央病院医学誌．2003，25，69－72.

6）疋田菜穂子，金沢千勢子，　山川加奈子．産婦人科手術における看護の実際 腹式単純子宮全摘術を受けた患者の 1 事例を通して．臨床看護．1958，11（13），1927－1938.
7）中島紀子，深沢優子．手術を控えた患者の不安の緩和をとおして学んだこと 子宮筋腫患者の事例をとおして．クリニカルスタディ．1984，5（10），　81－85.
8）松沢京子,飯田昌子．婦人科手術を受ける患者の精神的看護を考えて．クリニカルスタディ．1984，5（5），81－87.
9）佐藤香代子，鈴木則子．子宮筋腫のある患者の術前・術後の看護，クリニカルスタディ．1983，4（10），80－83.
10）宇田川泉，岩水志津子，小池由香他．子宮摘出術を受けた患者の心理状態　回復過程をたどる患者との面接を通しての一考察．日本看護学会論文集　母性看護．2010，40，69－71.
11）謝敷千尋，勝連洋子，當山清子他．子宮動脈塞栓術に対する看護標準化の検討　看護師へのアンケート調査．沖縄県看護研究学会集録．2010，25，25－28.
12）福島洋子．巨大筋腫を合併した妊婦における排便機能障害への看護．　臨床看護．1999，25（14），2155－2160.
13）河野美江，戸田稔子．心理社会的困難性を有する 10 代出産の検討．思春期学．2010，28（1），154－159.
14）立花桂，鈴木葉子，鈴木朋子他．切迫早産妊婦のストレスコーピングに対する看護介入についての研究．日本看護学会論文集　母性看護．2008，38，127－129.
15）蓼沼由紀子，今関節子．切迫早産により入院中の妊婦の予期的不安．母性衛生．2005，46（2），267－274.
16）岩田千恵，森岡美沙．多胎児を持つ母親の不安とその要因　妊娠から産後 1 ヵ月を通して．中国四国地区国立病院機構・国立療養所看護研究学会誌．2009，5，　245－248.
17）寺島陽子．切迫早産で入院した双胎妊婦の心理過程．日本看護学会論文集　母性看護．2008，38，109－111.
18）松原茂樹，水上尚典，佐藤郁夫．QOL の向上を目指した治療の選択と工夫・子宮筋腫合併妊娠．産婦人科の実際．1998，47，2187－2191.
19）小池俊光，佐藤郁夫．子宮筋腫と妊娠　子宮筋腫合併妊娠の問題点．臨床婦人科産科，2002，56，273－277.
20）森田峰人．不妊症患者における筋層内子宮筋腫の腹腔鏡下筋腫核出術後の妊娠予後の検討．東邦医学会雑誌．2005，52(3・4)：206－210.
21）佐川典正，伊東宏晃．女性性器疾患合併妊娠の管理　子宮筋腫．ペリネイタルケア．　夏季増刊．2000，136－138.
22）山内かずよ，押谷文子，槙下いく子他．ハイリスク妊婦の看護　大阪府立母子保健総合医療センターの実践　母性棟の看護．助産婦雑誌．1992，46（7），551－560.
23）岩沢和子，月僧厚子，市村尚子他．切迫流産妊婦の入院体験に関する研究 妊娠早期から産褥 2 ヵ月まで追跡して．日本助産学会誌．1993，7（1），44－51.
24）平松祐司，関場香．合併症妊娠に対する手術適応と手術時間　妊娠中の子宮筋腫核出術その適応と手術時の注意点．産婦人科手術．1992，3，80－88.
25）松原茂樹編，平松祐司著．子宮筋腫．ペリネイタルケア　夏季増刊．2007，152－159.

26）斎藤央、三原崇文、米沢優他.：子宮筋腫が妊娠に及ぼす影響について．産婦人科中国四国会誌．1998，47(1)，25－28.
27）八木重孝，南佐和子，帽子英二他．当院における子宮筋腫合併妊娠の検討．産婦人科の進歩．2007，59(2)，148－150.
28）神津円，濱井葉子，今西由紀夫．当科における子宮筋腫合併妊娠についての検討．日本産婦人科東京会誌．2004，53(2)，283－286.
29）新井理水，村岡光恵，髙木耕一郎他．妊娠 31 週に常位胎盤早期剥離と湯約胎盤を呈した粘膜下筋腫合併妊娠の 1 例．日本産婦人科東京会誌．2005，54(2)，248－252.
30）高田舞子，湯山公美子，青木道子他．巨大子宮筋腫合併妊娠の 4 症例．栃木県産婦人科医報．2006，33(1)，19－23.
31）中野宏城，千々和真理，柴田晴弘．巨大子宮筋腫合併妊娠で妊娠中に筋腫核出術を施行し後日生児を得た一例．西脇市立西脇病院誌．2003，3，28－33.
32）牧野真太郎，田中利隆，竹田省．前回帝王切開および腹腔鏡下筋腫核出後の経膣トライアル成績について．産婦人科の実際．2008，57(8)，1311－1314.
33）松原英孝，伊藤誠，西迫潤他．妊娠 28 週で発症した子宮筋腫核出術後の子宮破裂の 1 例．産婦人科治療．2003，87(6)，728－730.
34）有馬香織，谷口智子，福田雄介他．筋腫核出術後妊娠 38 週で帝王切開術を施行し，術中子宮筋層に創部離開を認めた 1 例．日本産婦人科東京会誌．2007，56(3)，345－348.
35）児玉紀代美，河原のぶ子．当センターの助産外来の現状と課題　実施後の調査より．滋賀母性衛生学会誌．2010，10（1），34－37.

論文

性に関する親子間コミュニケーションのあり方の検討
−男子を持つ母親の語りの検討−

梅﨑みどり[1)]，富岡美佳[1)]

キーワード：思春期，親子間コミュニケーション，性教育

要旨：本研究の目的は，中学 3 年生から大学 4 年生までの男子を持つ母親が，恋愛に関する話題を子どもから伝えられた時に，母親が抱く気持ちのあり様を明らかにすることである。研究対象は，中学 3 年生から大学 4 年生までの男子がいる母親 10 人であった。データ収集方法は，半構成的インタビューとし，質的帰納的に分析を行った。その結果，子どもの成長に伴い交際を知った時の母親の気持ちは中学生・高校生・大学生の時期により変化をしていた。家庭における性に関する親子間のコミュニケーションでは，中学生では，子どもの成長過程を理解したうえで，男女交際でのエチケットやお互いを思いやることの大切さ，高校生では，性の自己決定ができるアドバイス，さらに，大学生では，社会人としての自覚が育まれるような発達段階に応じた親子間コミュニケーションを行うことが重要であることが示唆された。

Ⅰ．はじめに

近年，我が国における思春期の子どもたちの性行動は低年齢化の傾向を示し，それに伴う人工妊娠中絶，性感染症の増加が問題となっている。1955 年から 2007 年までの人工妊娠中絶実施率の年次推移によれば，20 歳未満だけで増加しており [1)]，「健やか親子 21」の中間評価 [2)]（2006）では，10 代の性感染症罹患率は増加傾向にあると報告されている。こうした背景には，正しい知識をもたない状況での性行為が関連しているものと考えられる。また，思春期の子どもの性の問題には，家庭での親子間のコミュニケーションが関係していることが報告されている [3)]が，親子間では性に関する話題は避けてしまいがちなテーマである。家庭での性教育に関する研究で親を対象としたものは少なく，思春期の子どもの異性との交際に関する親の受け止め方や，コミュニケーションのあり方は明確にされていない。

そこで本研究では，中学 3 年生から大学 4 年生までの男子が，恋愛に関する話題を母親に伝えた時に，母親が抱く気持ちのあり様を明らかにし、家庭における性に関する親子間コミュニケーションのあり方を検討することを目的とした。

[1)] 山陽学園大学看護学部看護学科

Ⅱ. 研究方法

1. 研究参加者

研究参加者は，A 市内の中学 3 年生から大学 4 年生までの男子がいる母親 10 人を対象とした。参加者の内訳は，中学 3 年生をもつ母親 4 人，高校 2 年生をもつ母親 4 人，大学生をもつ母親 2 人である。

2. データ収集期間

調査期間は 2010 年 8 月から 9 月であった。

3. インタビュー内容

研究目的に沿って研究者が作成したインタビューガイドに基づいて半構成的面接を行い，参加者から自由な語りを得た。

4. データ収集方法

中学 3 年生から大学 4 年生までの男子がいる母親 10 名に研究者が調査の主旨を説明し，同意が得られた参加者に対し，希望の場所で 1 回 20 分程度の半構成的インタビューを行った。なお，参加者の了解を得て，IC レコーダーとメモによるインタビュー内容の保存を行った。

5. データの分析方法

録音したテープとメモをもとに逐語録を作成し，それをデータとして質的帰納的分析を行った。分析の手順として，IC レコーダーに録音したインタビューデータの内容を読み込み，文脈ごとに区切り，カテゴリーを抽出した。

6. 分析結果の妥当性の検討

データ分析過程では，質的研究の専門家によるスーパーバイズを受け，カテゴリーの妥当性を高めた。

7. 倫理的配慮

研究参加者には，調査の趣旨を説明して承諾を得，調査に同意した後でもいつでも調査協力の撤回ができることを保証した。また，調査後の個人データは，全て匿名化し,本研究以外に使用しないことを説明した。

Ⅲ. 結果

1. 研究参加者の背景（表 1）

表 1 研究参加者属性

	子どもの学年
A	中学3年
B	中学3年
C	中学3年
D	中学3年
E	高校2年
F	高校2年
G	高校2年
H	高校2年
I	大学2年
J	大学4年

2．研究参加者の特徴

10 人の参加者が語った，恋愛に関する話題を子どもから知らされた時の心理的変化は，『子どもへの信頼』を中核カテゴリーとする 13 のカテゴリーと 32 のサブカテゴリーで構成された(表 2)。特に中学生では，性的な行為を懸念した母親の『戦略』と『決意』という経験世界が表出されていた。以下，導きだされた各カテゴリーとそれを構成するサブカテゴリーについて述べる。文中では，抽出されたカテゴリーを【　】，サブカテゴリーを《　》で示し，語りの一部を「　」斜体で表した。また，参加者は A～J の仮名を用いた。

3．中学 3 年生の息子の母親

中学 3 年生の母親は，予期せぬ息子の交際相手の訪問を【予想外なことへの戸惑い】として受けとめ，受験勉強に集中して欲しいという気持ちから【よりによって受験期にという苛立ち】を体験していた。また，中学生が異性と交際することに対して【“変なこと”になるのではという焦り】を感じ，思っていることをストレートに伝えられない【舵取りできないもどかしさ】や【私から離れていく寂しさ】を表現していた。そして，息子を【信じる努力】が語られた。

1）予想外なことへの戸惑い

中学 3 年生の母親は*「突然，彼女が来たよ。もうびっくり(A)」*と，予期せぬ息子の交際相手の出現に動揺し，《突然の訪問への驚き》を感じたと語っていた。また，家族が共有するパソコンで息子と交際相手がメールのやり取りをしていたために，その内容を偶然知ることになったことについて《あからさまにされることの不快感》を語っていた。

2）よりによって受験期にという苛立

高校受験を控えた息子をもつ母親は，中学 3 年生になったら，何よりもまず学業を優先して欲しいと願っていた。しかし，息子は好意を寄せる異性との交際をスタートさせたために，受験期の親の気持ちを無視されたと感じ，*「受験期になって彼女ができた。どうして今なのって思う。こっちは受験でピリピリしているのに(A)」*という，《緊迫を逆撫でされる怒り》を感じたことを語った。そして，異性との交際によって学業に専念できなくなり，息子の気持が《浮かれることへの懸念》を抱いていた。 また，とにかく受験が無事に終わって欲しいと願い，《ひとまず受験》という心理状態であったと語った。

3）“変なこと”になるのではという焦り

突然，息子の部屋に交際相手が遊びに来たことで，俄かに母親は無知な状況での行動を危惧し始め，*「まだ，中学生よ(B)」*と，《時期早尚》という判断をしていた。そして，息子が《女の子を傷付けることへの不安》を感じていた。そして，*「彼女が遊びに来た時は，わざと大きな足音をさせながら階段を上がるようにする(D)」*という，《親密さの中断》という具体的な行動をとっていた。また，息子と交際相手が 2 人きりで過ごしている状況に気を揉み，状況の把握と 2 人だけの空間に風穴を明けるための戦略として，*「弟(5 歳)に偵察に行かせて，お兄ちゃんとお姉ちゃんはどうだったって聞いたよ(A)」*という，《歯止めの偵察》を行っていた。さらに，息子の部屋のドアは開けたままにしておくという，《頑とした密室の回避》を実行していた。そして，これだけは伝えなければならないと決意し，*「“変なこと”をしたらダメだよって，これだけは言う(B)」*という《けじめの表明》をしていた。

4）舵取りできないもどかしさ

参加者たちは，自らの人生経験を踏まえ，高校受験が息子の人生において将来の方向性を決定する重要な通過点であり，息子の望む方向に進路選択ができるように，今は持てる力の全てを

勉強に充てて欲しいと感じ，異性との交際ではなく，勉強に集中して欲しいと願っていた。しかし，実際には*「あまり付き合うことにあれこれ言ったら，付き合うことを隠すようになるかも。それも困る…(B)」*と，《忠告へのためらい》を感じていた。

5）私から離れていく寂しさ

思春期は身体的な著しい成長と共に心理的にも自立を遂げるまでの過渡期であるため，これまで築いてきた母親との関係にも変化が生じるようになる。*「それは嫌よ。これまでは私の言うことを聞いていたのに…(B)」*と，息子の心に自分以外の女性の存在が大きくなりつつあることに対して，【私から離れていく寂しさ】を体験していた。

6）信じる努力

息子の恋愛に，戸惑い，苛立ち，焦り， もどかしさ，寂しさといった様々な感情を体験している参加者たちであったが，同時に息子の心に近づこうとする心の動きが多く語られた。*「彼女ができてもしかたないかな(A)」*と《容認への歩み寄り》を示し，息子のこれまでの成長過程を知る《母親だからわかる息子》に対して【信じる努力】が表現されていた。

4．高校 2 年生の息子の母親

高校 2 年生の母親は，母親の勘で【息子の交際を予感】し，息子が成長する姿に《重なる自分の青春の時》を感じていた。そして，息子の交際を【人並みの成長への喜び】と表現していた。しかし,同時に息子の成長に【追いつかない心の整理】を体験していた。そして，異性との交際を容認し，息子の成長した姿に【我が子を信じたいという思い】を感じていた。

1）息子の交際を予感

*「彼女ができたと本人は言わないけど，彼女はいると思う(H)」*と，息子の雰囲気や態度の変化，表情の違いなどから《母親の勘》を働かせていた。しかし，息子との関係性が変化することをためらい，息子に恋愛について《面と向かって聞けない遣る瀬無さ》を体験していた。参加者の中には，息子の過去の行動から《彼女の存在への慣れ》を自覚しているものもあった。そして，高校 2 年生の恋愛には《受験生としての自覚が前提》であることが示された。

2）人並みの成長への喜び

「嬉しい。人並みに青春を楽しんでくれると思うと嬉しい(E)」という，《青春謳歌への喜び》を語り，息子が成長する姿に《重なる自分の青春の時》を自覚していた。

3）追いつかない心の整理

息子の交際相手の存在に《息子の彼女への嫉妬》や，*「今まで私の言うことだけ聞いていたあの子が，ほかの女の人の言うことを聞くようになると思うと寂しい。正直ちょっと複雑よ(F)」*という，《私以外の女性の出現》に対するもどかしさや，息子の成長に母親が【追いつかない心の整理】の状態であることを語った。

4）我が子を信じたいという思い

思春期には親に知られたくない部分が膨らみ，親との間に距離を置く気持ちと，自分自身への関心が高まる。しかし，幼少期からの親子の関係性によっては，*「うちの息子、彼女ができたとか結構オープンにしゃべるよ(G)」*と，抵抗を感じることなく母親に交際相手のことを打ち明けるケースもある。そして，*「ある程度任そうと思う(E)」*という語りのように，【我が子の行動を信じたいという思い】が語られていた。

5．大学生の息子の母親

大学生の母親は，結婚を意識する気持ちから息子の恋愛を【一般的であるという安心】として受

け止めていた。同時に，社会的に順番を守って欲しいとする思いから【婚前妊娠へのこだわり】を強くしていた。そして，成長した息子からの言葉に【子どもへの信頼，「間違いがなかった育て」への自負】を体験していた。

1）一般的であるという安心

*「うちの息子はもう 22 歳だから(J)」*の語りのように，《恋愛適齢期への到達》について自覚し、息子が年齢相応の成長を遂げていることについて《普通であることへの安堵》を感じていた。

2）婚前妊娠へのこだわり

経済的な問題や結婚に伴う責任の重さなどから，《結婚という高いハードル》があることを自覚していた。そして，結婚をしてから子どもを授かるという《順番は守って欲しいという願い》を語っていた。

3）子どもへの信頼，「間違いがなかった子育て」への自負

*「本人が『俺，結婚前に彼女が妊娠することがないように気をつけている』って。息子と自然にそういう話ができるようにならないといけない(L)」*と，息子を信頼し，自らの【間違いがなかった子育て」への自負】を感じていた。

表2　男子をもつ母親の性に関する親子間コミュニケーションを構成するカテゴリー

カテゴリー	サブカテゴリー
予想外なことへの戸惑い	突然の訪問への驚き
	あからさまにされることへの不快感
よりによって受験期にという苛立ち	緊迫を逆撫でされる怒り
	浮かれることへの懸念
	ひとまず受験
“変なこと”になるのではという焦り	時期早尚
	親密さの中断
	女の子を傷付けることへの不安
	歯止めの偵察
	頑とした密室の回避
	けじめの表明
舵取りできないもどかしさ	忠告へのためらい
私から離れていく寂しさ	私だけのものから離れる不安
信じる努力	容認への歩み寄り
	母親だからわかる息子
息子の交際を予感	母親の勘
	面と向かって聞けない遣る瀬無さ
	彼女の存在への慣れ
	受験生としての自覚が前提
人並みの成長への喜び	青春謳歌への喜び
	重なる自分の青春の時
追いつかない心の整理	息子の彼女への嫉妬
	私以外の女性の出現
	正直ちょっと複雑
我が子を信じたいという思い	開かれた息子との関係
一般的であるという安心	恋愛適齢期への到達
	普通であることへの安堵
婚前妊娠へのこだわり	結婚という高いハードル
	順番は守って欲しいという願い
	我が子の行為への覚悟
	「婚前妊娠はやめて」に反発する子どもへの怒り
子どもへの信頼，「間違いがなかった子育て」への自負	自然体で話せることの喜び

Ⅳ．考察

1．性に関する親子間コミュニケーション

思春期とは、およそ中学生から高校卒業前後までの 10 代の頃を指し，身体的な変化とともに心理的にも非常に混乱する時期である。この時期には親との関係で生じる様々な葛藤を調節しながら心理的な自立を調整することが課題となる[5]。斎藤[6] は，中学生の親を対象とした性に関する子どもとの会話に関する研究で，日常会話は親子でするが，性を恥ずかしい事ととらえている親が多いため親子間での性に関する会話は少ないことを示している。本研究においても，親子間での恋愛に関する会話は日常的にはされていなかったことから，息子の交際相手の訪問を《突然の訪問への驚き》と受け止め，無知な状況での行動を危惧する気持ちを抱き，《女の子を傷付けることへの不安》へと変化したことが明らかとなった。中学生にとって親子間のコミュニケーションは重要であり，日本家族計画協会[3]が行った調査によれば，親子で会話することが性交の開始年齢を遅らせることにつながると報告している。このように中学生の性に関する親子間コミュニケーションでは，性をタブー視せずに語ることの重要性が明らかとなった。そして，具体的な知識やリスクのみならず，男女交際でのエチケットやお互いを思いやることの大切さなどを日常の会話のなかで伝えることの必要性が示唆された。

高校生の場合では，木原[7]は，わが国の若者の性行動は，若年化，性交渉相手の多数化，性交渉相手の多様化など大きく変貌しており，背景となる性容認率や性経験率の高さは家族との会話の乏しさや親の無理解感などと強く関連することを報告している。本結果からは，《母親の勘》により，息子の交際を予感するが，息子に異性との交際について《面と向かって聞けない遣る瀬無さ》があることが語られた。そして，母親は，息子が 17～18 歳という第二次性徴による身体的な変化だけでなく，心理的にも性役割を獲得することが重要な時期であることを認識し，息子の恋愛を【人並みの成長への喜び】として受け止め，自らの青春の時を重ね合わせることで息子に共感し，交際を容認することが明らかとなった。斎藤ら[8]は，高校生の性意識と性行動に関する研究で，高校生が性に対して自分の意見を明確にもち，性の自己決定について教育を行うことが重要であると述べている。このように，高校生の親子間コミュニケーションでは，性行動が活発化する社会的な環境にあっても，自らのライフサイクルの全体像をイメージし，自己の性行動について自己決定ができるアドバイスを行うことが重要と考えられた。

青年期にある大学生の場合では，本結果からは，母親は，大学生になった息子には就職，結婚などを視野に入れた将来の生き方について意思決定することが重要であると認識しており，《恋愛適齢期への到達》を自覚し、息子が年齢相応の成長を遂げていることについて《普通であることへの安堵》を感じていた。そして，*「本人が『俺，結婚前に彼女が妊娠することがないように気をつけている』って。(L)」*と，成長した息子に信頼を寄せ，信頼関係を基盤としたコミュニケーションが行われたことが明らかとなった。このように，無藤ら[10]がいうように，異性との親密な関係を構築し将来の伴侶の獲得がめざされる性的に重要な時期にある大学生には，社会人としての自覚が育まれるようなコミュニケーションを行う必要があると考えられた。

2．恋愛に関する話題を経験する母親の心理的プロセス

落合[5]は，中学生の親子関係の特徴を，親が危険から守る親として子どもに接することであると述べている。これは，子どもが大人に近づくことで生じる幼少の頃とは異なる危険から子どもを守ろうとすることである。本結果からは，中学 3 年生の母親が交際相手の訪問を【予想外なことへの戸惑い】として受け止め，中学生の恋愛を《時期早尚》と判断した。そして，《女の子を傷付けるこ

とへの不安》を感じ，瞬時に《親密さの中断》や《歯止めの偵察》という『戦略』と「*“変なこと”をしたらダメだよって，これだけは言う(B)」という*《けじめの表明》を行っていたことが明らかとなった。このように，母親は中学生の恋愛を子どもへの危険としてとらえ，危険を回避する反応を示したと考えられる。しかし，いつまでも，親が子どもを自分の管理のもとにおいておこうとすることは子どもの自立を妨げるため，第二次性徴が発現する以前から親子で性に関するコミュニケーションをはかり，子どもの成長を予測しながら見守ることのできる関係づくりが重要であると示唆された。

高校生の母親の場合には，本結果からは，【息子の交際を予感】し，恋愛を容認するまでに，【人並みの成長への喜び】と【追いつかない心の整理】というアンビバレンスなプロセスがあることが明らかとなった。岡本ら [9]によれば，中年女性の葛藤は，子どもの親離れに伴うものが多いことが示されているが，本調査の参加者も*「今まで私の言うことだけ聞いていたあの子が，ほかの女の人の言うことを聞くようになると思うと寂しい。(F)」*という，《私以外の女性の出現》に対するもどかしさや寂しさを表現していた。このように，子どもの成長に伴い，親子関係は変化することを心に留め，母親自身の成長や発達についての長期的な展望をもち，職業や学習，社会的な活動など何か打ちこめるものへの積極的な関与を準備し始めることが必要であると考えられた。

大学生の母親の場合には，本結果からは，*「本人が『俺，結婚前に彼女が妊娠することがないように気をつけている』って。息子と自然にそういう話ができるようにならないといけない(L)」*という，息子の言葉から自らの子育てについて肯定的な評価をしていることが明らかとなった。尾形 [11]は青年期の子どもは，親からの心理的自立という発達課題があり，子どもの心理的自立にともなって親側も自身の子育ての結果として現状に対峙することが求められると述べている。このように，母親は，青年期に達した子どもの姿から自分自身の子育てについての評価や自分自身への評価を行うことが明らかとなった。

3．『子どもへの信頼』を中核とする親子間コミュニケーション

中学生の場合には，本結果からは，息子の恋愛に関する話題についての戸惑い，苛立ち，焦り，もどかしさ，寂しさといった様々な感情の後に*「彼女ができてもしかたないかな(A)」*と交際《容認への歩み寄り》を示し，息子のこれまでの成長を知る《母親だからわかる息子》に【信じる努力】をしていることが明らかとなった。子どもは自立の過程において，母親に見守られることや心の支えでいてくれることを望むことから，母親が息子に【信じる努力】をすることは，子どもの発達段階に応じた自立を促し，自己実現に向かう意欲を引き出すことにつながると考えられた。

高校生になると親子の関係は互いに関わりにくく難しい時期に入る。2004 年に実施された全国高校生調査 [12]によれば，高校 3 年生の性交経験率は，男子 30%，女子 39%であり，都会と地方に差はないことが示されている。本結果では，彼女との交際を容認した母親は，息子の常識ある判断を期待し，【我が子の行動を信じたいという思い】でいることが明らかとなった。

大学生の場合には，本結果からは，息子の恋愛を【一般的であるという安心】と受け止めながらも，母親の価値観から【婚前妊娠へのこだわり】が表出されていた。そして，成長した息子の言葉から【子どもへの信頼，「間違いがなかった子育て」への自負】を体験したことが明らかとなった。子どもの自立により親子の関係は上下の関係から，自然に向き合える対等な関係へと変化する。大学生の母親は子どもへの信頼を確実なものにすることで，同じ大人としての新たな関係を築いていくことが考えられた。

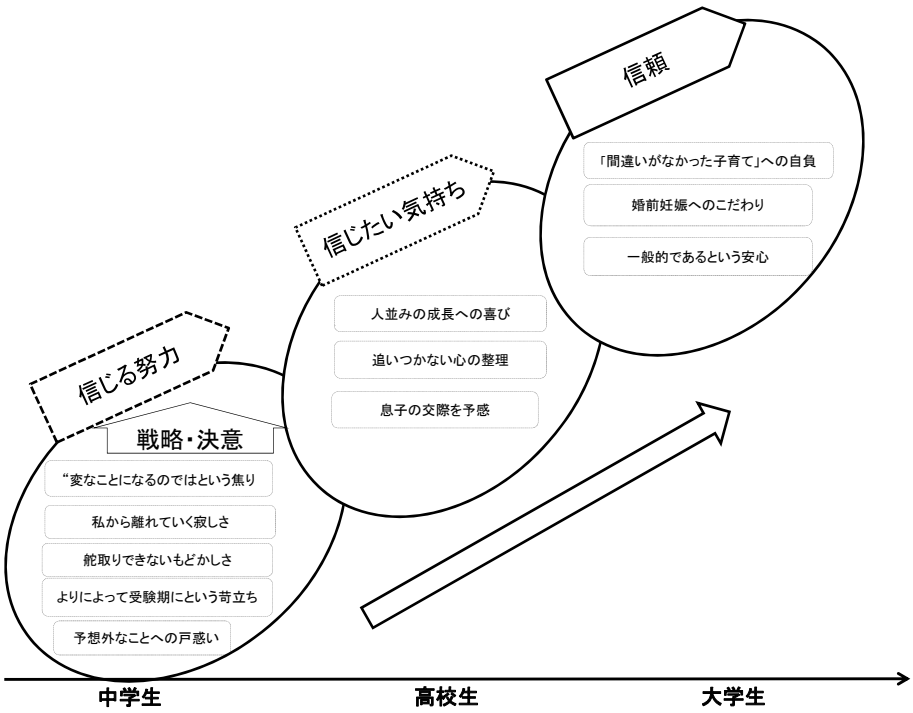


図1　性に関する親子間コミュニケーション「子どもへの信頼」 概念図

Ⅴ. 本研究の限界と課題

研究参加者がA市内に居住する中学3年生から大学4年生までの男子がいる母親10名と限られており，親子間コミュニケーションのあり方を網羅するには限界がある。

今後の研究課題として，継続的な研究により中学生，高校生，大学生の子どもがいる母親の恋愛の話題に関する受け止め方や学年間での違い，子どもが女子の場合などについて明らかにし，親子間コミュニケーションのあり方を検討する必要がある。

Ⅵ. 結語

1. 中学生，高校生，大学生との性に関する親子間のコミュニケーションは，『子どもへの信頼』を中核カテゴリーとする13のカテゴリーと32のサブカテゴリーで構成されていた。
2. 性に関する親子間コミュニケーションは，中学生では，子どもの成長過程を理解したうえで，男女交際でのエチケットやお互いを思いやることの大切さ，高校生では，性の自己決定ができるアドバイス，さらに，大学生では，社会人としての自覚が育まれるような発達段階に応じた親子間コミュニケーションを行うことが重要である。
3. 子どもの成長に伴い，恋愛に関する話題を経験する母親の心理的プロセスには，「信じる努力」「信じたい気持ち」「信頼」があり，中学生においては『戦略』と『決意』という特徴的な表明があった。

引用文献

1)　独立行政法人国立女性教育会館（2009）. 男女共同参画統計データブック, ぎょうせい.137-138
2)　「健やか親子 21」中間評価報告.
3)　日本家族計画協会（2003）.男女の生活と意識に関する調査結果の概要 性に関する知識・意識・行動について, 社団法人日本家族計画協会.
4)　粕井みづほ, 青野明子（2008）. 発達と家族の心理学, KOMI.
5)　落合良行（1998）.中学3年生の心理, 大日本図書
6)　斎藤益子, 木村良秀, 宍戸章予（2005）.中学生をもつ親の二次性徴発現時の子どもへのかかわりおよび性に関する子どもとの会話に関する検討, 思春期学, 23（1）, 154-158.
7)　木原雅子（2009）.現代社会の若者の性行動, 母子保健情報, 60, 59-62.
8)　斎藤益子, 木村良秀（1999）.高校生の性意識と性行動に関する実態, 思春期学, 17（2）, 263-271.
9)　岡本祐子, 松下美知子（1998）.女性のためのライフサイクル心理学, 福村出版.
10)　無藤隆, 麻生武, 内田伸子ら（1995）.自己への問い直し 青年期, 金子書房.
11)　尾形和男（2006）.家族のかかわりから考える生涯発達心理学, 北大路書房.
12)　木原雅子ほか（2008）. 若者に見られる性行動とSTD 田中正利（編） 性感染症STD改訂2版, 南山堂, 87-98.

翻訳

ロシアのポストモダン哲学について

尾崎誠[1)]、ヴァシリィ・グリツエンコ[2)]、

タチアーナ・ダニルチェンコ[3)]、中富清和[4)]

キーワード:　ポストモダン、超テキスト、学際性、統合化

第1章　現代世界の危機とポストモダン

2011年の春と秋に、世界の東西にわたって衝撃を走らせた大きな事件が二つ起った。一つは日本における津波と原発事故であり、もう一つはヨーロッパにおけるギリシャの財政危機である。これらの出来事はいったい何を意味するであろうか。今や世界は終末を迎えているのであろうか。

かつてヤスパースは2500年前にソクラテス、孔子、釈迦、イエス等人類の教師達が出現した時代を人類史における第一次枢軸時代と呼び、現代はもはや彼等の教説もその効力を失い、終末へと至り、新しい歴史の原理を希求する第二次枢軸時代に入ったと明言した。同時代のハイデッガーも、現代は古代ギリシャに始まった西洋の歴史も終焉に達し、今や新しい歴史を開始すべき「別の元初」を求める時代であることを予告した。特にハイデッガーはソクラテス以前の古代ギリシャを「最初の元初」とし、その根底に深く隠された根源に復帰すべきことを訴えた。古代ギリシャはヨーロッパ文化史の源泉であり、回帰すべき故郷である。今やギリシャが国家破産の危機に直面しているヨーロッパでは、なぜさらにその負の遺産を背負ったギリシャをあくまでも執拗に救済しようとするのか。その理由は、ハイデッガーが古代ギリシャに帰れと叫んだことと無関係ではあるまい。およそヨーロッパ人にとって古典とは古代ギリシャとローマの古典を意味する。それほど古代ギリシャはヨーロッパ文化にとっては心の故郷なのであろう。

現代世界の危機とは古代ギリシャに始まった西洋文化の崩壊を意味し、それに取って代るべき新たな思考原理、認識パラダイムを模索すべきエポックを迎えたということであろう。ここにポストモダンの新しい歴史の原理が探求されねばならない不可避的必然性があるといえよう。

かつて2000年前、イエスは「神の国」の近き到来を信じたが、結局それは到来せず、未来へ延期された。その未来とは、聖書の物語によれば、世界史の終末に復活したキリストとしてのイエスが再び到来する時であると予言されている。しかし、イエスの死後、パウロはその遠い未来を待たずに、イエスの人格と行為において既に「神の国」が先取りされて実現されたと見なした。即ち、イエスをキリスト・救世主として同一化したのである。これが人間イエスを神格化したキリスト教なので

1) 山陽学園大学総合人間学部言語文化学科教授
2) ロシア国立クラスノダール大学文理学部哲学科主任教授
3) 同講師
4) 千葉県立東金商業高校教諭

ある。つまり、イエス自身の「神の国」信仰としての原始キリスト教とパウロがイエスをキリストと認知したキリスト教との間には質的転換が生起したのである。それはイエスからパウロへの拡大化路線であり、その前身たるユダヤ教からの脱皮でもあった。しかし、世界史は未だに「神の国」の実現に至らず、むしろますます混迷し、いよいよ終末的様相をさえ帯びてきている。世界史の終末と共に、キリストの再来によって「神の国」が達成されるという期待は、未来への希望として未完成のまま残されている。つまり、キリストは現代ドイツの先鋭的神学者ユルゲン・モルトマンがいうように、「途上の存在」なのである。ヨーロッパの精神的伝統としてのキリスト教は今やその終末論的事態に巻き込まれているのであろうか。

今年世界に起った大きな出来事は、もはや既存の思惟方法が破綻し、通用しなくなったことの事実上の証しであろう。今やハイデッガーやヤスパースが夙に予想したように、歴史の転換期を迎えて、新たな思惟のパラダイムを求める時期にさしかかっているといえよう。しかもハイデッガーはますます発展する科学技術文明の反面たる危険性も同時に警告していたが、それもその最先端の事故という形で現実となった。ドイツが対岸の火事としてではなく、自らの問題としていち早く政治決断を下したのも、いかにも哲学の国らしい。

そのドイツではヘーゲルも「終りにおいて初めて始めに到達する」(『精神現象学』)と終末即始元の円環史観を呈示したが、東洋では特に『易経』以来、中国古典に共通する「終始」という時間観念が存在論的原理として確立され、終りに達して再び始めに還るという無限の循環論が支配的である。19世紀清の時代、康有為は儒学の伝統的「下降史観」に対して、「上昇史観」を提唱したのも、単に西洋の進化論や進歩史観の直接的影響だけではなく、そのような歴史的背景による影響作用の表れでもあろう。ヘーゲルの進歩史観を唯物論に逆転したマルクス主義も、ベルリンの壁やソ連邦共産主義政治体制の崩壊によって、既に無効となった。そして最近は、そのような今日のロシアにおけるポストモダンな動きを垣間見ることもできるようになった。

ここにポストモダンにおける思惟の新たな傾向を示すものとして、現代ロシアにおける動向を紹介する。本稿の第2章は、ロシア国立クラスノダール大学のヴァシリィ・グリツエンコ教授のロシア語原文「現代人文学のポストモダンな参照点」を同大学のタチアーナ・ダニルチェンコ博士が英訳し、中富が準備的に邦訳し、尾崎が監訳したものである。

第2章　現代人文学のポストモダンな参照点

現代の学問的探求は集中的な理論的かつ方法論的融合によって特徴付けられる。それは古典的学問と非古典以後のそれとの本質的相違である。我々は何よりも人文学を意味する集中的情報の学問の基本的な方法論的立場について考察しよう。

二つの基本的パラダイムーモダン対ポストモダン

20 世紀の最後の四分の一と 21 世紀の初めにかけての学問の外観と方法論において二つの基本的に共存するパラダイムがある。一つは、17―19 世紀にかけての学問的合理主義の否定と創造的連続である。それは新しい時代に起ったので、近代的様式における学問と方法論としばしば呼ばれる(ハーバマス)。それは一元論、理論と数学的計算と実験との相互作用、及び人工的

言語の使用によって特徴付けられる。この方法論は構造的に機能的なシステムと進化論的アプローチにおいてその最も際立った展開を見出すことができる。

このパラダイムは、自然と社会的生活には固定した構造が存在するという確信、客観的絶対的知識、つまり混沌に対して秩序が全体として存在するという確信に基づいている。

もう一つのパラダイムは、ポストモダニズムと呼ばれ、ポスト構造主義、脱構築、超モダニズムも同意義である。運動、加速化、不確実性、移行性へ排他的に注意が払われるのが、この認識の主な特徴である。ポストモダニズムの最も方法論的に明確なものは、脱構築、ポスト構造主義、リゾームに体現されている。当初、それはドゥルーズ、リオタール、ボードリヤール、デリダ等の作品に基づいて発展してきた哲学的文化的方向に明らかに示されていた。この場合、ポストモダニズムはポスト構造主義として特徴付けられる。

モダンとポストモダン様式との方法論的ないかなる綜合も未だ起ってはいないが、ある成果として、モダンな学問的知識において発展してきた、これらの新しい方法論的原理とアプローチを学際的、綜合的、仮想性、進化論的認識論等と呼ぶことは可能である。

情報と「人格―機械」思考

多くの点において、ポストモダニズムは情報・コンピューター・テクノロジーと「人格―コンピューター」思考の集中的発展の下での方法論的反省の成果である。

今や現実そのものとなった「人格―コンピューター」思考は認識論的状況の新しいタイプのみならず、また新しいタイプの個人をも生み出したのである。ペンをもって考えること、タイプライターを打つこと、それらとコンピューターとは違ったタイプの思考であり、それぞれメリットとデメリットとがある。これは別の反省すべき課題である。

テクノロジーとポストモダンの諸言説とは人の思考方法をも変えてしまった。いったいマス・コミュニケーションの電子的手段、即ち超テキスト・テクノロジーの興起と共に、「グーテンベルク銀河」と呼ばれる線形テキストの支配する文化の終末が訪れた。グローバル・ネットワークを生み出した直近の十年間は、この過程において特別の考察を要する本質的な改善をもたらした。一次元的テキストから電子的多様な超テキストへの変化が到来したグローバル・ネットワークの仮想的環境においてはテキスト空間の本質的に新しい組織化の形態が生じるのかどうかということが、問題である。

コンピューターの形態における超テキストは、参照によって提供されるすべての点で、一瞬にして一つの情報量を別のそれへと移行させてしまう。テキストはもはやある方向や構造や境界をもったものとして線形的に作られるものとは考えられず、もはやグーテンベルクの機械とモダンな様式には対応しなくなり、ポストモダンな態度を体現することとなる。

モダン記号論の変化と認識論的形態としての超テキスト

テキストとその多様な形態とは本質的に認識論的価値をもつ。線形的言説の体現としての印刷されたテキストは、その古典的理解においては科学的理論のイメージが起きる基礎である。一貫性、独立性、完全性といった論理的諸要求は線形的言説の組織化の原理から導出される。複合的対象の全面的体系としての理論についての認識論的表象は、印刷された語の記号形態に直

接的に依存する。

テキストの現代版は間テキストである。間テキストの基本的構成要素は借用、引用、他のテキストの模倣や回想である。引用により、テキストは反省的形成において修正される。即ち、テキストの中のテキストとなる。

超テキストはテキスト空間の組織化の複合的、非線形的形態として理解される。超テキストにおいては、テキスト素材の組織化は、その句、段落、節が線形的連続的に配置されるのではなく、それらの間で移行可能な形態において配置されるというような仕方で構築されるのである。これらのコミュニケーションを用いて、線形テキストの一群を形成しながら、いかなる秩序においてもテキスト素材を読むことができる。多量のコミュニケーションをもった拡張的素材の場合、複合的超テキスト空間の形態において記号論的ネットワークが形成される。テキスト単位のそのような高度な形成と閲覧とはコンピューターによってのみ可能である。

超テキストと超テキスト・テクノロジーのイメージに従って、基本的な認識論的結論を定式化しよう。

現代のコンピューター的隠喩によれば、超テキストは知識、認識活動、科学的理論の組織化の形態となる。それは、個人的欲求の合理化の形態として、言説をレベル分けする代わりに、多量化したいという社会と文化の状況と相関的である。現代の小説や映画、テレビは大衆消費に基づいてそれを上手く維持している。多様な個人が一次元的ではないように、知識の超テキスト的組織化は通常よりもはるかに複雑である。超テキストはそれ自体で、線形的言説における知識の組織化と非線形的リゾームとの結合を可能にする。学位論文がコンピューター的超テキストの類においてその防御と指導を仰ぐことになる日も近いであろう。

超テキストは、その複合性と多次元性により、宇宙の別々の主題についてのイメージではなく、完成された世界像を生む。

多次元と多次元性により、超テキストは学際的アプローチのような現代の方法論的傾向とよりよく両立する。

超メディアの形態における超テキストは、脳の右半球と左半球との思考を等しく維持し、古典的認識論の観点からは両立しないものを結合することができるのである。

最終的に仮想現実の補完によって、超テキストは可能世界の意味論を論理的思考の規範へと変容する。

そうしている間に新しいヨーロッパ社会によるテキストの活版印刷的複製形態の使用は記号論的変化へと導いた。即ち、心的物的暗号化の方法と知識の組織化、思考の反省的基礎、理解の方法と形態が変化したのである。デカルトの分析的方法と古典的学問はテキストの印刷形態の本質的産物である。

超テキストはまたコンピューター・テクノロジーの使用の結果として生じた記号論的変化でもある。超テキストの下に育った新世代の科学者にとっては、線形的言説に基づいたモダンな科学理論と科学的思考は極めて原始的で古代的にさえ見えるであろう。

構造主義あるいはポスト構造主義―哲学的基礎の変化

19 世紀の人文主義的文化においては生活と意識との対立が根本的な対立であった。産業化時代における物質的と理想的生活との対立は物質性、物質的生活を優先することで解決された。

20 世紀の西洋の人文主義的文化においては「生活と意識」とのディレンマは克服され、言語は最も根源的な実在として認識され、主なイデオロギー的対立は「テキストと実在」の対立として認識された。20 世紀の文化においては主観と客観との、技術論的客観主義と仮想的仮構的新神話論との統一が現実性として考えられ始めたのである。

最終的には、イデオロギーの分析、権威の言語とその文化への影響は一般に社会と心情の構造化において政治的言説の根本的役割を示す。ポストモダンのポスト産業化的文明と文化の段階における文明の進歩は、社会の全体主義的構造としての権威の脱構築の必然性と衝突したのである。現代の認識論的分析は方法論としての構造主義はまた全体主義的論理の結果でもあるという結論に導き、従ってそれはポスト構造主義的分析の方法論的様式における不安定な、構造化されていない諸要素の分析によっても追加されるべきである。

20 世紀末には次のような結論に達した。即ち、人類の根源的心的空間として、ある一様な普遍的な世界観の代りに、一群の個別的な、相互に異なる世界観があるということに。20 世紀には我々はニーチェの「神は死せり」のテーゼを繰り返す。それは、情報の下部構造の発展と共に社会における普遍的イデオロギーの死を意味する。しかし、同時に新しい情報の奴隷化が記号論的操作の形で現れたのでもある。

解釈学―言説と翻訳の問題

言語と言語的問題への恒常的注意は現代人文学のみならず、学問的知識全体の特徴的問題でもある。それは知識における言語の根本的役割の認識、民族的科学的世界観の形成、存在論的前提条件の仮定、及び他の理由によって惹き起こされた。

解釈学は現代的学問においてさまざまな形態において根本的地位を獲得してきた。即ち、テキスト解釈の理論と実践として、また新しい存在論を追求する哲学の方向としても。一方では、それはあらゆる学問的問題への入り口であり、他方では、言語問題解決の手段と方法でもある。そしてすべての論理的に与えられた合理的知識は象徴的に明確化された知識であり、従って論理的問題は解釈学として作用する―人文主義的学問あるいは自然科学が存在するかどうか、という問題等。それ故に、テキスト批判と解釈学の中核的概念―言語、テキスト、理解―は、学問的隠喩と概念となったのである。現代人文主義的観念の中心的場所は、ある非言語的出来事―欲望、象徴的行為、論理的操作―を、それらの明確化の独自の場所としての言語へ還元することである。ハイデッガーは、「言語は存在の家である」といった。

多様な言説の仮定に示された多元論と知識の学問的また非学問的形態の同等性の認識と共に、社会学的理論、文芸批評、哲学、及び現代人文学の他の諸分野の特殊な「混成領域」の形成もあったのである。

普遍性、学際性、記号論の危機

ロシア国内の人文学における学際性の発展は 1980 年代における着実な傾向となった。一方では、それは弁証法的唯物論の方法論的危機によって惹き起こされた。弁証法的唯物論と弁証法論理は普遍性をもつ理論、論理、方法論として考えられた。それは促進されたが、同時にまた極端に単純化された方法論でもあった。結局、すべての問題を弁証法論理、方法論、知識理論

へと還元するようなやり方と結びついた方法論の貧困化は、弁証法的唯物論の危機へと導いた。

弁証法的唯物論と弁証法論理の危機は、普遍的方法や生命と知識の法則の認識は時代錯誤であるということになった。他方では、新しい独創的な方法論の導入が起った。ロシアでは共産主義イデオロギーの崩壊以後、以前のいくつかの人文主義的学問分野は消えたか、理論的変容を成し遂げた。科学的社会主義とソ連邦共産党の歴史の変化は他の学問分野―政治科学や社会学―を送り届けることになった。「文化科学」のような学問分野の興起は、歴史、文化、人間的主観性といった人文主義的領域に学際性を導入したのであった。しかし、学際的傾向は人文諸科学だけの特徴ではない。サイバネティクス、仮想論、記号論のような学際的戦略もあった。学際性は、文化哲学等と呼ばれる哲学的反省を通じて、20 世紀のロシア国内の哲学的理論へと浸透し始めたのである。

学際性は現代言語、新しい言説、さまざまな言説の相互関係を要求し、かつそれを中心的と見なす。記号論はこの問題において非常に重要である。人文主義的知識の記号論は学際性の発展の現象・兆候と理解されるに至った。

文化記号論において文化は記号及びテキスト空間として理解される。文化の分析において、文化記号論は文化的形態の形態学と論理に特別の価値を付与する。文化的形態はこのようにして意義深い形成の記号論として、またいろいろな側面に応じて、文化的暗号、メッセージ、テキスト、あるいはモデルとしての役割を演じているものと考えられる。文化的形態の論理とレトリック修辞法として、文化記号論は文化的言説のあらゆる種類の主題をもつ。

文化記号論は文化哲学、言語学、記号論、構造的技術の影響下で発展してきた。それは、文化の法則を開示するために、哲学的、記号論的、構造的、心理分析的分析手法と方法を用いるのである。

言説の分析と言説の多様性

ポストモダン社会ではテクノロジーとその外観は未曾有の発展を遂げた。例えば、時代の様式とイメージとしてのテレビ放送は同時にポストモダン時代の反省と体現でもある。テレビ技術とポストモダンな態度との遺伝的関係性は、二つの考察された現象に同時に固有なものとして、断片性、間テキスト、模擬演習、多元論のような特徴をもつ。挙げられた諸特徴はポストモダンの心情的特徴を反映している。この列挙によれば、広告宣伝は商品世界のみならず、全体としてその社会と思考法の特徴としても考察される必要がある。広告宣伝における多様性は自由社会、自由な思考、方法論の多元性を統合する属性であり、逆に、独占は全体主義的傾向、一元論、原始性の支配を証するものである。

ポストモダンの言説の多様性は文化と意識において認められる。言説の概念は、ミシェル・フーコーの意味では、発話と行為との社会的に惹起されたシステムであり、また具体的な社会文化空間に容認され、かつ支配的な命令的態度に依存するところの言明の実体化の方法と規則でもある。権威、知識、情報、コミュニケーションは、ポストモダニズムの言説であるところの模擬演習の一様な場に出現した。個人は可能な限り、権威と情報の混合の見せ掛けを生じさせている困惑から救われるべきである。ポストモダン世界における全体的模擬演習・実験の影響下から抜け出すための最も効果的な方法は、有効性を知覚する他の特にポストモダンな方法―皮肉―に見出されうる。最後のものは、ポストモダン社会によって説得的に与えられた「異質的一様性」からは区

別された、自己自身の存在の様式を探求することを目指した、特に個人的な実践として理解されるものである。このようにして、時代のメディア的権威を冷笑する目論見の中立化の機会は、このようなポストモダンな方法とテクノロジーを用いて、現代人に固有の目的を実現するというポストモダンの有効性への皮肉な態度に見られるのである。

こうして、現代の学問的探求の実践は、情緒、皮肉、模造がその方法論的環境を獲得するように、より複雑化しているのである。

学際性と統合化

20 世紀末から 21 世紀初めにかけての学問の特徴としての多学際的連合への傾向において、統合化が働く概念的モデルとカテゴリーが実際に人文学者によってより多く使用されてきた。統合化は、通常自己組織化と呼ばれる「混沌からの秩序」という型の移行の法則を研究する。自己組織化とは、進化的実存的構造の複合的開放的非線形的システムにおける形成過程として理解される。「非線形的システム」という術語は、システムの特性がそのプロセスの強度によって影響されることを意味する。開放性は、システムが環境と互いにエネルギー、実体、情報を交換することを仮定する。システムの複合性は、その多様な可能な反動の程度とシステム行動の不可測性の大きさによって見積もられる。ポストモダンな学問の先導として統合化は、すべての「異常」に対して寛容さを示しながら、最も古代的な伝統に関しては、方法論的に私的評論と哲学を含むものである。

統合化は、社会システムの進化の仕方、進化論的危機、脅威、事故、予測の信頼性の諸理由、また哲学、文化科学、社会学、エコロジー、経済学、地政学における予測可能性の基本的限界についての理解に関する新しい方法論を提供することができる。

仮想性、諸可能世界の意味論、真理の多元論

仮想性は学問ではないが、いかなる学問分野でも使用しうるし、また学際性を志向する戦略と呼ばれる学問的アプローチではある。仮想性の観念は、異なる対象間の相互関係を特定化し、それらを階層的レベルに置き、それらの間の特定の態度を規定する―例えば、発生とか相互関係とかの規定。仮想レベルの諸対象は根底的レベルの対象によって発生させられるが、しかし、発生させられたという地位にも拘わらず、発生させる実在の対象と存在論的には同等のものとして協調し合うのである。発生させる実在に関して一連の仮想的対象は仮想的現実を形成する。

仮想性とは、同じ学問の限界内で、相互に還元できない、異なったタイプの現実性の存在を認識することである。我々の意見によれば、仮想性の観念は、世界という装置がより一層深く把握されるような、ヨーロッパ文化にとっては本質的に新しい思考のパラダイムを提供する。

エコ・人間中心主義と共進化の原理

人間にとって根本的に必須な環境は少なくとも四つの測られるべき側面がある。即ち、自然的側面（植物、動物、水、大気）、人工的側面（技術文明の成果）、情報的側面（記号、情報伝達システム）、社会人間的側面（心情と生活様式をもった他の人々）である。多様な社会実践的生活を

営む人間は、一群の天体的、歴史的、文化的、心理的、生物学的リズムの中で生存しているのである。人間生活の多次元性は、学際性ばかりではなく、また人間生活のさまざまな領域―自然、技術、社会、民族、文明等―の相互作用についても説明を求める。何よりも先ず、自然と社会といった二つの超複合的システム間の相互作用が問題である。

それ故に、好むと好まざるとを問わず、ポストモダンな学問はエコロジーと人間中心主義の原理を含む。それはさまざまな形で生じる―生命倫理の要請、学際的学問としてのエコロジーの発展、宇宙論における人間的原理、自然と社会システムとの共進化の原理といった形で。N. モイセーエフは真っ先に自然と社会システムとの共進化の原理について語り始めた。

知識の発展の現代的状況は世界の複合システムの共進化の原理を構築することを容認する。統合化は知識の学際的綜合の基礎として、自然科学者と人文学者との対話、コミュニケーションの国際的学際性、科学と芸術との対話と綜合、科学と宗教との対話、西洋と東洋との対話への基礎として用いられうる。統合化は、共進化の原理、複合的社会システム、さまざまな発展段階にある国々や地域間の共進化の原理を構築する上で我々に知識を与える。

***

上に挙げた諸アプローチは現代的学問のあらゆる理論的方法論的参照点を取り上げたものではなく、学問的態度における最も流行しているものを扱ったにすぎない。独創性とさまざまな学際間の連合はそれらに体現されている。さらに現代的方法論の本質的特徴をすべて挙げたとも保証できない。特に、我々は主に理論的原理に止まり、現代の学問における経験と理論との、根本と応用との相互作用の挑戦については取り上げていない。余りにも多くを包括するのは不可能である。

*****

Abstract

On Post Modern Philosophy in Russia

Trans. by Kiyokazu Nakatomi

In 2011 two sensational events, that had a great impact on the world, occurred. One was the Great Tohoku tsunami and the accident at the Fukushima nuclear plants. The other was the financial crisis in Greece and Europe. However, what do these mean? Is the world facing the end? Once, Jaspers preached that the first Axial Age of the great wise men appeared. Now it is the age where their teachings lost their meaning and man desires a new principle of history. Jaspers called it the second Axial Age. Heidegger predicted that the western philosophy from Greece reached to the end; man should desire a new history of ‘other original beginning’.

In Russia Prof. Vasiliy Gritsenko also is researching for new paradigms and principles

after the collapse of Communism. He provides a new postmodern philosophy that consists of the post-structuralism of France, semiotics, media-theory and hypertext epistemology. The characteristic of his philosophy is non-linear, non-mechanistic and the quality of logic-jump. He calls it synergetics. Addition sometimes brings synergy, sudden increases and unexpected changes. That is adequate with current human thoughts. We have infinite and various possibilities of thought and information. Such philosophy realizes the synthesis of all sciences and anthropology.

平成 23 年 12 月 10 日印刷
平成 23 年 12 月 15 日発行

編集者　山陽学園大学紀要委員会
発行者　山陽学園大学
〒703-8501　岡山市中区平井1丁目14－1

http://www.sguc.ac.jp/